鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(152)

狩俣遺跡
建山遺跡
西原段Ⅰ遺跡

二〇一〇年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(152)

東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

狩俣遺跡
建山遺跡
西原段Ⅰ遺跡

（曽於市大隅町）

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

狩俣遺跡全景（建山遺跡方向を望む）

狩俣遺跡　畝状遺構11

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ）建設に伴って，平成17・18年度に実施した曽於市大隅町に所在する狩俣遺跡，平成20・21年度の建山遺跡，平成21年度の西原段　遺跡の発掘調査の記録です。

狩俣遺跡は，縄文時代から近世までの複合遺跡で，まさに歴史情報の宝庫でした。特に1471年の桜島から噴出した軽石に覆われた畝状遺構が，ほぼ遺跡の全域で発見されていますが，今後，本県の中世における「畠」研究の貴重な資料として期待されると確信します。

建山遺跡の２軒の竪穴住居跡は，新たな縄文時代早期資料として追加され，西原段　遺跡では，新たな発見はできませんでしたが，内陸部遺跡のあり方を改めて検討する機会となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たり協力をいただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，曽於市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成22年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山　下　吉　美

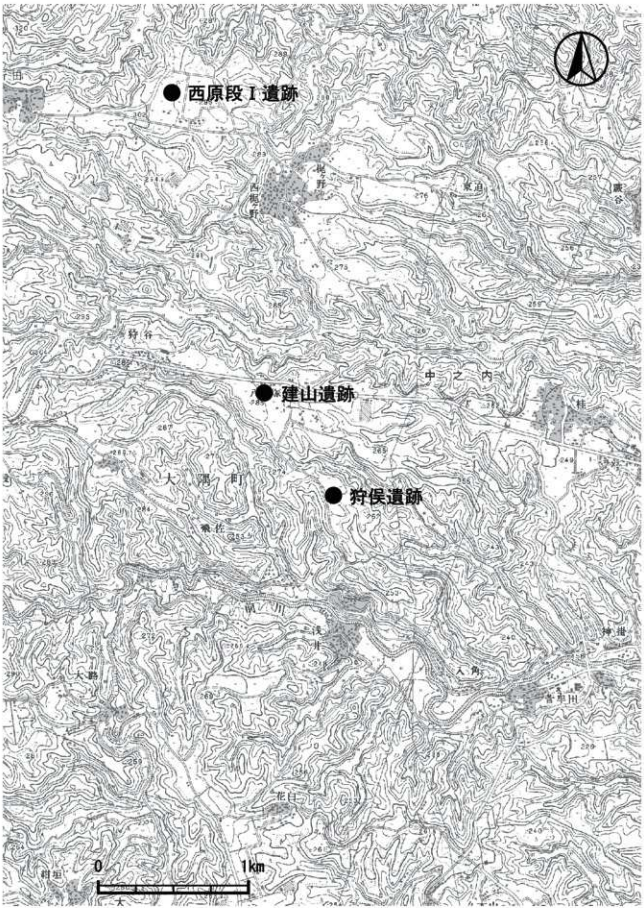
報 告 書 抄 録

ふ り が な	かりまたいせき　たてやまいせき　にしはらだんいちいせき
書　　名	狩俣遺跡　　建山遺跡　　西原段　遺跡
副 書 名	東九州自動車道建設(曽於弥五郎IC～末吉財部IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第152集
編 著 者 名	平木場秀男，楸田岳志，大久保浩二，藤島伸一郎（中村耕治，岩元康成，岩下直樹）
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899 - 4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　　0995 - 48 - 5811
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
かりまた いせき 狩俣遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおし 曽於市 おおすみちょう 大隅 町 いけがわ 岩川 2154他	46217	63･254	31 37 40	130 56 37	確認調査 20010107～20020322 確認・本調査 20051101～20060322 本調査 20060509～20070320	4 ,813 18 ,647	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
たてやま いせき 建山遺跡	おおすみちょう 大隅 町 いけがわ 岩川 2217他	46217	63･253	31 37 50	130 56 14	本調査 20090218～20090319 20090413～20090428	1 ,120	
にしはらだんいちいせき 西原段　遺跡	おおすみちょう 大隅 町 なかのうち 中之内 2731他	64217	63･27	31 39 11	130 56 02	本調査 20090413～20090526	2 ,550	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特記事項
狩俣遺跡	包含地	縄文早期 縄文中～晩期 古代・中世	集石遺構 落とし穴 鉱状遺構，溝跡，古道	石坂式土器，手向山式土器 宮ヶ迫式土器，黒川式土器 土師器，須恵器，墨書土器	
建山遺跡	集　落 包含地	縄文早期 縄文前期 縄文中期	竪穴住居跡 落とし穴	加栗山式土器，桑ノ丸式土器 手向山式土器 轟式土器，曽畑式土器 石鏃，石皿	
西原段　遺跡	包含地	縄文早期	土坑	押型文土器，石鏃，石皿，磨石	

遺跡の概要
狩俣遺跡では，縄文時代早期，中～晩期，古代，中世，近世の遺構，遺物が発見された。縄文時代早期の集石遺構は25基検出され，その周辺からは多くの遺物が出土した。特に中世の鉱状遺構は1471年桜島噴出の軽石に覆われており，削平を受けていない台地部や斜面部などほぼ遺跡全体で検出され，その分布が明らかとなった。 建山遺跡は台地の谷頭に位置し，縄文時代早期前葉の竪穴住居跡が２軒発見された。縄文時代中期の落とし穴も検出され，時代により遺跡の役割が異なっていたことも明らかとなった。 西原段　遺跡では，縄文時代早期の土坑や石鏃，石皿などが発見された。



遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC）に伴う「狩俣遺跡・建山遺跡・西原段　遺跡」の発掘調査報告書である。
2　狩俣遺跡，建山遺跡は鹿児島県曽於市大隅町（旧曽於郡大隅町）岩川に所在し，西原段　遺跡は鹿児島県曽於市大隅町（旧曽於郡大隅町）荒谷に所在する。
3　発掘調査は，平成13，17年度は日本道路公団（現西日本高速道路株式会社），平成18，21年度は国土交通省からの受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査は，確認調査を平成13年度（狩俣遺跡）に実施し，本調査を平成17，18年度（狩俣遺跡），平成21年度（建山遺跡・西原段　遺跡）に実施した。整理作業は平成20年度（狩俣遺跡），平成21年度（狩俣遺跡・建山遺跡・西原段　遺跡）に実施した。
5　本書の遺物番号は遺跡ごとの通し番号であり，本文，挿図，図版の番号と一致する。
6　出土した遺物の実測・トレースの一部は，国際航業株式会社，㈱埋蔵文化財サポートシステム，大成エンジニアリング株式会社に委託した。また，放射性炭素年代測定については，㈱加速器分析研究所，㈱パレオ・ラボ，出土種子の同定については㈱加速器分析研究所に依頼した。
7　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。
8　本書で使用した方位は，すべて磁北である。
9　現地調査に関する実測及び写真撮影は，それぞれ各調査年度の各遺跡調査担当者で行ったが，狩俣遺跡の一部の実測については㈱ジパング・サーベイに，航空写真についてはふじた航空写真，㈲スカイサーベイ九州に委託した。
10　土器の実測・トレース，遺構図の製図・トレース等は，狩俣遺跡は平木場秀男，楸田岳志が，建山遺跡・西原段　遺跡は大久保浩二，藤島伸一郎が中心となり整理作業員の協力を得ながら行った。
11　本書の執筆分担は，次の通りである。

調査に至るまでの経過と環境
　第　一　，　章　　平木場
　第　章　　楸田

狩俣遺跡
　第　，　章，第　一　章の１～３節，第　，　章，第　章の第１，2（古代～近世），4節　平木場
　第　章第４節　　岩元康成
　第　章第４，５節　　岩下直樹
　第　章第４節（縄文～古墳），第　章の第２節（縄文）　　中村耕治
　第　章第４節（古代～近世），５節，第　章の第３節　　楸田

建山遺跡
　第　一　章　　大久保

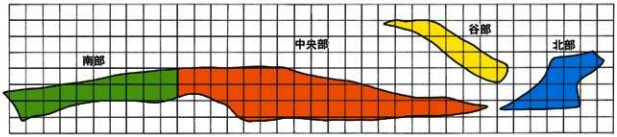
西原段　遺跡
　第　章第１，２節　第　章第１節　　大久保
　第　章第３節，第　章第２，３節，第　章　　藤島

12　本書に掲載した遺物写真の撮影は，西園勝彦，吉岡康弘が行った。
13　本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，狩俣遺跡は平木場，建山遺跡は大久保，西原段　遺跡は藤島が担当した。
14　本報告書に掲載した出土遺物及び発掘調査・整理作業に関わる図面・写真等の記録類は，鹿児島県埋蔵文化財センターで保管し活用する。
15　各遺跡の遺物注記記号は，狩俣遺跡「KM」，建山遺跡「タテ」，西原段　遺跡「NHD」である。

凡　　例

1　調査区

狩俣遺跡は調査区が広範囲であり，谷部や台地部により特徴が異なるため，調査区全体を「谷部」「北部」「中央部」「南部」４つのエリアに分割し，遺構・遺物を掲載した。



各エリアの名称

2　遺構

⑴　遺構図については次の縮尺を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

集石，落とし穴 1/20　　焼土 1/30　　掘立柱建物跡 1/40　　古道，溝，土坑 1/60

⑵　畝状遺構については広範囲に広がるため，遺構規模や形状に応じて1/100～1/300で示している。また，一部の畝状遺構については分割して掲載している。

⑶　遺構図の断面については平面図と同縮尺を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。特に畝状遺構については，凹凸の判別しやすさを優先して示している。

⑷　掘立柱建物跡，土坑等の炭化物集中域については，スクリーントーンで表現している。

⑸　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に新たに付け替えた。

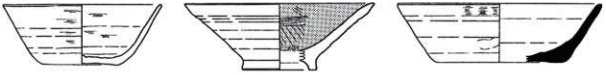
⑹　計画変更による本調査区縮小のため，区域外となった狩俣遺跡の確認トレンチの検出遺構については第　章第３節にて，出土遺物については包含層出土遺物（２，10Ｔ　北部，22～24Ｔ中央部）として取り扱った。

3　遺物

⑴　掲載遺物の縮尺は，土器が1/3，石器は石鏃など小型のものを1/1，石斧など中型のものを1/2，礫石器など大型のものを1/3を基本としたが，個々の大きさによりこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

⑵　土器の外面に付着した煤付着，赤色顔料については，二色刷とアミかけで区別した。

⑶　古代の土器のうち，内黒土師器，須恵器については，アミかけ，断面黒塗りを使用して下のように区別した。



普通の土師器　　内黒土師器　　須恵器

目　　次

巻頭カラー
序　　文
報告書抄録
遺跡位置図
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表　目　次
図版目次
あとがき

本文目次

Ⅰ　調査に至るまでの経緯と環境

第　章　調査に至るまでの経緯　1
第　章　地理的環境　3
第　章　地質的環境　4
第　章　歴史的環境　4
第　章　層位　9

挿　図　目　次

第１図　東九州自動車道遺跡位置図　2
第２図　遺跡周辺地形分類図　6
第３図　周辺遺跡図　7
第４図　基本土層柱状模式図　9

表　　目　　次

第１表　周辺遺跡一覧表　8

Ⅱ　狩俣遺跡

第　章　発掘調査の経緯　11
第１節　調査の概要と経緯　11
第２節　調査の組織　11
第３節　確認調査　16
1　平成13年度　16
2　平成17年度　28
第４節　本調査　28
1　平成17年度　28
2　平成18年度　31
第５節　日誌抄　32
第　章　狩俣遺跡の層位　37
第　章　谷部の調査　39
第１節　調査の概要　39
第２節　谷部の層位　39
第３節　検出遺構　44
1　古代～中世　44
2　中世～近世　50
第４節　出土遺物　59
1　縄文時代　59
2　古墳時代　59
3　古代　59
4　近世　61
第　章　北部の調査　65
第１節　調査の概要　65
第２節　北部の層位　65
第３節　検出遺構　69
1　縄文時代　69
2　古代～中世　75
3　中世～近世　81
第４節　出土土器　91
1　縄文時代　91
2　古代　100
第５節　出土石器　103
1　縄文時代早期　103
2　縄文時代晩期　105
第　章　中央部の調査　111
第１節　調査の概要　111
第２節　中央部の層位　111
第３節　検出遺構　119
1　縄文時代早期　119
2　縄文時代中～晩期　136
3　古代～中世　142
4　中世～近世　150
第４節　出土土器　171
1　縄文時代　171
2　古墳時代　193
3　古代　194
4　中世～近世　203
第５節　出土石器　216

1　縄文時代早期　216
2　縄文時代晩期　230
3　古代　231
第6節　金属製品　235
第　章　南部の調査　239
第1節　調査の概要　239
第2節　南部の層位　239
第3節　検出遺構　243
1　縄文時代　243
2　古代～中世　243
3　中世～近世　251
第4節　出土土器　261
1　縄文時代　261
2　古代　261
3　中世～近世　273
第5節　出土石器　279
1　石鏃　279
2　石匙　279
3　磨製石斧　279
4　磨石　279
5　軽石製品　279
第　章　科学分析　283
第1節　放射性炭素年代測定　283
1　㈱加速器分析研究所測定結果1　283
2　㈱加速器分析研究所測定結果2　286
3　㈱加速器分析研究所測定結果3　288
4　㈱加速器分析研究所測定結果4　291
5　パレオ・ラボ測定結果　293
第2節　種実同定　295
1　㈱加速器分析研究所測定結果1　295
2　㈱加速器分析研究所測定結果2　296
第　章　まとめ　301
第1節　検出遺構　301
1　縄文時代　301
2　古代～中世　301
第2節　出土土器　302
1　縄文時代　302
2　古代　303
3　中世～近世　304
第3節　出土石器　304
1　縄文時代早期　304
2　縄文時代晩期　304
3　古代　304
第4節　鉄状遺構　305
1　変遷について　305
2　栽培作物について　306
3　調査方法について　306

挿　図　目　次

第1図　狩俣遺跡周辺地形図　15
第2図　平成13年度，17年度調査範囲図　17
第3図　2T　縄文時代中～後期　落とし穴1号　18
第4図　2T　縄文時代中～後期　落とし穴2号　19
第5図　2トレンチ遺構配置図　21
第6図　中世　鉄状遺構1　21
第7図　平成13年度トレンチ配置図　21
第8図　23T　縄文時代早期　集石1，2号　22
第9図　23T　縄文時代早期　土坑1，2，3号　23
第10図　23T　縄文時代早期　土坑5，6号　25
第11図　23T　縄文時代早期　竪穴住居跡　26
第12図　23T　遺構配置図　26
第13図　平成13年度確認調査結果　27
第14図　狩俣遺跡　トレンチ配置図　29
第15図　狩俣遺跡　グリッド配置図　30
第16図　狩俣遺跡　基本土層柱状模式図　37
第17図　狩俣遺跡　各地点の層位　38
第18図　谷部　調査範囲図及びトレンチ配置図　40
第19図　谷部　土層断面図(1)　41
第20図　谷部　土層断面図(2)　42
第21図　谷部　土層断面図(3)　43
第22図　谷部　古代～中世　溝状遺構1，2　45
第23図　谷部　古代～中世　溝状遺構3，4，5，6　47
第24図　谷部　古代～中世　溝状遺構7　48
第25図　谷部　古代～中世　土坑　49
第26図　谷部　中世　鉄状遺構2-(1)　51
第27図　谷部　中世　鉄状遺構2-(2)　52
第28図　谷部　中世　鉄状遺構2　断面図　53
第29図　谷部　中世～近世　土坑　54
第30図　谷部　古代～中世　遺構配置図(1)　55
第31図　谷部　古代～中世　遺構配置図(2)　56
第32図　谷部　中世～近世　遺構配置図　57
第33図　谷部　縄文時代の遺物　60
第34図　谷部　古墳時代の遺物　61
第35図　谷部　古代～近世の遺物　62
第36図　谷部　遺物出土状況図　64
第37図　北部　調査範囲図及びトレンチ配置図　66
第38図　北部　土層断面図(1)　67
第39図　北部　土層断面図(2)　68
第40図　北部　縄文時代早期　集石3号　70
第41図　北部　縄文時代早期　集石4号　71
第42図　北部　縄文時代早期　集石5，6号　72
第43図　北部　縄文時代　土坑　73
第44図　北部　縄文時代　遺構配置図　74
第45図　北部　古代～中世　古道1，2　76
第46図　北部　古代～中世　古道3，4，5　77
第47図　北部　古代～中世　古道6，7，8　78
第48図　北部　古代～中世　溝状遺構8，9　79
第49図　北部　古代～中世　土坑　80

第 50 図　北部　古代ー近世　古道９，10
溝状遺構11　82
第 51 図　北部　古代ー近世　溝状遺構10，12　83
第 52 図　北部　中世ー近世　溝状遺構13　84
第 53 図　北部　中世　畝状遺構３　85
第 54 図　北部　中世　畝状遺構４　86
第 55 図　北部　中世ー近世　土坑　87
第 56 図　北部　古代ー近世　遺構配置図　89
第 57 図　北部　中世ー近世　遺構配置図　90
第 58 図　北部　縄文時代早期の土器(1)　92
第 59 図　北部　縄文時代早期の土器(2)　93
第 60 図　北部　縄文時代早期の土器(3)　94
第 61 図　北部　縄文時代早期の土器(4)　96
第 62 図　北部　縄文時代早期の土器(5)，
前期の土器　97
第 63 図　北部　縄文時代後期の土器　98
第 64 図　北部　縄文時代晩期の土器　99
第 65 図　北部　古代の土器　100
第 66 図　北部　縄文時代早期の石器(1)　104
第 67 図　北部　縄文時代早期の石器(2)　106
第 68 図　北部　縄文時代早期の石器(3)　107
第 69 図　北部　縄文時代早期の石器(4)　108
第 70 図　北部　縄文時代晩期の石器　109
第 71 図　北部　遺物出土状況図　110
第 72 図　中央部　調査範囲図及び
トレンチ配置図(1)　112
第 73 図　中央部　調査範囲図及び
トレンチ配置図(2)　113
第 74 図　中央部　土層断面図(1)　114
第 75 図　中央部　土層断面図(2)　115
第 76 図　中央部　土層断面図(3)　116
第 77 図　中央部　土層断面図(4)　117
第 78 図　中央部　土層断面図(5)　118
第 79 図　中央部　縄文時代早期　集石７，8 号　120
第 80 図　中央部　縄文時代早期　集石９，10号　121
第 81 図　中央部　縄文時代早期　集石11号　122
第 82 図　中央部　縄文時代早期　集石12号　123
第 83 図　中央部　縄文時代早期
集石10ー12号配置図　123
第 84 図　中央部　縄文時代早期
集石13，14，15号　125
第 85 図　中央部　縄文時代早期　集石16，17号　126
第 86 図　中央部　縄文時代早期　集石18号　127
第 87 図　中央部　縄文時代早期
集石15ー18号配置図　128
第 88 図　中央部　縄文時代早期　集石20，21号　129
第 89 図　中央部　縄文時代早期　集石22，23号　130
第 90 図　中央部　縄文時代早期
集石20ー23号配置図　131
第 91 図　中央部　縄文時代早期　集石24号　132
第 92 図　中央部　縄文時代早期　集石19，25号　133
第 93 図　中央部　縄文時代早期
集石24，25号配置図　133
第 94 図　狩俣遺跡　縄文時代早期　集石配置図　133
第 95 図　中央部　縄文時代早期
石器集積遺構，土坑　135
第 96 図　中央部　縄文時代中期　落とし穴４号　137
第 97 図　中央部　縄文時代中期　落とし穴５号　138
第 98 図　中央部　縄文時代中ー晩期　焼土１，2　139
第 99 図　中央部　縄文時代中ー晩期　土坑　139
第 100 図　中央部　縄文時代　遺構配置図(1)　140
第 101 図　中央部　縄文時代　遺構配置図(2)　141
第 102 図　中央部　古代ー中世
掘立柱建物跡１号　143
第 103 図　中央部　古代ー中世
掘立柱建物跡２号　144
第 104 図　中央部　古代ー中世
掘立柱建物跡３号　146
第 105 図　中央部　古代ー中世　溝状遺構14，15　147
第 106 図　中央部　古代ー中世　溝状遺構16，17　148
第 107 図　中央部　古代ー中世　土坑　149
第 108 図　中央部　中世ー近世　古道11　150
第 109 図　中央部　中世ー近世　溝状遺構18，19　152
第 110 図　中央部　中世ー近世　溝状遺構20ー24　153
第 111 図　中央部　中世ー近世　溝状遺構25，26　154
第 112 図　中央部　中世　畝状遺構５　156
第 113 図　中央部　中世　畝状遺構６　157
第 114 図　中央部　中世　畝状遺構７，８　158
第 115 図　中央部　中世　畝状遺構９　159
第 116 図　中央部　中世　畝状遺構10　161
第 117 図　中央部　中世　畝状遺構11　162
第 118 図　中央部　近世　畝状遺構12　163
第 119 図　中央部　中世ー近世　土坑(1)　165
第 120 図　中央部　中世ー近世　土坑(2)　166
第 121 図　中央部　古代ー近世　遺構配置図(1)　168
第 122 図　中央部　古代ー近世　遺構配置図(2)　169
第 123 図　中央部　古代ー近世　遺構配置図(3)　170
第 124 図　中央部　縄文時代早期の土器（a類）　172
第 125 図　中央部　縄文時代早期の土器（a類）　173
第 126 図　中央部　縄文時代早期の土器（b類）　174
第 127 図　中央部　縄文時代早期の土器（類）　175
第 128 図　中央部　縄文時代早期の土期
（，，，，類）　176
第 129 図　中央部　縄文時代早期の土器
（，，，類）　178
第 130 図　中央部　縄文時代早期の土器（a類）　179
第 131 図　中央部　縄文時代早期の土器（b類）　180
第 132 図　中央部　縄文時代早期の土器（類）　181
第 133 図　中央部　縄文土器出土状況図
（類，339）　182
第 134 図　中央部　縄文時代早期の土器
（，Ⅺ，Ⅻ類）　183

第 135 図　中央部　縄文時代前期，後期の土器（　，　類）　183
第 136 図　中央部　縄文時代後期の土器（　類）　184
第 137 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　A･a類）　185
第 138 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　A･b類）　186
第 139 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　B類）　187
第 140 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　C･a類　）　188
第 141 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　C･a類　）　189
第 142 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　C･a類　）　190
第 143 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　C･b類）　191
第 144 図　中央部　縄文時代晩期の土器（　C･c類）　192
第 145 図　中央部　古墳時代の土器　193
第 146 図　中央部　古代の土器(1)　195
第 147 図　中央部　古代の土器(2)　196
第 148 図　中央部　古代の土器(3)　197
第 149 図　中央部　古代の土器(4)　198
第 150 図　中央部　古代の土器(5)　199
第 151 図　中央部　古代の土器(6)　201
第 152 図　中央部　古代の土器(7)　202
第 153 図　中央部　中世～近世の土器　203
第 154 図　中央部　遺物出土状況図(1)　211
第 155 図　中央部　遺物出土状況図(2)　212
第 156 図　中央部　遺物出土状況図(3)　213
第 157 図　中央部　遺物出土状況図(4)　214
第 158 図　中央部　遺物出土状況図(5)　215
第 159 図　中央部　縄文時代早期の石器(1)　216
第 160 図　中央部　縄文時代早期の石器(2)　218
第 161 図　中央部　縄文時代早期の石器(3)　219
第 162 図　中央部　縄文時代早期の石器(4)　220
第 163 図　中央部　縄文時代早期の石器(5)　221
第 164 図　中央部　縄文時代早期の石器(6)　223
第 165 図　中央部　縄文時代早期の石器(7)　224
第 166 図　中央部　縄文時代早期の石器(8)　225
第 167 図　中央部　縄文時代早期の石器(9)　226
第 168 図　中央部　縄文時代早期の石器(10)　227
第 169 図　中央部　縄文時代早期の石器(11)　228
第 170 図　中央部　縄文時代早期の石器(12)　229
第 171 図　中央部　縄文時代晩期の石器(1)　230
第 172 図　中央部　縄文時代晩期の石器(2)　231
第 173 図　中央部　古代の石器(1)　232
第 174 図　中央部　古代の石器(2)　233
第 175 図　中央部　金属製品　235
第 176 図　中央部　石器出土状況図(1)　236
第 177 図　中央部　石器出土状況図(2)　237
第 178 図　中央部　石器出土状況図(3)，金属製品　238
第 179 図　南部　調査範囲図及びトレンチ配置図　240
第 180 図　南部　土層断面図(1)　241
第 181 図　南部　土層断面図(2)　242
第 182 図　南部　縄文時代　土坑　243
第 183 図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡４号　245
第 184 図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡５号　246
第 185 図　南部　古代～中世　畝状遺構13　248
第 186 図　南部　古代～中世　土坑　249
第 187 図　南部　古代～中世　遺構配置図　249
第 188 図　南部　古代～中世　炭化木１～３　250
第 189 図　南部　古代～中世　炭化木出土状況　250
第 190 図　南部　中世　畝状遺構14　252
第 191 図　南部　中世　畝状遺構15　253
第 192 図　南部　中世　畝状遺構16　255
第 193 図　南部　中世　畝状遺構17，18　256
第 194 図　南部　近世　畝状遺構19　257
第 195 図　南部　中世～近世　土坑　258
第 196 図　南部　遺構配置図　260
第 197 図　南部　縄文時代の土器　262
第 198 図　南部　古代の土器(1)　263
第 199 図　南部　古代の土器(2)　264
第 200 図　南部　古代の土器(3)　265
第 201 図　南部　古代の土器(4)　267
第 202 図　南部　古代の土器(5)　268
第 203 図　南部　古代の土器(6)　269
第 204 図　南部　古代の土器(7)　270
第 205 図　南部　古代の土器(8)　271
第 206 図　南部　古代の土器(9)　272
第 207 図　南部　中世～近世の土器　274
第 208 図　南部　縄文時代の石器(1)　279
第 209 図　南部　縄文時代の石器(2)，古代の石器　280
第 210 図　南部　遺物出土状況図(1)　281
第 211 図　南部　遺物出土状況図(2)　282
第 212 図　暦年正年代データ(1)　288
第 213 図　暦年正年代データ(2)　290
第 214 図　暦年正年代データ(3)　293
第 215 図　狩俣遺跡　畝状遺構変遷図　305
付　　図　狩俣遺跡遺構配置図

表　目　次

第１表　23トレンチ　土坑計測表　25
第２表　谷部　土坑計測表　58
第３表　狩俣遺跡　石材分類表　58
第４表　谷部　土器観察表　63
第５表　谷部　石器観察表　63
第６表　北部　土坑計測表　88
第７表　北部　土器観察表(1)　101

第８表　北部　土器観察表(2)　102
第９表　北部　石器観察表　109
第10表　狩俣遺跡　集石集計表　134
第11表　狩俣遺跡　集石重量組成表　134
第12表　中央部　落とし穴４号小ピット計測表　137
第13表　中央部　掘立柱建物跡１，２号計測表　145
第14表　中央部　掘立柱建物跡３号計測表　146
第15表　中央部　土坑計測表　167
第16表　中央部　土器観察表(1)　204
第17表　中央部　土器観察表(2)　205
第18表　中央部　土器観察表(3)　206
第19表　中央部　土器観察表(4)　207
第20表　中央部　土器観察表(5)　208
第21表　中央部　土器観察表(6)　209
第22表　中央部　土器観察表(7)　210
第23表　中央部　石器観察表(1)　233
第24表　中央部　石器観察表(2)　234
第25表　中央部　金属製品観察表　235
第26表　南部　掘立柱建物跡４号計測表　245
第27表　南部　掘立柱建物跡５号計測表　246
第28表　南部　土坑計測表　259
第29表　狩俣遺跡　畝状遺構計測表　259
第30表　南部　土器観察表(1)　275
第31表　南部　土器観察表(2)　276
第32表　南部　土器観察表(3)　277
第33表　南部　土器観察表(4)　278
第34表　南部　石器観察表　280
第35表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(1)　285
第36表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(2)　287
第37表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(3)　290
第38表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(4)　292
第39表　測定試料及び処理　293
第40表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(5)　294
第41表　種実同定結果(1)　295
第42表　種実同定結果(2)　297

図　版　目　次

巻頭カラー１　狩俣遺跡全景(建山遺跡方向を望む)
巻頭カラー２　畝状遺構11
図版　1　上空から見た狩俣遺跡周辺　14
図版　2　709　木片付着痕拡大写真　235
図版　3　鉄製品X線写真　235
図版　4　狩俣遺跡出土の植物遺体(1)　296
図版　5　狩俣遺跡出土の植物遺体(2)　300
図版　6　狩俣遺跡遠景（北側より）　355
図版　7　狩俣遺跡遠景（確認トレンチ）　356
図版　8　13年度確認調査１(落とし穴１号ほか)　357
図版　9　13年度確認調査２(落とし穴２号，土坑)　358
図版　10　13年度確認調査３(竪穴住居跡ほか)　359
図版　11　谷部の調査１(調査区全景)　360
図版　12　谷部の調査２(調査風景，土層)　361
図版　13　谷部の調査３(遺物出土状況，溝状遺構)　362
図版　14　谷部の調査４（土坑ほか）　363
図版　15　谷部の調査５（畝状遺構２-　）　364
図版　16　谷部の調査６（畝状遺構２-　）　365
図版　17　谷部の遺物１
（縄文時代，古墳時代，石器）　366
図版　18　谷部の遺物２（古代〜近世）　367
図版　19　北部の調査１（調査風景，土層）　368
図版　20　北部の調査２
（遺物出土状況，集石３〜６号）　369
図版　21　北部の調査３（古道２〜６）　370
図版　22　北部の調査４
（古道９，10，溝状遺構８，11，13）　371
図版　23　北部の調査５(溝状遺構10，12)　372
図版　24　北部の調査６(土坑)　373
図版　25　北部の調査７(畝状遺構3，4)　374
図版　26　北部の土器１(縄文早期　)　375
図版　27　北部の土器２(縄文早期　)　376
図版　28　北部の土器３(縄文早期　)　377
図版　29　北部の土器４(縄文早期　，縄文前期)　378
図版　30　北部の土器５(縄文後期，縄文晩期)　379
図版　31　北部の土器６(古代)
北部の石器１(石鏃)　380
図版　32　北部の石器２(石斧，磨石，石皿ほか)　381
図版　33　中央部の調査１(土層断面)　382
図版　34　中央部の調査２（作業風景）　383
図版　35　中央部の調査３（遺物出土状況）　384
図版　36　中央部の調査４（集石７〜14号）　385
図版　37　中央部の調査５（集石15〜21号）　386
図版　38　中央部の調査６（集石22〜25号）　387
図版　39　中央部の調査７（集石24号，土坑）　388
図版　40　中央部の調査８（落とし穴４号）　389
図版　41　中央部の調査９
（落とし穴５号，焼土，土坑）　390
図版　42　中央部の調査10（掘立柱建物跡１号）　391
図版　43　中央部の調査11
（掘立柱建物跡２，３号）　392
図版　44　中央部の調査12（溝状遺構16〜19）　393
図版　45　中央部の調査13（溝状遺構20，25，26）　394
図版　46　中央部の調査14（畝状遺構５，６）　395
図版　47　中央部の調査15（畝状遺構７〜９）　396
図版　48　中央部の調査16（畝状遺構10）　397
図版　49　中央部の調査17（畝状遺構11）　398
図版　50　中央部の調査18
（畝状遺構12，古道，土坑）　399
図版　51　中央部の土器１（縄文早期　）　400
図版　52　中央部の土器２（縄文早期　）　401
図版　53　中央部の土器３（縄文早期　）　402
図版　54　中央部の土器４（縄文早期　）　403
図版　55　中央部の土器５（縄文早期　）　404
図版　56　中央部の土器６（縄文早期　）　405

図版 57　中央部の土器７（縄文早期　）　406
図版 58　中央部の土器８（縄文早期　）　407
図版 59　中央部の土器９（縄文早期　）　408
図版 60　中央部の土器10（縄文前期，後期）　409
図版 61　中央部の土器11（縄文晩期　）　410
図版 62　中央部の土器12（縄文晩期　）　411
図版 63　中央部の土器13（縄文晩期　）　412
図版 64　中央部の土器14（縄文晩期　）　413
図版 65　中央部の土器15（縄文晩期　）　414
図版 66　中央部の土器16（縄文晩期　）　415
図版 67　中央部の土器17（縄文晩期　）　416
図版 68　中央部の土器18（古墳時代）　417
図版 69　中央部の土器19（土師器　）　418
図版 70　中央部の土器20（土師器　）　419
図版 71　中央部の土器21（土師器　）　420
図版 72　中央部の土器22（土師器　）　421
図版 73　中央部の土器23（土師器　）　422
図版 74　中央部の土器24（須恵器）　423
図版 75　中央部の土器25
（焼塩土器，中世～近世）　424
図版 76　中央部の石器１（縄文早期　）　425
図版 77　中央部の石器２（縄文早期　）　426
図版 78　中央部の石器３（縄文早期　）　427
図版 79　中央部の石器４（縄文晩期，古代）　428
図版 80　南部の調査１（南部全景，土層）　429
図版 81　南部の調査２（作業風景，出土状況）　430
図版 82　南部の調査３（掘立柱建物跡４，５号）　431
図版 83　南部の調査４（歓状遺構13，土坑）　432
図版 84　南部の調査５（土坑）　433
図版 85　南部の調査６（歓状遺構14，15）　434
図版 86　南部の調査７（歓状遺構15，16）　435
図版 87　南部の調査８（歓状遺構16）　436
図版 88　南部の調査９（歓状遺構17）　437
図版 89　南部の調査10（歓状遺構19）　438
図版 90　南部の調査11（歓状遺構11～17）　439
図版 91　南部の調査12（炭化木，土坑）　440
図版 92　南部の土器１（縄文土器，土師器　）　441
図版 93　南部の土器２（土師器　）　442
図版 94　南部の土器３（土師器　）　443
図版 95　南部の土器４（土師器　）　444
図版 96　南部の土器５（土師器　）　445
図版 97　南部の土器６（内黒土師器）　446
図版 98　南部の土器７（墨書土器，線刻土器）　447
図版 99　南部の土器８（須恵器）　448
図版100　南部の土器９（陶磁器），石器　449
図版101　現地指導，現地説明会　450

Ⅲ　建山遺跡

第　章　調査の経緯　307
第１節　調査に至るまでの経緯　307
第２節　調査の組織　308
第３節　調査の経過　309
第　章　調査の概要　310
第１節　調査の方法及び層位　310
第２節　縄文時代早期の調査　312
１　調査の概要　312
２　遺構　312
⑴　３号竪穴住居跡　312
⑵　４号竪穴住居跡　323
３　遺物　325
⑴　土器　325
⑵　石器　330
４　その他　336
第３節　縄文時代前期の調査　337
１　調査の概要　337
２　遺物　337
第４節　縄文時代中期の調査　338
１　調査の概要　338
２　遺構　338
⑴　１号落とし穴　338
⑵　２号落とし穴　338
⑶　３号落とし穴　340
第　章　まとめ　344
１　竪穴住居跡について　344
２　竪穴住居跡の掘り込み面について　344
３　遺物について　344
４　全体を通して　345

挿　図　目　次

第１図　建山遺跡調査範囲図　307
第２図　調査区グリッド図　310
第３図　土層断面図　311
第４図　３号竪穴住居跡　312
第５図　３号竪穴住居跡内遺物出土状況図　313
第６図　３号竪穴住居跡内土器別出土状況図　314
第７図　　類土器・石器出土状況図　315
第８図　３号竪穴住居跡内遺物　318
第９図　３号竪穴住居跡内遺物　319
第10図　３号竪穴住居跡内遺物　320
第11図　３号竪穴住居跡内遺物　321
第12図　３号竪穴住居跡内遺物　322
第13図　４号竪穴住居跡　323
第14図　４号竪穴住居跡内遺物　323
第15図　４号竪穴住居跡内遺物　324
第16図　縄文時代早期の土器　（　類）　326

第17図　縄文時代早期の土器　（　類）　327
第18図　縄文時代早期の土器　（　類）　328
第19図　・　類土器出土状況図　329
第20図　縄文時代早期の土器　（　・　類）　329
第21図　縄文時代早期の石器　330
第22図　縄文時代早期の石器　332
第23図　縄文時代早期の石器　333
第24図　縄文時代早期の石器　334
第25図　縄文時代早期の石器　335
第26図　集石31号　336
第27図　集石31号周辺遺構配置図　336
第28図　a層残存範囲　337
第29図　縄文時代前期の土器　337
第30図　周辺地形と落とし穴配置図　338
第31図　1・2号落とし穴　339
第32図　3号落とし穴　340
第33図　全体遺構配置図（縄文時代早期）　346

表　目　次

第1表　出土土器観察表　341
第2表　出土土器観察表　342
第3表　出土土器観察表　343
第4表　出土石器観察表　343

図　版　目　次

図版1　方形押引刺突文の施文法　345
図版2　遺跡近景　451
図版3　遺物出土状況　地層断面　452
図版4　3号竪穴住居跡　453
図版5　4号竪穴住居跡　454
図版6　落とし穴1号・2号　455
図版7　落とし穴3号　456
図版8　3号竪穴住居跡内土器　457
図版9　3号竪穴住居跡内土器　458
図版10　3号竪穴住居跡内土器　459
図版11　3号竪穴住居跡内土器　460
図版12　類土器　461
図版13　類土器　462
図版14　類土器　竪穴住居跡内出土石器　463
図版15　層出土石器　464
図版16　層出土石器　465
図版17　・　類土器　縄文前期土器　466

Ⅳ　西原段Ⅰ遺跡

第　章　調査の経緯　347
第1節　調査に至るまでの経緯　347
第2節　調査の組織　347
第3節　調査の経過　348
第　章　調査の概要　350
第1節　調査の方法・概要及び層位　350
第2節　遺構　352
1　土坑　352
第3節　遺物　353
1　土器　353
2　石器　354
第　章　まとめ　354

挿　図　目　次

第1図　西原段　遺跡全体図　349
第2図　調査区グリッド図及びトレンチ配置図　350
第3図　土層断面図　351
第4図　層上面コンタ図と土坑位置図・遺物出土地点　352
第5図　土坑　352
第6図　出土遺物　353

表　目　次

第1表　出土土器観察表　354
第2表　出土石器観察表　354

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景　近景　作業風景　467
図版2　遺物出土状況　土坑　468
図版3　トレンチ等調査状況　469
図版4　出土遺物　470

Ⅰ　調査に至るまでの経過と環境

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ）建設を計画し，当該事業区の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会（文化財課）に照会を行った。

これを受けて鹿児島県教育委員会は，平成11年１月に鹿屋串良ＩＣ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡（854 ,100㎡）の存在を報告した。

分布調査の結果を基に，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府の方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討され，併せて遺跡の緻密な把握が求められることとなり，詳細な分布調査や試掘調査を実施することとした。

そこで，文化財課と県立埋蔵文化財センターは，平成13年７月10日～７月26日の間，鹿屋串良ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の33の遺跡についての詳細分布調査を実施し，平成13年９月17日～12月26日までと，平成13年12月３日～12月25日の間，遺跡の範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

上記の詳細分布調査に加え，既に合意されていた本線及び工事用道路部分，側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を平成13年10月１日～平成14年３月22日の間実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間について再度分布調査を実施し，遺跡面積を678 ,700㎡と報告した。

その後，日本道路公団の民営化と新直轄方式に基づく道路建設が確定し，平成15年12月に曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結により，本格的な発掘調査を実施することとなった。

なお，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣ～志布志ＩＣまでの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

狩俣遺跡の調査は，当初道路公団方式に基づきサービスエリアとして計画され，休憩所や駐車場等を備えた広範な45 ,900㎡が対象とされたが，新直轄方式の導入により大幅に工事計画が縮小されることとなった。発掘調査は平成17年11月から開始し，情報の少ない部分では確認調査を本調査と平行して実施し，平成19年３月までに終了した。

建山遺跡，西原段　遺跡の未調査部分の発掘調査は，平成21年３月から確認調査を本調査と平行して実施し，平成21年５月までに終了した。

第１図　東九州自動車道遺跡位置図

第Ⅱ章　地理的環境

狩俣遺跡，建山遺跡は曽於市大隅町岩川に，西原段　遺跡は曽於市大隅町中之内に所在する。曽於市は，鹿児島県の東部を形成する大隅半島の北部に位置し，東側に志布志市，南側に曽於郡大崎町及び鹿屋市，西側に霧島市，北側は都城市と接し，宮崎県との県境に位置している。

北部の財部，末吉市街地は，都城盆地の一角をなし大淀川上流にあたる溝ノ口川，横市川に沿って水田や集落が点在している。中心部の大隅町は，菱田川支流の佳例川，前川，月野川，梅渡瀬川の４河川によって南北に３つの台地に大きく分けられ，これらの河川や支流の小河川に沿って水田が点在し，岩川市街地は菱田川に前川が合流する岩川低地にある。

遺跡の所在する曽於地域を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を外観すれば，東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成されている。東側には志布志湾北部から宮崎県に突出した形で，北から南へ延びている鰐塚山地（鰐塚山1,119m，南那珂山地ともいう）がある。西側は瓶臺山（543m），白鹿岳（604m），陣ヶ丘（430m）と山地が南北に連なり，北東部の都城盆地と南部の肝属平野に傾斜する台地からなっている。そして，この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川，横市川が東流し，菱田川の支流である佳例川，前川，月野川が南東に流れる。地質は，大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。年平均気温は，17.6℃，年間降水量は，約2,230㎜程度である。

狩俣遺跡，建山遺跡，西原段　遺跡の３遺跡が所在する大隅町岩川，中之内地区は曽於市のほぼ中央部にあたり，西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200m～300mの丘陵性台地が卓越する地域である。かつて高隈山地東斜面から鰐塚山地（南那珂山地ともいう）まで広がる地域は一続きのシラス台地を形成していたと思われるが，大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け，小台地群に分断されている。３遺跡はいずれもこうした小台地群に立地している。

狩俣遺跡は，曽於市のほぼ中央部にあたる，西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高約270mの丘陵性台地上に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析により北西から南東に延びるやせ尾根上の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により南北方向にさらに，小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

建山遺跡は，狩俣遺跡と同じく，大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受けた標高約270mの丘陵性台地上に位置している。遺跡の南東側には小さな谷を挟んで同一台地縁辺に狩俣遺跡，高古塚遺跡が所在し，谷底平地を挟んで佐敷台地が広がる。北東側の急峻な谷と南西側の谷に挟まれた台地状に位置し，現地形は圃場整備や土壌改良等により平坦な畑地となっている。

西原段　遺跡は，曽於市大隅町中之内の標高約270mの台地状に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により，南北はさらに，小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

第Ⅲ章　地質的環境

本図幅中にみられる最も古い岩石は，大隅半島の他の地域と同じく，中生界に属するもので，砂岩頁岩の互層よりなる。比較的砂岩部に富んだ急峻な山地を形成し，山体全体の大部分が中生層によって構成されている。西南部の高隈山地では中生層に属する砂岩頁岩の互層を貫いた第三紀中新世の花崗岩がみられる。この花崗岩は風化が著しく，新鮮な露頭はほとんどみられない。これら図幅西側の山地地域では中生界や花崗岩などの基底岩類を覆って溶結凝灰岩，シラスが分布し，局部的に安山岩もみられる。上記すべての岩類を覆って広くローム層が分布するため，平坦部や傾斜の緩やかな斜面ではローム層下位の岩類の露出するところは極めて少ない。

山地地域の東側には広大なシラス台地が広がり，図幅全域のおよそ2/3の面積を占めている。この台地においては，シラスの下位に普遍的に溶結凝灰岩が存在するが，実際に露出しているのは，佳例川，前川，月野川，大鳥川など菱田川上流の本支流の下床部に限られる。同じことがシラスについてもいえ，一般的にはシラスを覆って広くローム層が分布するため直接これが露出するのは，台地を切る河谷の斜面か切り取り面，あるいはかつての崩壊地などである。シラス台地の基底部にも西部の高隈山地を構成する中生界あるいは古第三系に属する固結堆積岩類が全面的に伏在するが，実際には河谷の一部にわずかに露出するか，台地上に島状の小丘を形成して点在するに過ぎない。このシラス下面の中生界と溶結凝灰岩との間には降下軽石層，砂礫層，泥岩層などをはさむことが多い。西部の海岸は大隅半島と鹿児島湾を画するもので，急峻な崖をもって湾内に没し，急傾斜を示しつつ海深200m前後の深度に達する。この斜面は当地域をはじめ大隅半島北部に広く分布するシラスと溶結凝灰岩の大部分が放出された姶良カルデラの東縁を画するカルデラ壁にほぼ相当するものと考えられている。

図幅北西部にはシラス上位に角礫層がみられるほか，最上部にはおもに桜島火山より放出された降下軽石層が数10㎝の厚さで分布し「ボラ」とよばれ農耕上の障害をなしている。

第Ⅳ章　歴史的環境

古代の唐尾遺跡，高古塚遺跡，菅牟田遺跡，中之迫遺跡の立地する場所は，「続日本紀」に日向の国から「贈於」など４郡が分置されたと大隅国分立（和銅６年）の記事に記載されている。律令制下では，日向国諸県郡財部郷に属したとする説が有力である。

中世に島津新立庄としてみえる深川院は財部郷から分立したものと考えられ，大隅国建久図田帳に島津庄の新立庄七五〇丁のうち「深川院百五十余丁」とあり，財部院などとともに保延年間（1135～41）以降の新庄で，近衛家領で惣地頭は中原親能（島津忠久とも），国務に従わなかったと記されている。

また，中世に入ると延文元年(1356)8月6日の「足利義詮袖判安堵下文」(島津家文書）に大隅国本庄内として「岩河村」の名があり，島津貞久に安堵されている。この地は菱田川上流の右岸一帯を中心とし，現曽於市大隅町岩川から同市末吉町南西部にわたる地に比定される。

近世に入ると，文禄３年(1594)8月に北郷忠虎領内として末吉など15カ所・六万九千石の検地が

行われている（「北郷忠虎譜」旧記雑録）。庄内の乱（1599）後，島津氏の直轄領となり外城の一つとして末吉郷が置かれ7か村が属した。それぞれの遺跡の所在する村は，唐尾遺跡が諏訪方村，高古塚遺跡は中之内村，菅牟田遺跡，中之迫遺跡は五拾町村である。

中之内村の梶ヶ野には鹿児島藩が末吉野牧といわれる馬牧を置き，その領域は西側の坂元村に及び福山野牧と隣り合っていた。中之内村と五拾町村は，島津氏家老職伊勢家の私領となったが，戊辰戦争後岩川郷として独立（1869）した。

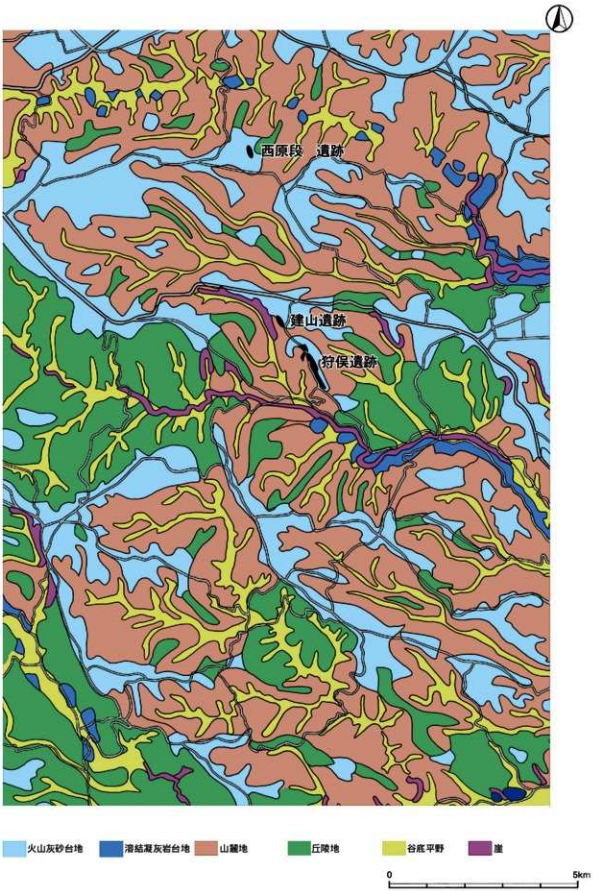
当地は，明治4年の廃藩置県後7月に鹿児島県，同年11月に都城県に属し，同6年鹿児島県に編入された。同20年東囎唹郡の管轄となり，同22年町村制の施行に伴い，末吉村，岩川村が成立。同29年成立の囎唹郡に属し，末吉村が大正11年町制施行して末吉町に，岩川村が同13年町制を施行して岩川町となり，昭和30年に岩川町・恒吉町・月野村が合併し大隅町となり，同年4月に荒谷地区を編入し，平成17年に財部町・末吉町・大隅町が合併し曽於市となった。

遺跡の所在する曽於市末吉町と大隅町の考古学的発掘調査は，末吉町では1930年に鳥井竜蔵博士による姥石（住吉神社）の調査が行われた。本格的な調査は，1963年に河口貞徳氏により入佐遺跡が，1969年には中岳洞穴遺跡が発掘され，それぞれ縄文時代晩期の入佐式土器などの標識遺跡となった。平成8年から東九州自動車道建設（曽於弥五郎ＩＣ～国分ＩＣ）に伴う大規模な発掘調査が行われ，桐木耳取遺跡，関山西遺跡，関山遺跡では旧石器時代から近世にかけての遺構，遺物が確認された。

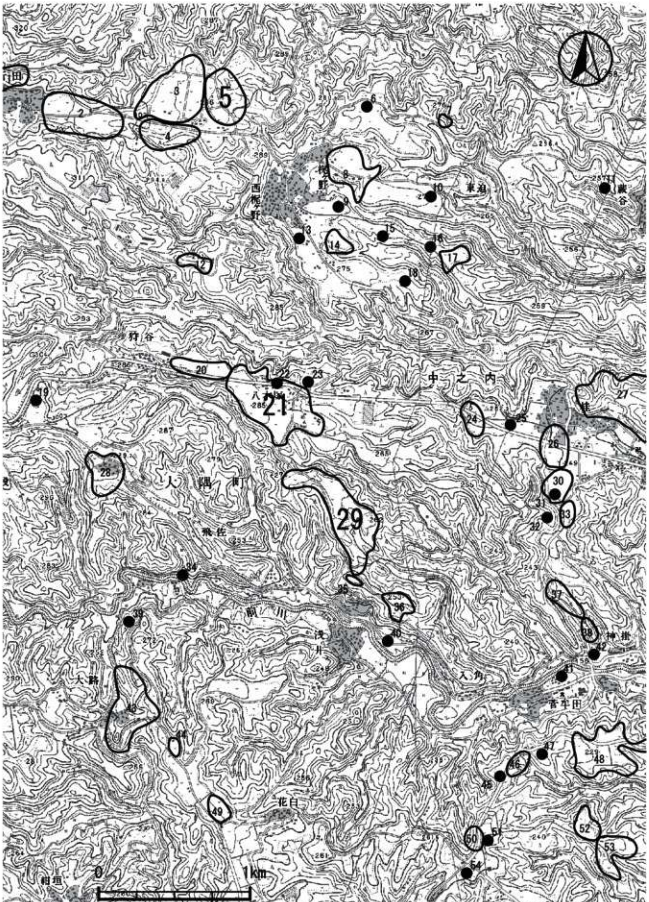
大隅町では1956年に同志社大学の酒詰仲男博士が行った上八合遺跡の発掘調査である。調査では，縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後，本格的な発掘調査は長く行われていなかったが，平成4年以降からは町教育委員会が調査主体となって各種農業基盤整備に伴う発掘調査が実施され，鳴神遺跡（縄文時代晩期），宮田遺跡（縄文時代早期），炭床　遺跡（縄文時代早期，平安時代），川路山遺跡（縄文時代後期），向ノ段・大丸・小迫遺跡（縄文時代早期，後期），立馬遺跡（縄文時代早期）などの発掘調査が実施されたが，調査結果の報告は概報がほとんどであるために詳細な内容は不詳である。平成11年には，県道改良事業に伴い出水平遺跡の発掘調査が行われ，縄文時代早期，晩期，弥生時代前期の遺物が出土し遺構では縄文時代早期の集石が8基検出された。中でも特筆するものは縄文時代早期の耳栓状土製品が出土している。平成13年から東九州自動車道建設（曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ）に伴う大規模な発掘調査が行われ，旧石器時代から近世までの遺構，遺物が確認された。

参考文献

1 「土地分類基本調査 - 岩川」国土調査1972
2 「出水平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（43）
3 「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（36）
4 「桐木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（91）
5 「末吉町郷土史」
6 「大隅町郷土史」
7 「鹿児島県風土記」芳　即正・塚田公彦編　旺文社
8 「鹿児島県の地名」日本歴史地名大系47　平凡社
9 「関山西遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（126）
10 「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（127）



第２図　遺跡周辺地形分類図



第３図　周辺遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧表

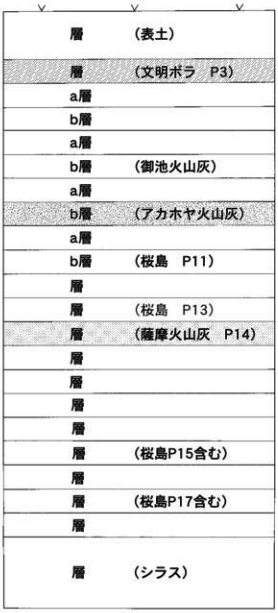
番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺物等	備　考
1	63-36-0	前畑段	曽於市大隅町中之内前畑段	丘陵	縄文(後)	岩崎上層式	
2	63-101-0	東原	曽於市大隅町中之内東原	台地	縄文(早～晩)，弥生，奈良，平安	縄文土器・土師器・打製石斧(半欠)・鉄滓	
3	63-57-0	西原段	曽於市大隅町中之内西原段	台地	縄文	縄文土器	
4	63-186-0	崔段	曽於市大隅町中之内崔段	台地	縄文，平安	土器・土師器	町埋文報(16)
5	**63-27-0**	**西原段**	**曽於市大隅町中之内西原段**	**台地**	**縄文(後)**	**岩崎上層式**	**本報告書 県埋文報(139)**
6	63-99-0	ノトロ	曽於市大隅町中之内ノトロ	台地	縄文(晩)	縄文土器・局部磨製石斧・敲石	
7	63-206-0	谷川内	曽於市大隅町中之内谷川内	丘陵	奈良～平安	土師器	
8	63-115-0	打込	曽於市大隅町中之内打込	台地	弥生，歴史	土師器	
9	63-142-0	前岡	曽於市大隅町中之内前岡	台地	歴史	土師器	
10	63-95-0	わらび窒	曽於市大隅町中之内わらび窒	台地	縄文(晩)	縄文土器・貢岩剥片	
11	63-146-0	巌谷	曽於市大隅町中之内巌谷	丘陵	縄文(早)，歴史	小片のため時代不明	
12	63-252-0	野鹿倉	曽於市大隅町中之内野鹿倉	台地	縄文	土器	県埋文報(139)
13	63-141-0	前畑	曽於市大隅町中之内前畑	台地	縄文，歴史	須恵器	
14	63-40-0	中崎迫	曽於市大隅町中之内中崎迫	台地	縄文(晩)，歴史	土師器	
15	63-143-0	重ヶ迫	曽於市大隅町中之内重ヶ迫	台地	古代	土師器	
16	63-144-0	重吉迫	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	古代	土師器・黒色土器	
17	63-28-0	重吉迫	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	縄文(後)，古代	土師器	
18	63-145-0	高尾迫	曽於市大隅町中之内高尾迫	台地	歴史	土師器	
19	63-17-0	観音段	曽於市大隅町中之内4300	台地	縄文(早)	石皿	
20	63-29-0	狩谷	曽於市大隅町中之内狩谷	台地	縄文(後)		
21	**63-253-0**	**建山**	**曽於市大隅町中之内建山**	**台地**	**旧石器，縄文，古墳**	**土器**	**本報告書 県埋文報(139)**
22	63-187-0	八木塚	曽於市大隅町中之内八木塚	台地	中世	墳丘(消滅)	
23	63-102-0	柿木渡	曽於市大隅町中之内柿木渡	台地	縄文	石鏃(５例)	
24	63-213-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山セセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
25	63-166-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山・二本杉	台地	縄文(晩)，歴史	土師器・青磁	
26	63-239-0	尾ノ迫	曽於市大隅町中之内桂	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
27	63-168-0	手取城跡	曽於市大隅町中之内手取・陣之元	丘陵	中世，近世		「日本城郭体系」18 町埋文報(15)
28	63-16-0	赤松迫	曽於市大隅町大谷赤松迫	台地	縄文(早)	石坂式	
29	**63-254-0**	**狩俣**	**曽於市大隅町岩川狩俣**	**台地**	**縄文，古代**	**土器・石器**	**本報告書**
30	63-240-0	吹切段Ａ	曽於市大隅町中之内西笠木	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
31	63-41-0	吹切段	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(晩)	布目文	「大隅町誌」
32	63-118-0	吹切段	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(早・晩)，弥生，奈良，平安，中世	弥生土器	
33	63-241-0	桧ヶ迫田	曽於市大隅町中之内笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
34	63-152-0	宗ノ段	曽於市大隅町大谷宗ノ段	丘陵	歴史	土師器	
35	63-234-0	入角	曽於市大隅町岩川入角	台地	古墳？	墳丘？	
36	63-255-0	高古塚	曽於市大隅町岩川高古塚	台地	古墳，古代	土器	県埋文報(127)
37	63-52-0	桧ヶ迫田	曽於市大隅町中之内桧ヶ迫田	台地	縄文(早・後・晩)，歴史	縄文土器	
38	63-242-0	長迫Ａ	曽於市大隅町中之内神掛	段丘	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
39	63-174-0	宮田	曽於市大隅町大谷宮田	丘陵	縄文	炭化物・鉄滓	
40	63-61-0	浅井	曽於市大隅町岩川向上・仮屋ケ段	丘陵	縄文	石斧・敲石	「大隅町誌」
41	63-136-0	光神免	曽於市大隅町岩川2828-3	丘陵	古墳	土師器	削平を受けているが墳丘らしきものが残存
42	63-119-0	長迫	曽於市大隅町中之内長迫	丘陵	縄文(晩)，弥生，歴史	石斧・敲石・土師器	
43	63-190-0	愛宕山豊跡	曽於市大隅町長江字大路他	丘陵	中世(南北朝～戦国末)		県埋文報(29)
44	63-211-0	吹谷迫	曽於市大隅町大谷2428-4	台地	縄文	土器片	
45	63-156-0	菅牟田	曽於市大隅町岩川菅牟田	丘陵	縄文，奈良，平安	土師器	県埋文報(127)
46	63-243-0	菅牟田Ａ	曽於市大隅町岩川菅牟田	山麓	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
47	63-43-0	イチノ木	曽於市大隅町岩川イチノ木・前畑上	台地	縄文(晩)		
48	63-44-0	上山	曽於市大隅町岩川上山	台地	縄文(晩)，歴史		
49	63-212-0	船窪	曽於市大隅町岩川船窪	台地	縄文，古墳，平安～近世	土師器	町埋文報(９)
50	63-244-0	井手山Ａ	曽於市大隅町岩川久木山	台地	縄文(早)，近世	土器・石器・陶磁器	報告書有
51	63-62-0	井手山	曽於市大隅町岩川井手山・定塚	台地	縄文，歴史	土師器	
52	63-2-0	定段	曽於市大隅町岩川定塚・入佐	台地	旧石器，縄文(早)，歴史	前平式・塞ノ神式・土師式	Ｈ15年，16年，17年発掘調査
53	63-63-0	稲村	曽於市大隅町岩川稲村	丘陵	縄文		Ｈ15年，17年発掘調査
54	63-70-0	久木山	曽於市大隅町岩川麦ヶ迫	台地	縄文	敲石・石皿・石斧	「大隅町誌」

第Ⅴ章　層位

狩俣遺跡，建山遺跡，西原段　遺跡の基本層位は，層厚は遺跡により異なるが，曽於市末吉町諏訪方に所在する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。

桐木耳取遺跡は，南九州における霧島，姶良カルデラ，桜島，喜界カルデラ等からの噴出物が遺跡の相対的年代を推定する上で非常に良好な資料となっている。３遺跡の基本土層については，第４図の基本土層柱状模式図の通りである。また，姶良カルデラ噴出物で形成されたシラス台地は，場所により数百ｍの厚さに及ぶため，遺跡の発掘はシラス堆積層上面が限界となっている。

以下に各基本層位について順に述べるが，狩俣遺跡，建山遺跡，西原段　遺跡それぞれの土層の残存状況，遺物包含層などについては，各遺跡ごとに本文で詳細に述べる。



第４図　基本土層柱状模式図

層　暗褐色土　現表土

層　黄白色軽石層　桜島を噴出源とした軽石層で，通称文明ボラと呼ばれている。ボラとは俗称で，軽石を指している表現である。西暦1471年（室町時代）に噴出されたことが文献により判明している。曽於市大隅町付近では，平均10～20㎝の堆積が確認されるが，曽於市北部よりは比較的層厚が薄くなっている。ボラの持つ保湿性の低さが耕作には不向きなことから，戦前はボラ抜きと呼ばれる人力による軽石の除去作業が行われ，近年は大型機械による整備が行われてきている。なお，ボラ抜きにより取り除かれ積み上げられた軽石はボラ塚と呼ばれ，あちこちに点在している。

ａ層　黒色土　粒の小さな土質で，腐植が発達している。主に古代～中世の遺物包含層である。

ｂ層　黒褐色土　主に縄文時代晩期～古代の遺物包含層である。

ａ層　黄褐色土　霧島御池火山灰の二次堆積層に相当する。主に縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。

ｂ層　黄褐色細粒軽石混硬質土　霧島御池火山灰層（約4,600年前）に相当する。主に縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。

ａ層　暗橙色土　鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰の二次堆積土で，縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

ｂ層　黄橙色軽石混火山灰層　鬼界カルデラ起源の火山灰層で通称アカホヤ火山灰（約7,300年前）と呼ばれている。下位に赤橙色の火山豆石の体積が見られる。遺跡全体に安定して堆積している。

ａ層　黄褐色軽石混茶褐色土　　ｂ層（桜島Ｐ11）の二次堆積土であり，縄文時代早期の遺物包含層である。

ｂ層　黄褐色軽石層　桜島起源のＰ11（約8,000年）下部に黄色や黄褐色軽石が堆積し，場所により厚い堆積も見られる。

層　　明茶褐色土　縄文時代早期の遺物包含層である。

層　　黒褐色土　桜島起源のＰ13（約10,600年）が点在している。縄文時代早期の遺物包含層である。

層　　黄白色砂粒硬質土　桜島起源のＰ14（薩摩火山灰　約12,800年前）ほぼ全域に20～30㎝程度堆積しており，上位は固結した火山灰，下位は３㎜前後の軽石で構成され，縦方向にクラックが発達しブロック状の堆積を成す。

層　　黒褐色粘質土　桐木耳取遺跡では細石刃文化期～縄文時代草創期の遺物包含層となっている。

Ⅺ層　黄橙色粘質土　シラスの二次堆積土　桐木耳取遺跡では細石刃文化期の遺物包含層となっている。

Ⅻ層　暗茶褐色粘質土　硬質のブロックが混ざる弱粘質土で，桐木耳取遺跡では細石刃文化期の遺物包含層となっている。

層　　黄褐色軽石混弱粘質土　ローム層の中に白い細粒なパミスが部分的に点在する。桐木耳取遺跡では台形石器や小型ナイフ形石器を主体とする後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

層　　暗赤褐色硬質土　赤褐色をした桜島起源のＰ15（時代未定）が点在する。桐木耳取遺跡では後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

層　　暗青灰色硬質土　硬質のローム層で，桐木耳取遺跡では後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

層　　明褐色硬質土　径５～10㎜程度の赤褐色を呈した桜島Ｐ17（約26,000年前）が点在する。桐木耳取遺跡では中部から下部に剥片尖頭器や台形石器等で構成する後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

層　　黄白色砂質土　上位はローム質，下位は砂質の状態である。桐木耳取遺跡では大型剥片尖頭器等の良好な資料が出土している。

層　　明黄白色砂質土　姶良カルデラ（約26,000～29,000年前）を噴出源とする。通称シラスと呼ばれ，入戸火砕流堆積物でありＡＴと表示される遺跡の基盤層である。

（参考文献：町田洋・新井房夫「新編火山灰アトラス」）

Ⅱ　狩俣遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の概要と経緯

本遺跡の確認調査は，平成13年度と平成17年度に実施し，平成13年度は遺跡の北側部分を，17年度は国土交通省所管による実施計画に基づいている。

平成13年当時，平成14年１月～３月の間，日本道路公団の実施計画（４車線，パーキングエリア予定地の対象面積45,900㎡，第２図参照）に基づいて実施した。その結果，急崖を成す谷部の斜面を利用した畝状遺構が発見され，一方，平坦面を成す台地のほぼ全域には縄文時代早期の遺構・遺物が良好に残存することが確認された。

平成16年，道路公団民営化の閣議決定による道路建設の全面凍結が実施されたが，その後，国土交通省主導による新直轄方式での道路建設を継続することとなった。その間，４車線は２車線に，パーキングエリア建設中止等の工事計画の大幅な縮小・見直しが行われることとなり，調査対象面積は23,460㎡となった。（第２図下参照）

上記を受け，平成16年，国土交通省九州整備局，西日本高速道株式会社，鹿児島県知事による新直轄方式施工に伴う確認書締結が行われた。

平成17年度は，11月以降に計画変更に基づき主として台地の中心部から南斜面の東端を対象に40ヶ所のトレンチを設定し確認調査を行った。平行してセンターライン上を軸に調査区（グリッド）を設定し，西側の谷斜面に展開している畝状遺構とＪ～Ｌ－16～22区の本調査を実施した。

平成18年度は，17年度実施分を除く台地部と南部斜面について本調査を実施し，畝状遺構の調査を中心に縄文時代早期～近世までの調査を行い，平成19年３月までに全ての調査を終了している。

確認調査及び本調査の概要については，第３節，第４節で詳細に記録している。

なお，平成13年度の確認調査範囲については，本調査から除外された部分が含まれるが，今後の土地利用状況によっては，発掘調査の必要性を含め，慎重な取り扱いが要求されることから，その成果を記載する。

第２節　調査の組織

【平成13年度（確認調査）】

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志

調査企画	県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	岩澤　和憲
	〃	文化財主事	山崎　省一
	〃	文化財主事	桑波田武志
事務担当	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主事	栗山　和己

【平成17年度（確認調査・一部本調査）】

事業主体者	西日本高速道路株式会社鹿児島工事事務所 鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼調査第一課長	
	〃	兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮　久志
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	永濱　功治
	〃	文化財調査員	佐藤　真人
事務担当	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二
	〃	主事	福山恵一郎

【平成18年度（本調査）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所 鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄（4～7月）
	〃	〃	宮原　景信（8～3月）
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮　久志
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	楸田　岳志
	〃	文化財主事	田畑　哲治（2～3月）
	〃	文化財研究員	長﨑慎太郎

調査担当	県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	佐藤　真人
事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主事	五百路　真
現地指導者	別府大学文学部	教授	飯沼　賢司
	鹿児島大学農学部	〃	浜崎　忠雄
	〃	〃	佐々木　修

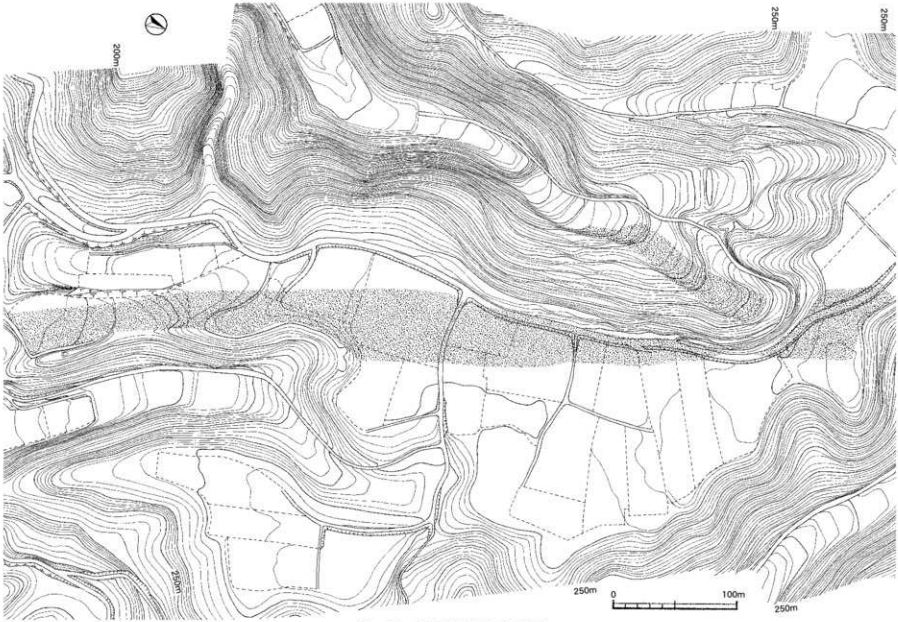
【平成20年度（報告書作成）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
作成企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村　耕治
作成担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財調査員	岩元　康成(4～10月)
	〃	文化財調査員	岩下　直樹(11～3月)
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	五百路　真
遺物指導者	ラ・サール学園	教諭	永山　修一
	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

【平成21年度（報告書作成）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	長野　眞一
作成担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	楸田　岳志
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	髙﨑　智博
企画担当者	〃	文化財主事	永濱　功治
報告書作成指導委員会	平成21年12月2日　青﨑次長ほか　2名		
報告書作成検討委員会	平成21年12月11日　山下所長ほか　9名		
遺物指導者	福岡大学人文学部	教授	桃崎　祐輔

図版１　上空から見た狩俣遺跡周辺



第１図　狩俣遺跡周辺地形図

第３節　確認調査

１　平成13年度

平成13年度は，遺跡の北側部分を中心に実施した。台地部は任意の方向で４ｍ　８ｍを10カ所，谷部には２ｍ　４ｍを15カ所，計25カ所トレンチを設定し調査を行った。調査は各トレンチとも表土は重機で除去し，その後は人力による掘削を行った。調査前の現地は，台地部の大半が畑地であり，谷部にかけて山林が広がっていた。

その結果，17カ所のトレンチで遺物・遺構が確認された。谷部では，斜面を利用した畝状遺構が広範囲に確認され，文明ボラに覆われ，削平や撹乱を受けていないことから，谷部全体に残存すると予想される。なお，谷部で下層確認を実施したが，それぞれの層が非常に厚く堆積し，急傾斜地であることから，古代以前の包含層は存在しないと判断した。

台地部は畑地整備により削平を受けていたが，部分的に縄文晩期～古代の遺物が確認された。北側の台地部全体から前平式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文式土器など縄文時代早期の遺物が出土した。遺構は，落とし穴や集石，住居跡，土坑などが良好に残存していた。特に23トレンチでは，遺構の密度が高く遺物量も多いことから，縄文時代早期の中心地域が近いのではないかと予想される。

検出された遺構の中で，調査終了したものについてこれより掲載する。なお，確認調査では検出のみで止め，先送りしたものが多数ある。この後，計画変更に伴い本調査範囲外となってしまったため，そのまま埋め戻されているのが現状である。

⑴　２トレンチ（第３～７図）

２トレンチでは，北側の台地部から　層上面で落とし穴が３基検出された。落とし穴は，略南北方向に約３ｍ間隔で並んで位置しており，いずれも埋土はＰ13をやや多く含む黒褐色土（　層）が主体である。埋土及び周辺からは　類の土器を中心に85点，石鏃などの石器が10点，計95点の遺物が出土しているが，その中から土器27点，石器５点を図化し，北部の遺物として掲載した。一方，南側の斜面部からは，　層（文明ボラ）覆われるような状態で畝状遺構が検出された。

落とし穴（第３～５図）

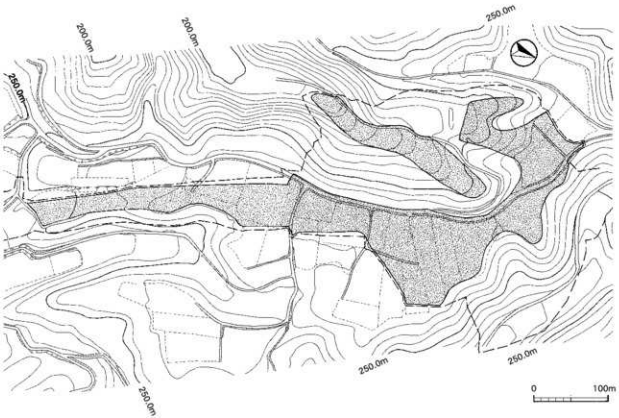
台地部の　層上面で落とし穴が３基検出された。南側の谷へ向かって，主軸の向きはそれぞれ異なるが，北東から南西方向にほぼ３ｍ前後の間隔で並んでいる。位置的に八つ手状に伸びた台地の先端部にあたることから，狭くなった台地を横切るように作られた落とし穴群の一部と考えられる。

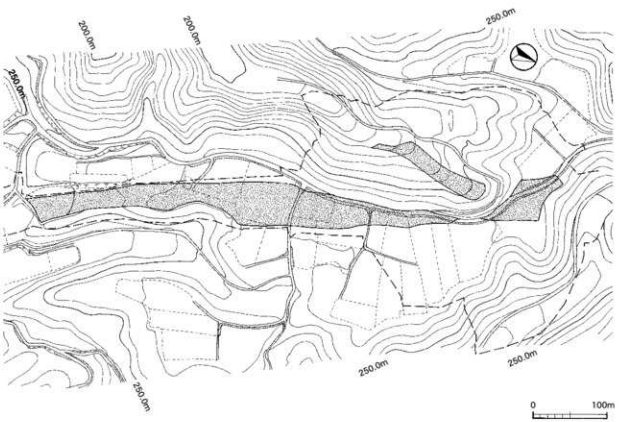
これより３基ある落とし穴の中で，未調査の３号を除く１，２号について詳しく掲載する。

落とし穴１号（第３，５図）

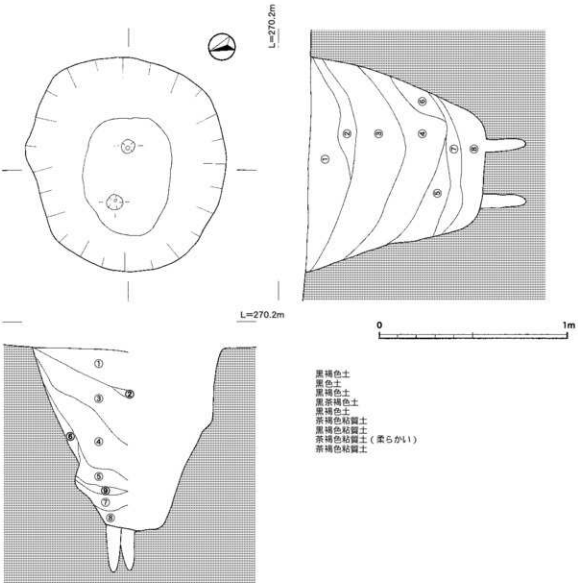
両側を谷で挟まれた台地のほぼ中央部で検出された。平面形は，ほぼ円形に近い形を呈している。長径　短径は117㎝　104㎝，深さは検出面から床面まで92㎝である。壁面は斜めに立ち上がる形状で，平坦な床面に小ピットを２つ検出した。両方とも床面中央の長軸方向に30㎝離れて位置し，深さ約20㎝で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。

埋土は，上部にＰ13を多く含んだ黒褐色土が主体となり，下部は黒褐色土と茶褐色土が交互に薄く堆積している。下部に薩摩火山灰の小ブロックが少量見られるが，壁面が崩れ落ちたものと思われる。





第２図　平成13年度，17年度調査範囲図



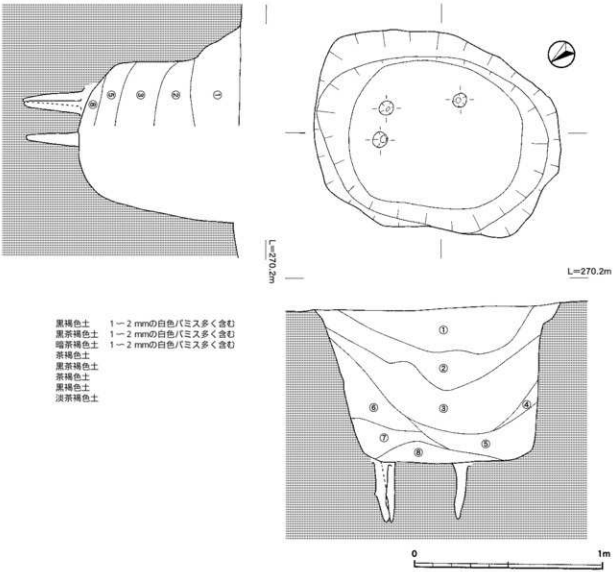
第３図　２Ｔ　縄文時代中～後期　落とし穴１号

落とし穴２号（第４，５図）

落とし穴１号から南西方向に約３ｍ離れた平坦面で検出された。平面形は，やや東西方向に主軸を持つ方形に近い楕円形を呈している。長径　短径は130㎝　103㎝，深さは検出面から84㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，広めの平坦面を持つ床面に小ピットを３つ検出した。床面の西側に集中しており，径が約８㎝，深さ30㎝前後で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。埋土は，上部にＰ13を多く含んだ黒褐色土が主体となり，下部は茶褐色土が主体である。１号と同じく下部に壁面が崩れ落ちたものと思われる薩摩火山灰が少量見られる。

落とし穴３号（第５図）

落とし穴２号から南西方向に約３ｍ離れた平坦面で検出された。平面形は，南北方向に主軸を持つ楕円形を呈し，長径　短径は120㎝　55㎝である。床面までの深さ，断面形，小ピットの有無など，詳細については未確認である。



第４図　２Ｔ　縄文時代中～後期　落とし穴２号

畝状遺構１（第５，６図）

トレンチの南側の畝状遺構は，台地を形成する急傾斜面で検出している。

検出された畝状遺構は，黒色土の　ａ層に構築されたものである。遺構発見のきっかけは，遺構の上位に文明年間に桜島から噴出した軽石（通称文明ボラ）が被覆していることが起因となる。すなわち，個々の畝は被覆する軽石やその後の堆積物で押しつぶされ凸部が見あたらず，畝と畝の間の「畝間」の凹に軽石が安定して堆積することから検出が可能となる。この急斜面に発見された遺構は，畝方向を東西に，階段状に規則性を持って形成されていた。

畝の長さは１～2 3m，幅30㎝程度を基本に，それぞれは長楕円形を呈している。東側の列は，長さ４ｍ弱，畝間の中心間は70～80㎝前後が多く，幅は55㎝前後のものが多い。西側の列は，長さ２ｍ強，畝間の中心間は10～38㎝前後とばらつきが多い。幅は40㎝前後のものが多く，東側の列よりもやや小さめとなっている。これらの畝間は企画性を成して南北方向に整然と並ぶことが観察で

き，当時の営農意識を認識できる。

埋土のほとんどは文明ボラであるが，一次堆積物（１～２㎝大の軽石）と二次堆積物（砂粒大の軽石），細粒な黒色土がブロック状に混在している。斜面に位置し，上位に一次堆積物が多く含まれ，小規模な堆積を繰り返した痕跡が見られる。

正確な範囲は部分的な調査のため不明であるが，南側斜面のほぼ全域に広がると推測される。台地部についても，削平前の地形の状態次第では北側にも延びる可能性がある。

⑵　23トレンチ（第７～14図）

23トレンチでは，畑地整備による撹乱のため，縄文時代早期以降の遺物包含層は残されていない。確認できる遺構は縄文時代早期に限られ，集石遺構２基，土坑51基，竪穴住居跡が１基である。遺物はトレンチ内から土器片268点，石器46点の総数314点で，今回は土器96点，石器22点を図化し掲載した。後述するが　類土器が主体を占め，　類，　類土器もわずかであるが見られる。

遺構が密集し，出土遺物も多いことから，縄文時代早期の集落の一端を検出したと推測できる。

集石遺構（第８，12図）

集石は，やや大型の土坑３～６号周辺で２基検出された。　層で検出され土坑に隣接していることから，ほぼ同時代に使用されていた可能性が高い。どちらも集石の範囲内からの遺物出土はみられないが，周囲の出土状況から　類土器の頃のものと考えられる。

集石１号（第８，12図）

土坑４の東側で検出された。礫数は９個と少なく，１ｍ　50㎝の範囲に散在した状態で検出された。石材は拳大の安山岩がほとんどであり，加熱を受け破砕礫も認められる。礫群下位に掘り込みは認められなかった。

集石２号（第８，12図）

土坑５の東側で検出され，集石１号との距離は約３ｍである。礫数は15個で，検出面は集石１号よりも下位であり，やや時期差があると思われる。40　30㎝の範囲にまとまった状態で検出された。石材は４～７㎝大の安山岩や砂岩であり，火熱を受けた破砕礫が中心である。周辺及び下面に掘り込みや炭化物等は認められなかった。

土坑（第９，10，12図）

本遺跡の土坑は，概ね以下のように区分することができる。

類・・・平面径が50㎝前後の円形を呈するもの（　・ａ：深さの浅いもの　　・ｂ：深いもの）

類・・・平面径が１㎝前後の円形を呈するもの（　・ａ：深さの浅いもの　　・ｂ：深いもの）

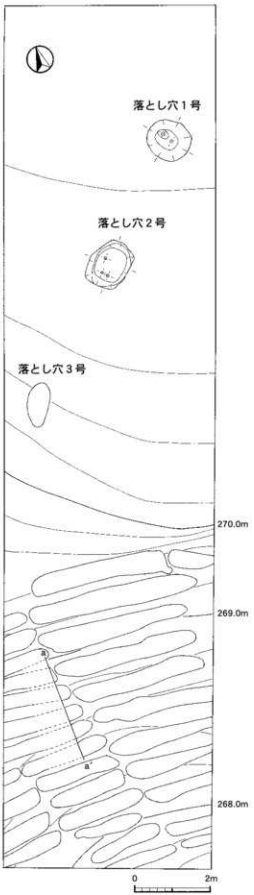
類・・・平面形状が楕円形を呈するもの

（　・ａ：長径が１ｍ前後の浅いもの　　・ｂ：３ｍを越える細長いものに分かれる）

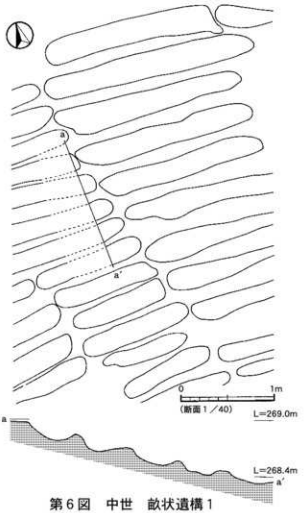
類・・・平面形状が方形を呈するもの

類・・・平面形状が不定形なもの

23トレンチでは，径が50㎝程度の円形を呈するもの（　類）が33基，楕円形を呈するものが９基，やや大型で方形を呈するものが９基，計51基検出された。大きなものは竪穴住居跡の可能性も考えられるが，ほとんどが未調査のため不明である。切り合いを有する土坑は少なく，ほぼ同時期のものと思われるが，長軸方向に規則性はあまり見られない。土坑内から遺物の出土もあり，いくつか



第５図　２トレンチ遺構配置図



第６図　中世　畝状遺構１

第７図　平成13年度トレンチ配置図

は掲載した。

土坑１（第９，12図）

トレンチ西側から検出された。長径　短径は96　45㎝である。平面形はやや変形した楕円形を呈し，検出面からの深さは20㎝である。西側の壁は段を有する二段構造であり，底面は平坦である。埋土は，Ｐ13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であり，２㎜程度の炭化物がわずかに混在する。トレンチ内に同規模の土坑が９基検出されており，形状は多少異なるが，いずれも大型土坑の周辺に位置している。

土坑２（第９，12図）

トレンチ西側，土坑１から東方向へ約2 5m離れて検出された。長径　短径は112　65㎝である。平面形は小判形を呈し，中心が一段深い二段構造を呈している。検出面からの深さは70㎝である。底面は平坦である。埋土は黒褐色土であり，遺物が５点出土した。中央部土器425は　類土器の胴部である。北部石器152は面取り痕のある軽石製品である。

土坑３（第９，12図）

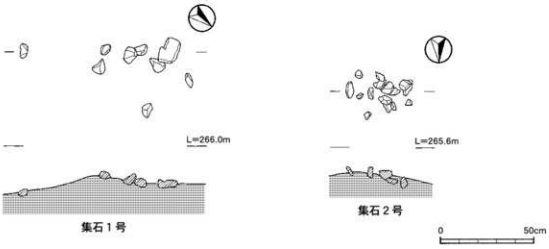
土坑２から北東方向へ約３m離れて検出された。長径　短径は188　124㎝である。平面形は長軸の２辺が並行した隅丸の長方形を呈している。　層上面からの深さは約28㎝と比較的浅く，底面は平坦である。埋土はＰ13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であるが，径２～５㎜の炭化物を多く含んでいた。土坑のほぼ中心部から遺物が２点出土した。中央部土器432は　類土器の底部である。23トレンチ内からは同規模の土坑が計９基検出されているが，住居跡の可能性も考えられる。

土坑４（第12図）

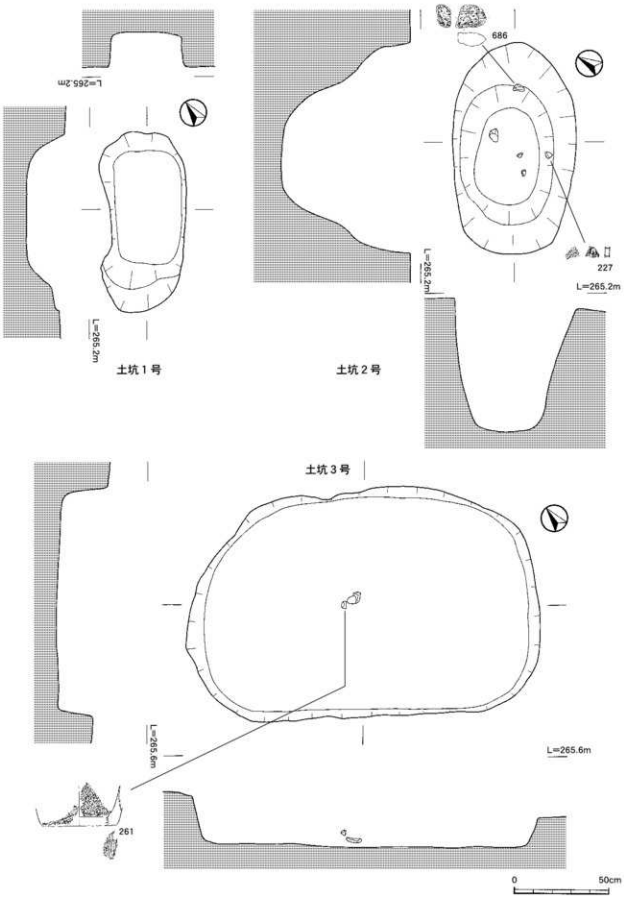
土坑３から北方向へ約１m離れて検出された。長径　短径は30　25㎝であり，平面形は隅丸方形を呈し，土坑３より一回り小さい。未調査のため深さや断面形，埋土中の遺物など全体像は不明であるが，樹痕による撹乱が一部見られる。

土坑５（第10，12図）

土坑３から北東方向へ約１m，土坑４から東方向へ同じく約１m離れて検出された。長径　短径は80　76㎝であり，平面形は円に近い方形を呈している。壁面はやや斜めに立ち上がり，底面は平



第８図　23Ｔ　縄文時代早期　集石１，２号



第９図　23Ｔ　縄文時代早期　土坑１，２，３号

坦であるが，東西方向の断面は，上位に段を有することから二段構造となっている。検出面からの深さは35㎝である。埋土は黒褐色土であり，遺物が３点出土した。中央部土器426は　類土器の胴部である。他に軽石も出土している。

土坑６（第10，12図）

土坑５から南東方向へ隣接するように検出された。長径　短径は92　57㎝であり，平面形は，東西方向を長軸とした不定形なものである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。検出面からの深さは23㎝である。東側に径35㎝程度の土坑の切り合いが見られるが，土坑６とは時期が異なると思われる。埋土は，他の土坑と同じくＰ13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であり，埋土中より遺物が５点出土した。　類土器が大部分であるが小破片である。北部石器153は面取り痕のある軽石製品であり，何らかの調整に使われたと思われる擦痕が広範囲に残る。

竪穴住居跡（第11，12図）

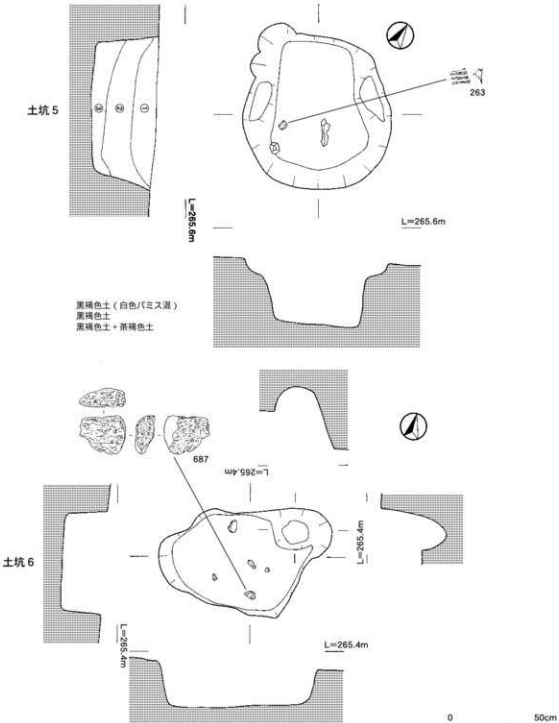
トレンチの東角で竪穴住居の掘り込みを確認した。当初，住居跡の一部が検出されていたので，東側を拡張し，全プランの検出を行った。遺構の平面形は，長径　短径は286　238㎝のほぼ円形を呈している。床面はほぼ水平面となるが，確認調査では，張り床構造の有無や柱状ピットの確認までは至っていない。

この竪穴住居跡の南西側に幅約30㎝，長さ約53㎝程度の長楕円形の突出部（土坑）が，また，北側にも幅約１ｍ，長さ40㎝程度の張り出し部が確認されているが，竪穴住居跡に直接付随する施設か，時間差のある切り合い関係を成す施設であるかの最終判断には至っていない。なお，南西側の突出部の底面は，住居跡と同一でレベル差は認識できない。一方，南西側突出部では，埋土に薩摩火山灰のブロックが認められることから，住居の建物に関連したピットであると思われ，薩摩火山灰ブロックは，柱を建てる際の埋め込みに利用されたのではないかと推測される。

竪穴住居跡の埋土は，周辺の土坑同様，Ｐ13の火山灰をまんべんなく含む黒褐色土で，炭化物の混入も認められ，床面に近づくに従いその密度が高くなることも確認している。埋土中より遺物が14点出土した。土坑と同様に　類土器が大部分であり，張り出し部からも同じ土器片が出土した。なお，図化した遺物は，第　章「中央部の調査」第４節に掲載した。（　199，203，204，214，226，237，254，260，262，347）

竪穴住居跡については，全体の約50％を調査したに過ぎず，床面の詳細な構造解明も行っておらず，また，住居跡を取り巻く周辺の遺構もその確認を行っただけで，現地にそのまま残されている状況である。

出土遺物については，2トレンチ32点，８トレンチ４点，21トレンチ２点を第　章「北部の調査」で，22トレンチ９点，遺構内遺物を含めた23トレンチの107点，24トレンチ２点を第　章「中央部の調査」で掲載した。

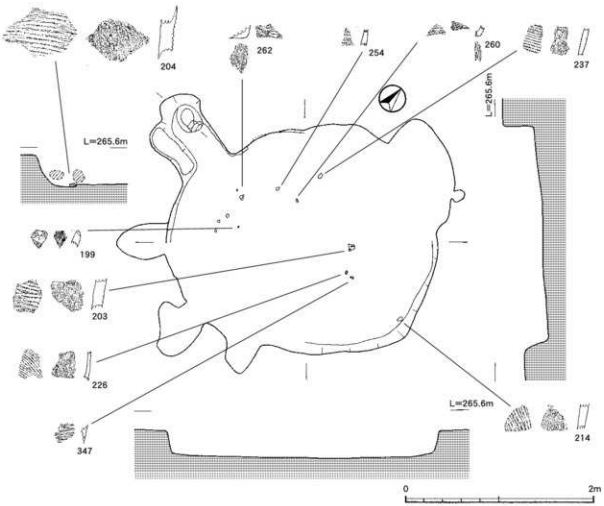


第10図　23T　縄文時代早期　土坑５，６号

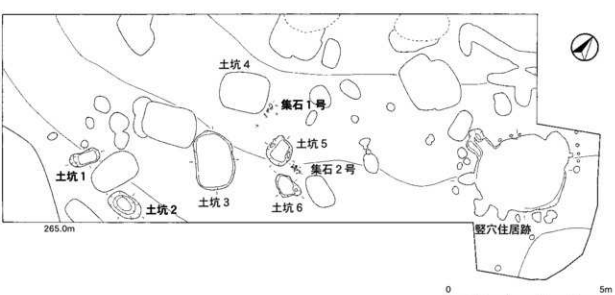
第１表　23トレンチ　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	96	45	20
2	112	65	70
3	188	124	28

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
4	30	25	-
5	80	76	35
6	92	57	23



第11図　23Ｔ　縄文時代早期　竪穴住居跡



第12図　23Ｔ　遺構配置図

縄文時代

古代一中世

変更後の調査範囲

平成13年度道路予定範囲

0 100m

第13図　平成13年度確認調査結果

２　平成17年度（第14，15図）

平成17年度の確認調査は平成13年度に確認調査を実施した部分を除く，遺跡中央部の台地，南部の斜面部分を中心に実施した。トレンチ設定の前に，センターライン上の「ＳＴＡ232＋80」地点と「ＳＴＡ234＋00」地点の２点を結ぶ直線を軸に北西側から南東側に向かって１，２，３・・・，南西側から北東側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・とする10m間隔の調査区（グリッド）を設定し，トレンチ設定の基準とした。トレンチは，５ｍ　10mのものを中心に40カ所設定し調査を行った。調査前の現地は，台地部，斜面部ともに大半が畑地であった。

その結果，28カ所のトレンチで遺物・遺構が確認された。大規模な畑地整備のための撹乱を受けた場所では，概ね　ｃ層（Ｐ11の一次堆積軽石）まで影響を受けており，遺物包含層は消失していた。台地部では，撹乱を受けた場所を除き，ほぼ全面に畝状遺構が残存し，形状や埋土に違いが見られるものもあるが，近世〜古代に該当する。南部の斜面からは，谷部とほぼ同時期と思われる楕円形を呈した畝状遺構が広範囲に確認され，畝状遺構は，　ｂ層の暗褐色土を主体とするものと，

層の黄色ポラ（文明ポラ）を埋土の主体とするもの，黄色ポラ混じりの黒褐色土を主体とするもの，　－ｂ層（安永ポラ）を埋土の主体とするものの４タイプに分けられる。

その他，台地のほぼ全面で縄文時代早期の遺物包含層が確認された。また，天地返しなどで撹乱受けた一部を除き，縄文時代前期，縄文時代後期，縄文時代晩期，古代，中世，近世の遺跡の存在が明らかとなった。中でも県内でも類例のない文明ポラに覆われ楕円形をした畝状遺構の存在が明らかとなり，谷部，南部の斜面全体にその貴重な資料の広がりを確認することができた。

平成17年度確認調査での検出遺構，出土遺物については，平成18年度の本調査の成果と併せて各調査区ごとに本文の中に含めて掲載した。

第４節　本調査（第15図）

本調査は，平成13年度，17年度の確認調査に基づき，平成17年度，18年度実施した。

１　平成17年度（第15図）

平成17年度は，谷部全体と台地部の一部について本調査を実施した。

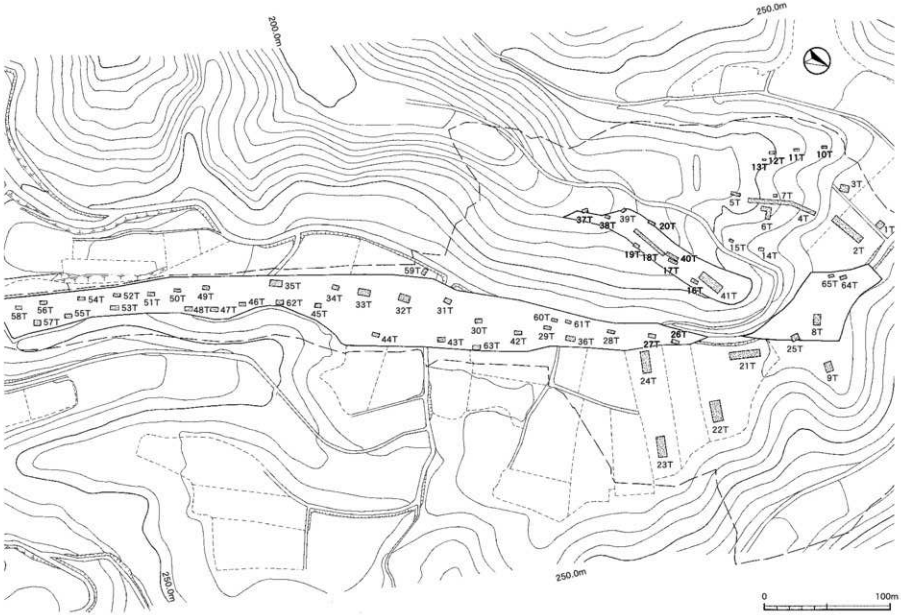
谷部調査区は，孟宗竹や雑木に覆われていたため，それらの伐採や抜根から開始し，人力や重機を活用し，その搬出や表土除去を行っている。その後，確認調査で検出された畝状遺構の有無の確認を行い，残存する地域については人力で検出を行った。また，影響のない部分については，　層（文明ポラ）まで重機で除去し，遺物出土の可能性がある　ａ〜　層は人力で掘り下げを行った。

層より下位については，堆積物が非常に厚く堆積し，包含層の有無を調べるための下層確認調査が実施できなかった。

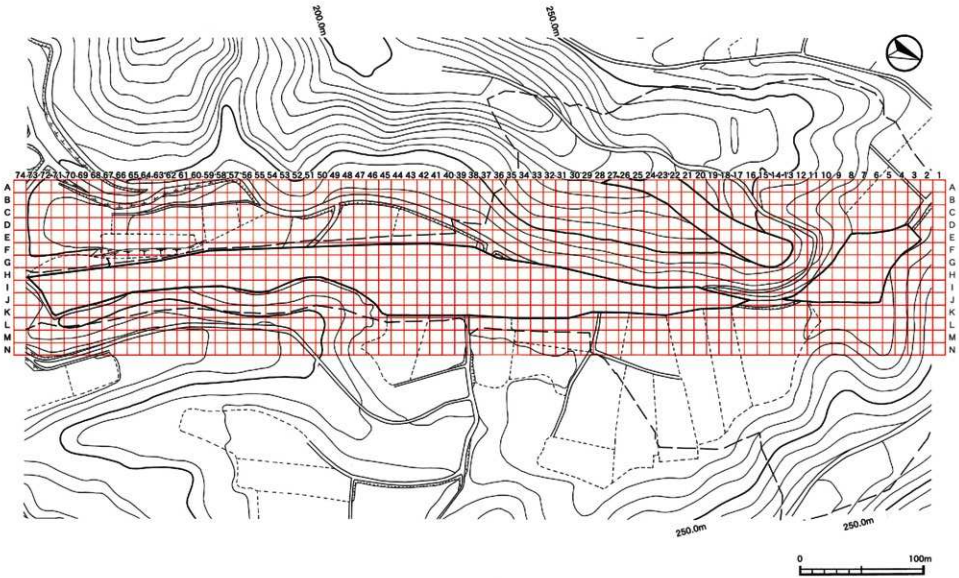
出土遺物はすべて出土状況の記録後取り上げを行い，検出した遺構については，写真撮影や図面作成作業を実施した。

調査の結果，谷部　ａ層上面で文明ポラに覆われた楕円形をした畝状遺構が広く検出された。また，　〜　層にかけて土師器や須恵器などの遺物や，溝状遺構や土坑などの遺構が検出された。

台地部では，Ｊ〜Ｌ－16〜22区について本調査を行った。一部で大規模な天地返しにより　層（アカホヤ火山灰）〜　層まで撹乱を受けていたが，縄文時代早期の包含層は残存しており土器片



第14図　狩俣遺跡　トレンチ配置図



第15図　狩俣遺跡　グリッド配置図

が出土した。下層確認のため旧石器該当層（　〜　層）まで掘り下げを行ったが，遺構，遺物は発見されなかった。

２　平成18年度（第15図）

平成18年度は，台地部（17年度実施部分を除く）と南部斜面について本調査を実施した。

調査は，重機で表土を除去した後，確認調査で検出された畝状遺構の遺構検出に主眼を置き，有無の確認を行い，残存する地域については人力で検出を行った。また，影響のない部分については，　層（文明ボラ）まで重機で除去し，遺物出土の可能性がある　a〜　層は人力で掘り下げを行った。その後，無遺物層（　層）を重機で除去後，　層（薩摩火山灰）上面まで人力で掘り下げを行った。出土遺物はすべて出土状況の記録後取り上げを行い，検出した遺構については，写真撮影や図面作成作業を実施した。

本調査の結果，調査区の台地部から縄文時代早期〜近世にかけての遺構・遺物などが発見され，斜面部から古代〜近世にかけての遺構・遺物が確認された。

近世の遺構は，畝状遺構，溝状遺構，古道などがある。このほか土坑もシラスを敷き詰められたものを含め多数検出された。圃場整備等の土地改良事業による削平で残存部分は少ないが，残されていた畝状遺構は，安永ボラが筋状に残る近世のものから存在し，遺物は，陶器や磁器の小破片が中心である。

中世〜近世の遺構は，畝状遺構，溝状遺構，古道，土坑などが検出された。畝状遺構は，天地返し等の大きな土地改良を受けていない地域に広がりを見せ，時期差があると思われる数種類のタイプに分けられる。特に，文明ボラを埋土とするものは，台地部の南端から最南端まで延び，斜面に沿って長径１ｍ前後の楕円形をした掘込みが規則的に続いていた。また，畝状遺構を区切るような溝状遺構も数条確認された。土坑は，遺跡全体で400基以上検出されているが，ほとんどが中世〜近世のものであると推察される。

遺物は土師器，瓦質土器，青磁などが出土している。

古代〜中世の遺構は，掘立柱建物跡，畝状遺構，溝状遺構，土坑などで，掘立柱建物跡は，いずれも中世の畝状遺構の下部，　層上面より検出された。北部では古道や溝状遺構が現道に沿うようにして検出された。南部では掘立柱建物跡，畝状遺構，大型の浅い土坑が隣接している。

遺物は，土師器，内黒土師器，須恵器，墨書土器，線刻土器，外赤土器，焼塩土器，紡錘車，金属製品などが出土している。

縄文時代中期〜晩期の遺構は，落とし穴，焼土，土坑などが検出された。　b〜　層にかけて検出されるが，明確な区分けができていない。

遺物は，後期の宮ヶ迫式土器，晩期の黒川式土器の土器や磨製石斧，石鏃，チップなどの石器が出土した。出土地域は限定的である。

縄文時代早期の遺構は，集石遺構，土坑などが　〜　層にかけて検出された。集石遺構は，合計23基が検出され，台地部の中央，南側にやや集中がみられる。

遺物は，石坂式土器，押型文土器，前平式土器，手向山式土器などや打製石斧，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，チップなどの石器が出土している。

第５節　日誌抄

以下，調査の経過については日誌抄により略述する。

【平成13年度】

平成14年１～３月

調査開始準備，重機進入路整備，樹木伐採等の環境整備（谷部，北部周辺を中心に）

確認調査開始

１～25トレンチ設定，掘り下げ，遺物取り上げ，遺構実測，下層確認

10・11・14～17・19・20トレンチ設定　重機による表土剥ぎ

遺物，遺構確認されず，土層断面実測後終了，埋め戻し

４～７・12・13・18・トレンチ設定　重機による表土剥ぎ

層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，埋め戻し

１・３・８・９トレンチ　，　，　層，平板実測，遺物取上，下層確認，埋め戻し

２トレンチ　層より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影

層より落とし穴検出，遺構実測，写真撮影，

・　・　層より遺物出土，平板実測，遺物取上，下層確認，埋め戻し

平成13年度　発掘作業状況

21～25トレンチ　撹乱有り（天地返し），　，　，　層，平板実測，遺物取上

23トレンチ　層より集石，竪穴住居跡，土坑多数検出，遺構実測，写真撮影，

，　層より遺物も多数出土，平板実測，遺物取上，炭化物サンプル採取

コンタ図作成，完掘写真撮影，土層断面図作成，埋め戻し

【平成17年度】

平成17年11～12月

発掘調査開始準備，重機進入路整備，樹木伐採等の環境整備

グリッド設定（Ａ～Ｎ－１～72区），グリッド杭打ち，レベル移動

平成13年度に引き続き確認調査開始　26～28トレンチ設定（中央部北側），掘り下げ

谷部（Ａ～Ｇ－14～28区）の確認調査，本調査を開始，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

中央部（Ｇ～Ｍ－17～52区）の確認調査　26～36トレンチ設定，掘り下げ，遺構検出

26～28トレンチ設定，掘り下げ

遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了

29～31トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後終了

32～36トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

，　層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，土層断面実測，下層確認後終了

谷部の確認調査　37〜41トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

37，38，41トレンチ　遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了

39，40トレンチ　　層上面より畝状遺構検出，引き続き本調査へ移行

谷部の本調査　Ａ〜Ｅ - 20〜26区（斜面下段）の調査実施

層上面より畝状遺構検出，平板実測，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測

Ｅ，Ｆ - 18，19区（斜面中段）の調査実施，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

畝状遺構は現存せず，　層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測

Ｆ〜Ｈ - 15〜17区（斜面上段）の調査実施，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

畝状遺構は現存せず，　層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測

12月15日　産業医　発掘現場作業環境視察

平成18年１〜３月

中央部（Ｇ〜Ｍ - 16〜52区）の確認調査継続　中央部の一部本調査を開始，掘り下げ

南部（Ｇ〜Ｍ - 53〜72区）の確認調査開始　新たに42〜63トレンチ設定

谷部（Ａ〜Ｇ - 14〜28区）の本調査を継続，掘り下げ

安全対策のため，確認トレンチ埋め戻し

中央部の確認調査　42，43，59〜63トレンチ設定，掘り下げ

42，43トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後終了

59トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

，　層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，下層確認後終了

60〜62トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

遺物，遺構確認されず

土層断面実測，下層確認後終了，トレンチ埋め戻し

63トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

平成17年度　発掘作業状況

層上面より畝状遺構検出，測道部分のため遺構実測，写真撮影後終了，トレンチ埋め戻し

中央部の本調査　Ｊ〜Ｌ - 16〜26区（台地北側）の調査実施

確認トレンチ拡張のため，重機による無遺物層の掘り下げ，大部分が　〜　層まで天地返しを受けていたが，撹乱部分より遺物出土，遺構は確認されず，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後調査終了，トレンチ埋め戻し

南部の確認調査　46〜58トレンチ設定，掘り下げ

46〜48，53，55〜58トレンチ設定，一部重機による表土剥ぎ，掘り下げ
遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了
49〜52トレンチ設定，一部重機による表土剥ぎ，掘り下げ
層上面より畝状遺構検出，引き続き本調査へ移行のため終了
谷部の本調査（Ａ〜Ｇ‐14〜28区）継続
Ａ〜Ｅ‐20〜26区（斜面下段）の調査実施
層上面より溝状遺構，土坑検出，平板実測，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測
Ｅ，Ｆ‐18，19区（斜面中段）の調査実施，掘り下げ，遺構検出
層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測
Ｆ〜Ｈ‐15〜17区（斜面上段）の調査実施，掘り下げ，遺構検出
層上面より溝状遺構，土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測
急傾斜面のため下層確認はできず，コンタ図作成後調査終了，埋め戻し
谷部調査区の本調査を終了，引き渡し
１月25日　空中写真撮影実施

【平成18年度】
平成18年５〜６月
北部（Ｅ〜Ｋ‐１〜14区）の本調査開始，環境整備，重機による表土剥ぎ，グリッド杭打ち，レベル移動，掘り下げ，県道を挟み西側と東側に分けて調査開始
中央部（Ｊ〜Ｌ‐24〜28区）の本調査開始，重機による表土剥ぎ，掘り下げ
Ｅ〜Ｇ‐４〜８区（北部西側）の調査
重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出
谷部へ向かって急激に落ち込む斜面であり，４，５区は削平を受け遺物・遺構無し
６〜８区は斜面に沿って　層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影
層上面では多数の土坑を検出，実測，写真撮影，一部下層確認実施
Ｆ，Ｇ‐８区では，斜面沿いに遺構検出（古道，溝状遺構），実測，写真撮影

平成18年度　発掘作業状況

Ｈ〜Ｋ‐６〜11区（北部東側）の調査
重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出
台地の縁辺部に当たる，1〜４区は削平を受け遺物・遺構無し，コンタ図作成，埋め戻し
５〜10区は緩斜面に沿って　層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影
層上面では多数の土坑を検出，溝状遺構，古道も数条検出，遺物出土，写真撮影

Ｊ～Ｌ - 24～28区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影，Ｅ，Ｆ - 24，25区は天地返しにより畝状遺構無し

６月７～９日　実務向上研修（現場研修）

平成18年７～９月

北部（Ｅ～Ｋ - １～14区），中央部（Ｇ～Ｍ - 24～38区）の本調査継続，掘り下げ

Ｅ～Ｋ - １～14区（北部）の調査

北部西側については，下層確認後土層断面図，コンタ図作成，調査終了，埋め戻し

北部東側は，　～　層より遺物出土　遺構検出（集石），実測，写真撮影

下層確認後土層断面図，コンタ図作成，調査終了，埋め戻し

北部調査区の本調査終了，引き渡し

Ｊ～Ｌ - 24～28区（中央部）の調査

層上面より遺物出土，遺構検出（溝状遺構，土坑），実測，写真撮影，地割れの痕跡あり

～　層より遺物出土，遺構検出（集石，落とし穴），実測，写真撮影，一部下層確認後終了

Ｈ～Ｌ - 28～38区（中央部）の調査

28～32区の　ｃ層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影，33～38区は削平により無し

層上面より形態の異なる畝状遺構検出，実測，写真撮影

～　層より遺物出土，遺構検出（掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑），実測，写真撮影

８月23日　発掘体験学習（大隅中１年３名）

８月25日　発掘作業員健康診断（建山遺跡にて実施）

平成18年10～12月

中央部（Ｇ～Ｍ - 28～52区）の本調査継続

南部（Ｇ～Ｍ - 53～66区）本調査開始グリッド杭打ち，レベル移動

Ｇ～Ｌ - 38～44区（中央部）の調査，掘り下げ

大部分が　～　層まで天地返しを受けていたため，重機による無遺物層の掘り下げ，　層まで遺物・遺構無し

～　層より遺物出土，遺構検出（集石），実測，写真撮影，一部下層確認Ｋ～Ｌ - 40～46区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

天地返しを受けていない部分からは，

層上面に古道，溝状遺構，畝状遺構検出，実測，写真撮影，　，　層遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，　層上面まで掘り下げ，コンタ図作成

平成20年度　整理作業状況

Ｇ～Ｌ - 45～52区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

上層が削平を受けていない49～52区を中心に，　層上面に溝状遺構，畝状遺構検出，実測，写真撮影，　層上面より焼土遺構，土坑検出，実測，写真撮影

～　層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，　層上面コンタ図作成

G～M - 53～66区（南部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

c層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影

緩斜面のほぼ全域から　層上面に畝状遺構検出，実測委託，写真撮影

傾斜が平坦になる62～64区の　層上面から遺構検出（掘立柱建物跡，畝状遺構，土坑），実測

～　層から多数の遺物（土師器類）出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影

11月２日　空中写真撮影実施

11月４日　現地説明会実施

11月13日～１月22日　畝状遺構実測委託

12月18日，19日　現地指導（飯沼憲司　別府大学文学部教授）

平成19年１～３月

中央部（G～M - 28～52区）の本調査継続，南部（G～M - 53～66区）本調査継続，掘り下げ

G～L - 28～52区（中央部）の調査

遺構検出（集石，土坑），遺構実測，写真撮影

～　層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ

実測，写真撮影，一部下層確認

層上面コンタ図作成，写真撮影，

中央部の調査終了

安全対策のため一部重機による埋め戻し

G～M - 53～66区（南部）の調査

層上面コンタ図作成，写真撮影

南部の調査終了

１月11日　空中写真撮影実施

１月11日　現地指導（濱崎忠雄　佐々木 修　鹿児島大学農学部教授）

平成21年度　報告書作成作業状況

調査終了

第Ⅱ章　狩俣遺跡の層位

狩俣遺跡の基本層位は，層厚は異なるが，　- 第　章で述べたように曽於市末吉町諏訪方に所在する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。よって，南九州における霧島，姶良カルデラ，桜島，鬼界カルデラ等からの噴出物が遺跡の相対的年代を推定する上で非常に良好な資料となっている。狩俣遺跡の基本土層については，第16図の狩俣遺跡基本土層柱状模式図の通りである。

狩俣遺跡は標高約270mの台地上に位置しているが，台地の北側と南側に開析する谷により，台地部と谷部斜面とで形成されている。

台地部は，全般に文明ボラ抜きや圃場整備が行われ，台地中央付近の尾根を削り，縁辺部へ押し込む形で平地を形成している。そのため，台地中央は上層が削平され，際は地層が上層よりしっかりと残存していた。また，圃場整備以前に大規模な筋状の天地返しを行っている畑もあり，表土下は畑や山林等を単位として複雑な様相を呈している。なお，天地返しは縄文時代早期以下の包含層へは達しておらず，対象地全ての部分で残存していた。

網かけの部分は本遺跡の遺物包含層

第16図　狩俣遺跡　基本土層柱状模式図

谷部斜面は，台地部方向から緩やかに傾斜しながら下っており，数多くの雨水による浸食と堆積を繰り返しながら谷を埋めるようにして地層を形成していた。特に　層は，地表面から　層上面までの間に多くの堆積を確認することができ，５mを超える厚さのところも少なくない。残存状況の良好な場所では，桜島を噴出源とした軽石層Ｐ１（大正火山灰），Ｐ２（安永火山灰），Ｐ３（文明ボラ）を同時に観察することができた。そこで狩俣遺跡では，桐木耳取遺跡の土層区分を基本とするが，部分的に　a層～　d層の区分を用いたものを基本土層とする。

狩俣遺跡の基本土層，遺物包含層，火山灰等の詳細については，以下の通りである。

a層　表土

b層　桜島Ｐ２　安永ボラ（1779年）

c層　暗褐色砂質土　近世の遺物包含層

d層　黒褐色砂質土

層　桜島Ｐ３　文明ボラ（1471年）　主に斜面で10～20㎝の堆積が確認されるが，台地部ではボラ抜きや削平が行われたと考えられ，本来は遺跡全体にあったと思われる。斜面

を利用して噴火当時耕作していた畠を，ボラがパックした状態で検出される。

a層　黒色土　主に古代〜中世の遺物包含層である。

b層　黒褐色土　主に縄文時代晩期〜古代の遺物包含層である。

　層　黄褐色土　霧島御池火山灰を含む　主に縄文時代中期〜晩期の遺物包含層である。

a層　暗橙色土　　b層（アカホヤ火山灰）の腐食土

b層　黄橙色軽石混火山灰層　鬼界カルデラ起源の火山灰層で通称アカホヤ火山灰（約7,300年前）と呼ばれている。遺跡全体に安定して堆積している。

a層　黄褐色軽石混茶褐色土　　b層（桜島Ｐ11）の二次堆積土

b層　黄褐色軽石層　桜島Ｐ11（約8,000年前）場所により厚い堆積も見られる。

　層　明茶褐色土　縄文時代早期該当の遺物包含層である。

　層　黒褐色土　縄文時代早期該当の遺物包含層である。

　層　黄白色砂粒硬質土　桜島Ｐ14（薩摩火山灰　約12,800年前）上位は固結した火山灰，下位は３㎜前後の軽石で構成され，縦方向にクラックが発達している。

　層　黒褐色粘質土

Ⅺ　層　黄橙色粘質土

Ⅻ　層　暗茶褐色粘質土

　層　黄褐色軽石混弱粘質土

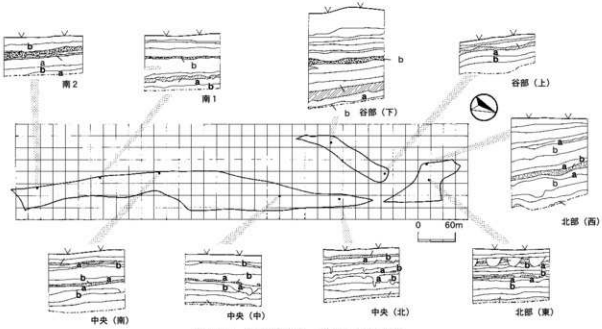
　層　暗赤褐色硬質土　桜島Ｐ15（時代未定）が点在する。

　層　暗青灰色硬質土

　層　明褐色硬質土　桜島Ｐ17（約26,000年前）が点在する。

　層　黄白色砂質土　上位はローム質，下位は砂質の状態である。

　層　明黄白色砂質土　姶良カルデラ（約26,000〜29,000年前）を噴出源とする。シラス



第17図　狩俣遺跡　各地点の層位

第Ⅲ章　谷部の調査

第１節　調査の概要（第18図）

谷部調査区は，本遺跡の北西部に位置し，東西に延びた台地の南斜面の裾野に相当する。

平成14年１～３月に実施した確認調査で，斜面に階段状に作られた畝状遺構の存在が知られ，平成17年11月～平成18年３月に本調査を実施した。

調査範囲は，谷の裾野から台地端部までの斜面で，ほぼ南北130m，東西に幅20mの細長い短冊状を呈している。なお，およそ標高265mの頂部と裾野の高低差は約50mである。

平成13年度の確認調査では，斜面に沿って階段状に作られた畝状遺構が検出され，その際，第　層（Ｐ３の文明ボラを含む）に覆われていることが確認されていた。そこで，平成17年度の本調査では畝状遺構の分布範囲を明らかにするため，５ヶ所に確認トレンチを設定し（37～41トレンチ），詳細の把握に努めた。

その結果，谷部上段（Ｆ～Ｈ－13～16区），中段（Ｅ，Ｆ－17，18区）では，時期の特定できない造成土が確認され，自然堆積土の下から文明軽石の存在は確認できたが，畝状遺構の確認までには至っていない。谷部下段（Ａ～Ｅ－19～25区）では，畝状遺構の広がりについて調査区境を中心に調査を実施し，畝状遺構が調査範囲のさらに南側に展開していることが確認された。

新たな確認調査の結果，畝状遺構は，傾斜の緩やかな谷部下段にのみ存在することが明らかとなった。すなわち，谷部のほぼ中心部を中心とした狭い平坦地を利用した営農が行われていたことが判明した。

本調査は，調査区を上段，中段，下段と区分し，具体的な調査方法として，第　層の残存状況を把握することを第一とした。調査では，傾斜面であることから流入土が厚いところでは４ｍに達する場所もあり，側壁の崩壊等に注意しながら，畝状遺構の把握に努めた。

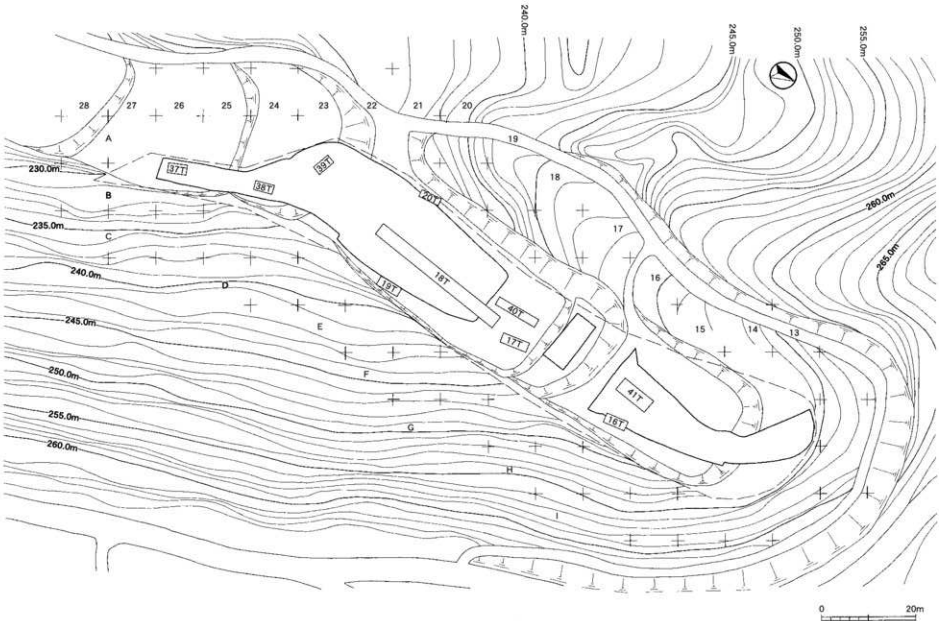
その結果，上段～中段では，古代～中世の土坑や溝状遺構が検出し，下段では，中世の畝状遺構と古代～中世の土坑や溝状遺構を検出している。

出土遺物は，縄文土器，古墳時代，古代，中世，近世と幅広く出土しているが，基本的には高所からの流入，転入と判断され，遺構時期を特定できるところまで至っていない。

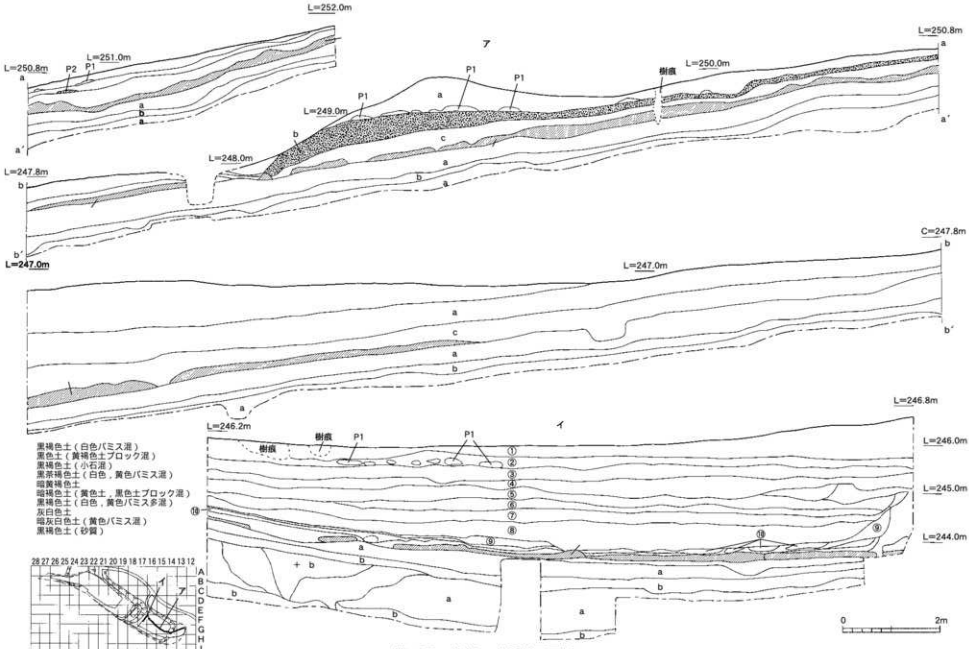
第２節　谷部の層位（第19～21図）

地形の特性から大量の土砂が長年に渡り流れ込み，谷を埋めていったと考えられる。その途中で何カ所か土砂が滞留する場所に自然堰が形成され，緩斜面を形成したと考えられる。　～　層については，谷部全体で確認することができた。なお，急斜面では薄く堆積しているが，緩斜面ではやや厚くなる傾向が見てとれる。表層は斜面の自然堆積土と流入土が混在して何層にも重なり合っており，自然堰の部分では約４ｍを越える部分も見られた。

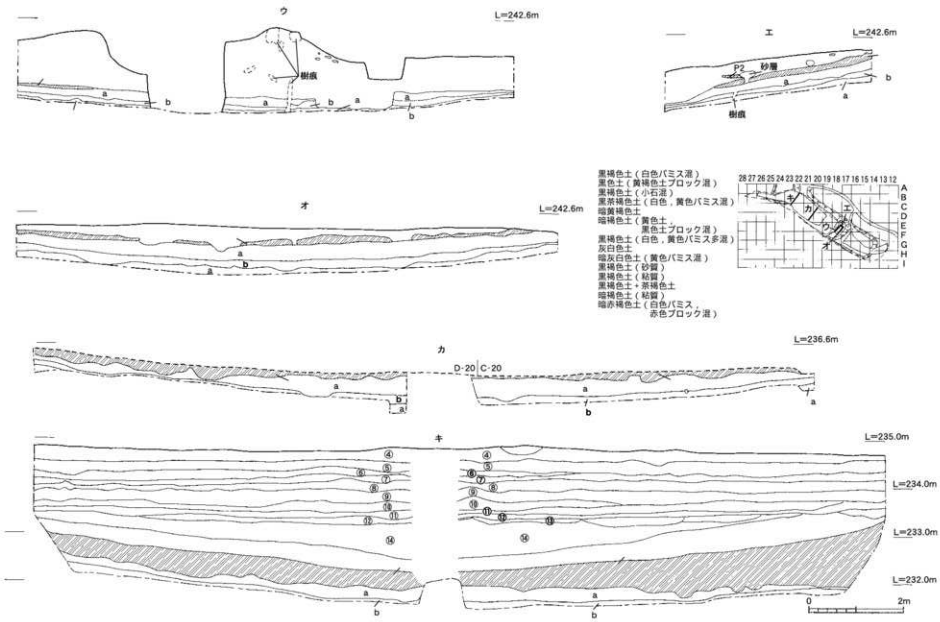
表層の中にはＰ２（安永軽石）の層も含まれ，上部には，部分的にＰ１（大正火山灰）も確認される。　層以下については非常に厚く堆積しているため，幅の狭いこの調査区では確認することが難しく，明らかにすることが出来なかった。



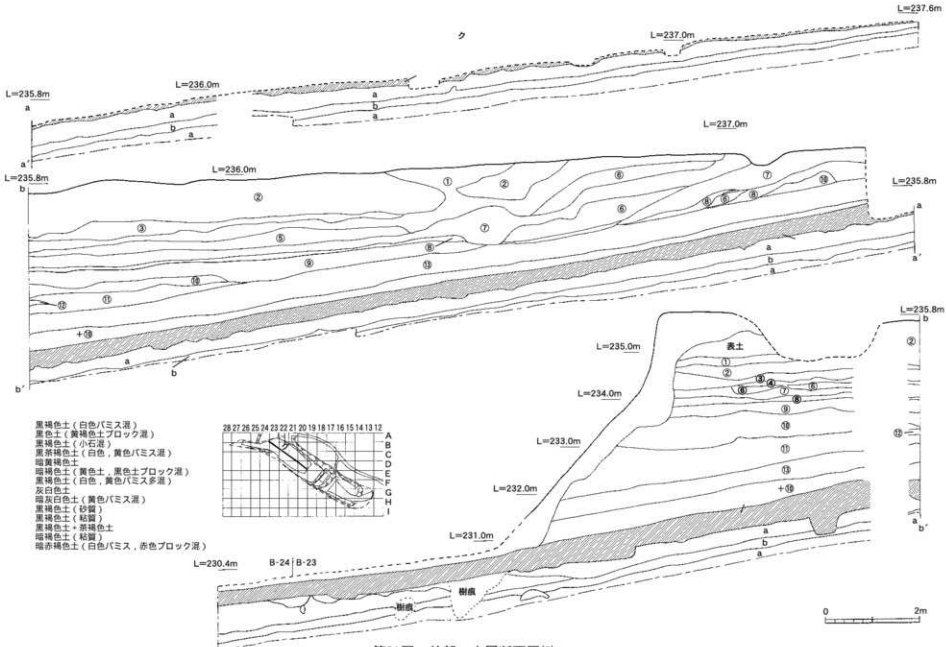
第18図　谷部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第19図　谷部　土層断面図(1)



第20図　谷部　土層断面図(2)



第21図　谷部　土層断面図(3)

第３節　検出遺構（第22～32図）

谷部での古代～中世と判断できる遺構は，　ｂ～　層で溝状遺構が７条，土坑が37基，中世～近世の遺構は，　ａ層上面で畝状遺構１群，土坑４基を検出しているが，中には時期不明の大型土坑も検出している。

１　古代～中世（第22～25，30，31図）

古代～中世の溝状遺構は，谷の傾斜に沿って北側から南側へ向かって形成され，土坑は１ｍ前後の浅いものが上段側に集中し，下段では並んで検出された。

⑴　溝状遺構（第22～24，30，31図）

溝状遺構は，　層上面にて上段で２条，下段で５条の計７条が検出された。

溝状遺構１（第22，30図）

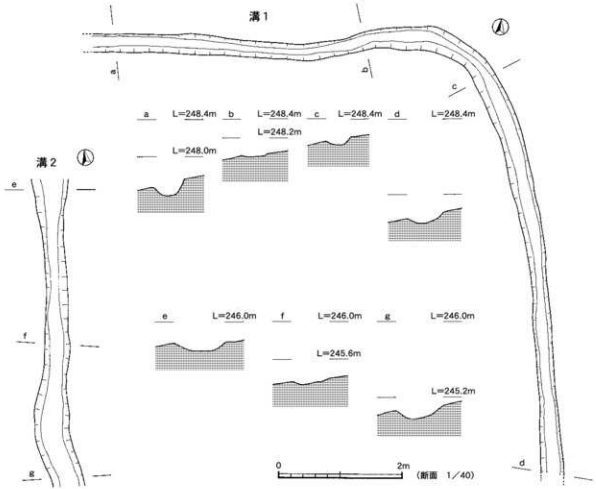
Ｇ，Ｈ－14，15区の　層上面で，谷部調査区の上段から検出された。西方向から東方向へ直線的に延びた後，直角に近いＬ字状に屈曲しながら南下するように検出され，屈曲の角度は約100　である。検出された溝の規模は，平均して長さは，13 3ｍ，幅33㎝，検出面からの深さが17 5㎝で，断面形態は逆台形を呈している。掘り込みの底面に平坦面は見られず，水の流れによりできたと思われる凸凹が続いている。屈曲部の標高地が最も高く，そこから西方向へ傾斜角５　，南方向へ傾斜角10　と地形に沿って流れており，下流側へ向かうほど溝が深くなっている。西方向は調査区外へと延びており，南方向は途中で消失するため全体像は明らかでないが，さらに谷側の溝状遺構２へつながる可能性が高い。埋土は黒褐色土が主体であり，流れ込んだと思われる黄褐色土や黄色パミス，小礫などが混在していた。

溝状遺構２（第22，30図）

Ｇ－16区の　層上面で，溝状遺構１の南側から検出された。溝状遺構１の消失した南端の延長線上に当たることから，連続する遺構ではないかと考えられるが，直線にして約10ｍ離れていることから，ここでは別の遺構として取り扱うこととする。検出された溝の規模は，長さは５ｍ，幅48㎝，検出面からの深さが18㎝で，断面形態は逆台形を呈しており，西側にわずかに傾斜している。傾斜角約10　の斜面を流れたと思われ，掘り込みの底面に平坦面は見られず，凸凹が続いている。上流側，下流側共に消失しており検出されなかったので，延長線上にある溝状遺構１との関係などは不明である。埋土は溝状遺構１とほぼ同じで，黒褐色土が主体であり，黄褐色土や黄色パミス，小礫などが混在していた。埋土中より遺物は出土しなかった。

溝状遺構３（第23，31図）

Ｂ～Ｄ－20～22区の　層上面で，谷部調査区の下段から検出された。Ｄ－20区側からＢ－22区へ向けて，南北方向へ直線的に延びるように検出され，21，22区境では南西方向へわずかに蛇行して延びている。検出された溝の規模は，長さが30ｍ，平均して幅43 3㎝，検出面からの深さが15㎝で，断面形態は皿状を呈している。谷部調査区の下段の　層上面は，南北方向に全体が傾斜しており，中心部は少し低くなっている。その低くなった部分に沿うようにして，溝状遺構３が検出されている。やや流れの緩む蛇行部分の幅は約60㎝と，上下より広く，深さもわずかに浅くなっている。掘り込みの底面に平坦面は見られず，溝状遺構１，２と同様に，水の流れによりできたと思われる凸凹が続いている。溝は傾斜面に沿って南北方向にまだ延びていたと思われるが，北端，南端ともに



第22図　谷部　古代～中世　溝状遺構１，２

消失していた。埋土は暗褐色土が主体であり，黄色パミス，小礫なども含まれる。

溝状遺構４（第23，31図）

Ｂ－22区の　層上面で，溝状遺構３の南西側へ約１ｍ離れて検出された。溝状遺構３と同じように，Ａ－23区側へ向けて南北方向へ直線的に延びるように検出されたが，溝状遺構３より約15　西よりに流れている。検出された溝の規模は，長さが５ｍ，平均して幅41.6㎝，検出面からの深さが17㎝で，断面形態は深皿状を呈している。底面に平坦面は見られず，凸凹が連続している。埋土は暗褐色土が主体で溝状遺構３とほぼ同じである。北端，南端ともに消失しており，溝の全体像は不明であるが，溝の延びる方向は谷部調査区の傾斜とほぼ同じである。

溝状遺構５（第23，31図）

溝状遺構４の西側約20㎝の位置に並んで検出された。流れの方向は南北方向で，検出された溝の規模は，長さが6.3ｍ，平均して幅46㎝，検出面からの深さが13㎝と長さが１ｍほど長いが，溝状遺構４とほぼ同規模である。断面形態はレンズ状を呈しており，底面に平坦面は見られない。北端，南端ともに消失しており溝の全体像は不明である。溝状遺構４と埋土もほぼ同じ暗褐色土であり，方向，規模も同じであることから，ほぼ同時期に形成された自然流路の可能性も考えられる。

溝状遺構６（第23，31図）

溝状遺構４と５を，北東から南西方向へ断ち切るように検出された。検出された溝の規模は，長さが1 .6m，平均して幅25㎝，検出面からの深さが18㎝である。断面形態は逆台形を呈している。埋土は，黒褐色土に黄色土や小礫が混ざるものの少量である。溝状遺構４，５とは切り合い関係ばかりではなく，方向や規模，埋土の違いから，異なる時期に形成された溝である。

溝状遺構７（第24，31図）

Ｂ～Ｃ－21～22区の　層上面で，溝状遺構４～６の西側約３ｍ離れて検出された。溝状遺構４，５と同じように，南北方向へ直線的に延びるように検出された。検出された溝の規模は，長さが9 .2m，上流側に当たる北側の平均は幅24㎝，検出面からの深さが５㎝，下流側に当たる南側の平均は幅50㎝，検出面からの深さが６㎝と南側へ向かうほど幅が広く深さが浅くなっている。断面形態は全体を通して浅い皿状を呈している。底面に平坦面は見られず，谷部調査区の他の溝状遺構と同じく凸凹が連続している。埋土は暗褐色土が主体である。

北端，南端ともに消失しており，溝の全体像は不明であるが，溝の延びる方向は谷部調査区の傾斜とほぼ同じである。

⑵　土坑（第25，30，31図）

古代～中世の土坑は，計37基が　層上面で検出された。埋土は主に　層の黒褐色土が中心であり，暗褐色土や黄褐色土が混ざるものもある。平面形状の特徴から，大きさ径が１ｍ未満の円形（　類），１ｍ前後の円形（　類），楕円形（　類），その他の定形（　類），不定形なもの（　類）に分けられる。そこで，各調査区の年代ごとの土坑をこの５種類に分類し述べる。さらに深さや断面形状，埋土などにより細分化されるが，特徴的なものについては個別に取り上げる。

土坑７～15は，　類の土坑である。土坑７～９はやや浅めのレンズ状であるが，土坑10～15は45～90㎝の深さを持ち，側面の崩落で黄褐色土の混ざるものもある。

土坑16～37は，　類の土坑である。土坑16～28は径70～80㎝程度のものであり，土坑17を除いて浅い皿状を呈し，黒褐色土の中に黄褐色土の小ブロックや炭化物が見られた。土坑29～37は径が１ｍを越えるやや大型で，薄いレンズ状を呈するものが多い。谷部調査区の上段に集中が見られ，重なりが見られないことからほぼ同時期に使用されたと思われるが，使用目的は不明である。土坑34の埋土中より土師器片が出土し図化した。（第35図29）

土坑38～40は，　類の土坑である。土坑38，39は約１２　０.7mの楕円形を呈し，断面形は浅い皿状である。埋土は黒褐色土を主体とするもので，底面に凸凹が見られる。

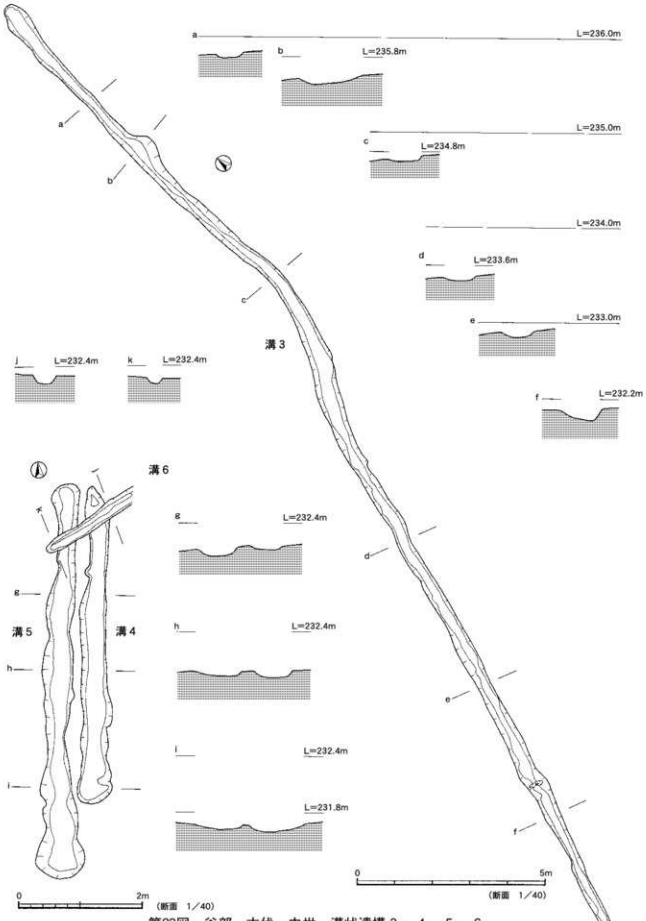
土坑41は，105　97㎝の方形を呈した　類の土坑であり，断面形は浅い皿状である。

土坑42，43は，　類に当たる不定形の土坑である。土坑42は，底面の北側に径が約30㎝の小ピットを確認した。土坑43は底面に平坦面を持ち，西隅に径60㎝前後の掘り込みが見られた。

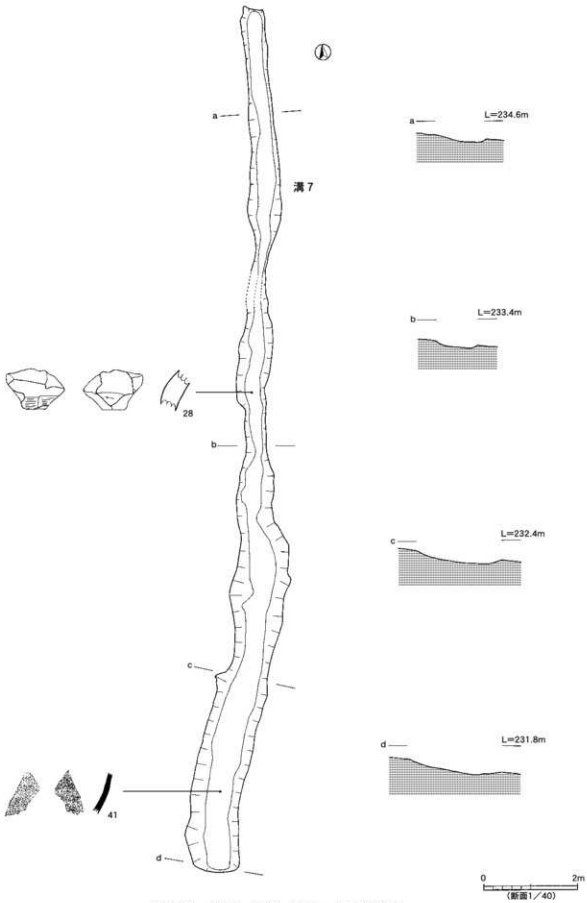
各土坑の計測値については，第２表に示した。

土坑40（第25図）

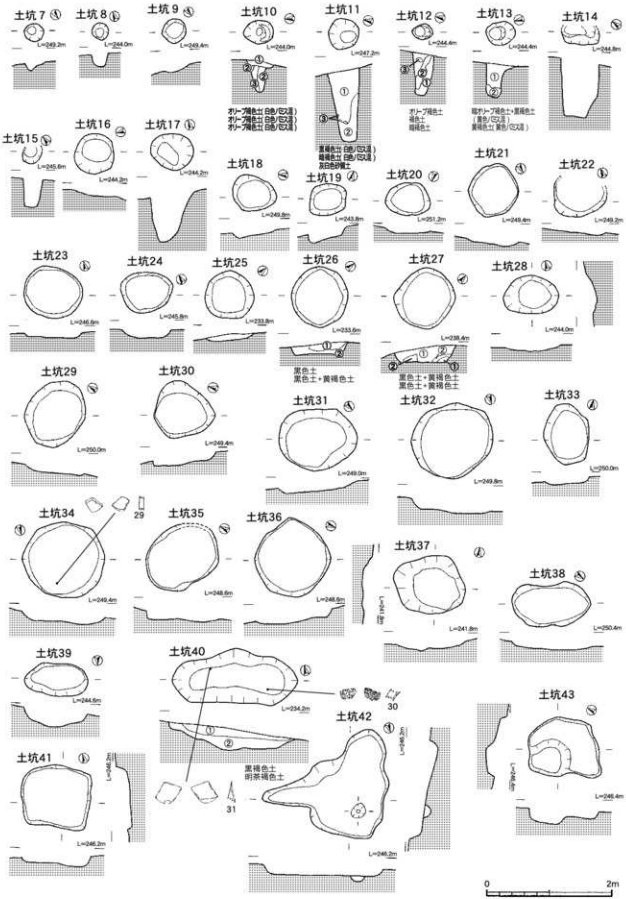
Ｂ，Ｃ－21区で検出された。平面径は198　82㎝の楕円形を呈し，深さは35㎝である。断面形はボウル状を呈し，底面に平坦面は見られない。埋土は，底面付近が暗褐色土，上位が黒褐色土でありやや粘質を持つ。埋土中より数点の礫と土師器片が２点出土し図化した。（第35図30，31）



第23図　谷部　古代～中世　溝状遺構３，４，５，６



第24図　谷部　古代～中世　溝状遺構7



第25図　谷部　古代～中世　土坑

2　中世～近世（第26～29，32図）

中世～近世の遺構は，　a層上面で畝状遺構１群，土坑４基が検出された。畝状遺構は，平成13年度の確認調査において既に存在が判明していたが，谷部の下段側全面に広がっていた。北側の尾根をひとつ越えた谷で検出された畝状遺構１と形状が同じであった。範囲はさらに南側の調査区外へ延びていたが，上段では確認することができなかった。

土坑44～46は，畝状遺構を切るように検出され，時期を特定する遺物の出土がなかったため，時期不明の土坑47を含めて中世～近世の遺構として取り扱った。

⑴　畝状遺構２（第26～28，32図）

Ａ～Ｅ－19～24区の　a層上面にて，ほぼ全域から畝状遺構が検出された。

谷部調査区の下段に当たる斜面において，　層（文明ボラ）直下の黒色土を掘り込む形で畝間が残存し，東西方向を基調とした畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に並んで検出されている。畝の凸部の残存は確認されておらず，文明ボラに覆われることで畝部が押しつぶされ堆積物に押し流されたと思われる。

畝間は畝状遺構１と形状が類似し，長さ１～2 3m，幅21 5㎝前後，深さ約15㎝を基本とする細長い楕円形を呈す凹みが階段状に配置され，谷底方向へ向かって規則的に並んでいる。一方，この畝状遺構を断ち切るように直交する溝状の窪地が検出されているが，これについては，その検出状況及び前後関係から，一時的に発生した自然流路痕と推測され，畝間の長さ，幅，深さともに安定しない部分も多い。

埋土のほとんどは文明ボラであるが，一次堆積物ではなく，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在したり，小規模な堆積を繰り返し交互に堆積したりしている。断面は底面に凸凹を持つ不定型なものが多く，農耕具痕も想定できるが実証はできていない。

レベル的に標高の高い東側の列は，水流による影響をあまり受けておらず，長さ２m前後，幅は約25㎝，畝間の中心間隔は80～95㎝と安定している。階段状に並んだ畝間の列は規則的に南へ向かって延びているが，東端に当たる列はわずかに中央方向へ向きを変えている。反対に影響を受けやすい西側の列はばらつきが多く長さ0 9m，幅は20㎝前後と，東側よりも小さめとなっている。

⑵　土坑（第29，32図）

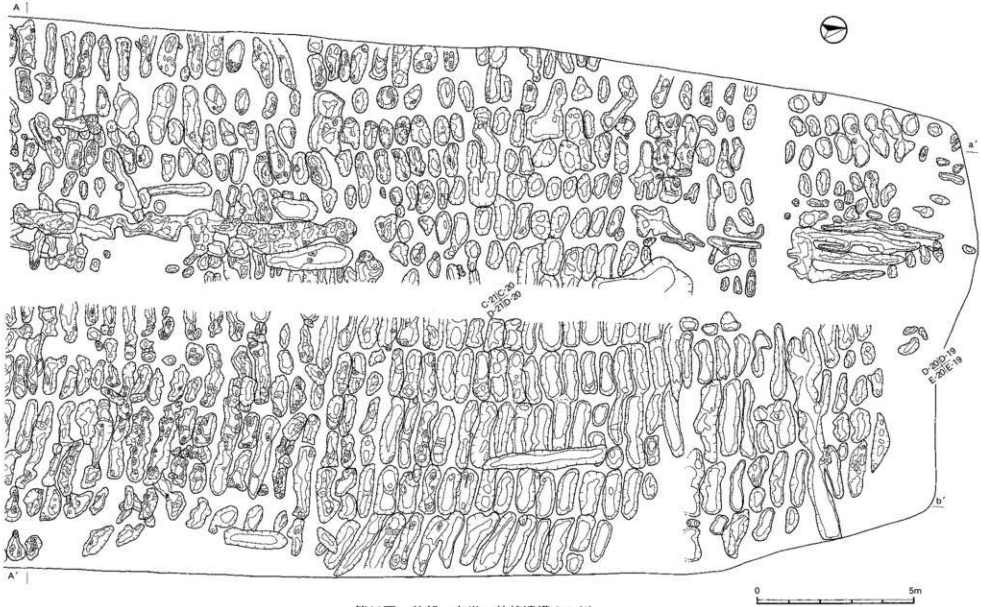
土坑は計４基検出され，土坑44～46は楕円形（　類），土坑47は不定形である。（　類）

土坑44～46（第29図）

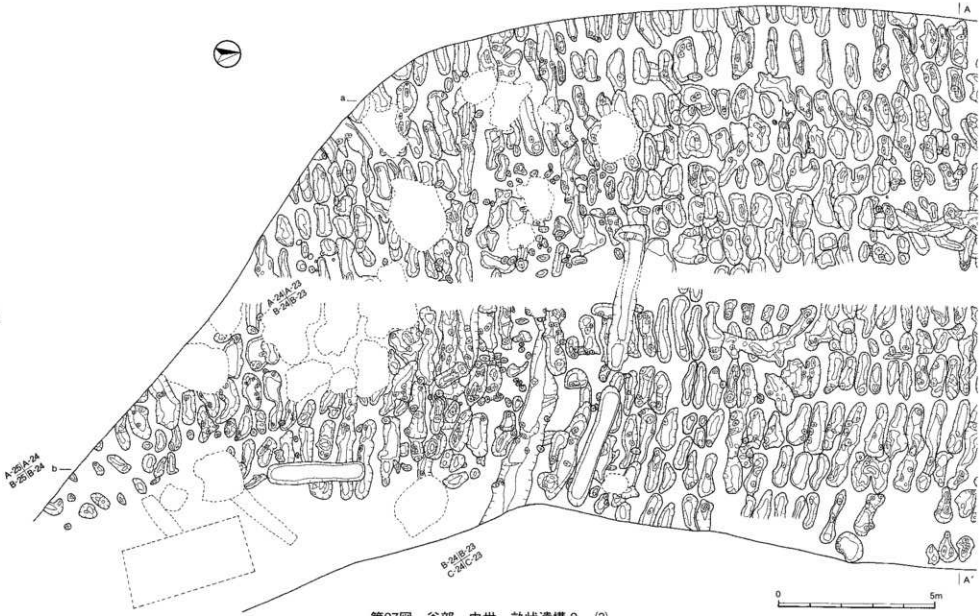
土坑44～46は，Ｂ，Ｃ－23，24区で畝状遺構２を切るように検出された。いずれも　a層上面で検出され，埋土は白色パミスや黄色パミスが混在した黒褐色土が主体であり，畝状遺構の埋土とは異なる。平面径は，平均して393　60 7㎝の楕円形を呈し，深さは約31㎝である。断面形は逆台形を呈し底面に平坦面を持つ。掘り込み面は検出面よりも上位と推定されるので貯蔵目的と思われる。

土坑47（第29図）

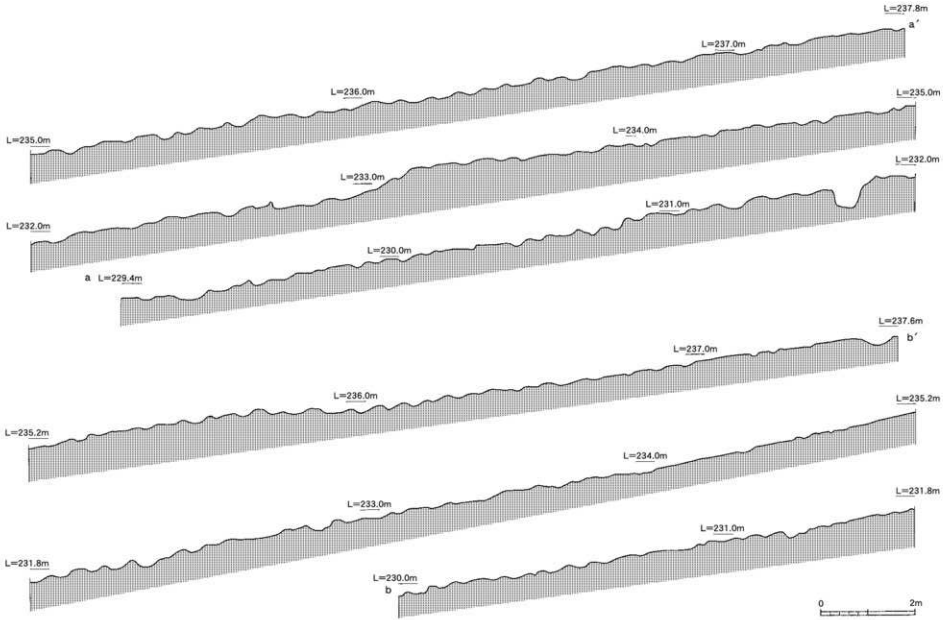
Ｆ－16区の　層上面で検出された。検出された平面径は466　340㎝，深さは約１mと大型である。埋土は黄褐色土が主体であるが，黒色土，暗褐色土，赤橙色土などが混在していた。底面近くで炭化物が大量に見られ，底面は赤褐色に変色していた。埋土中より数点の土器片が出土したが流れ込みの可能性も強く，時期不明土坑と判断した。（第35図32）



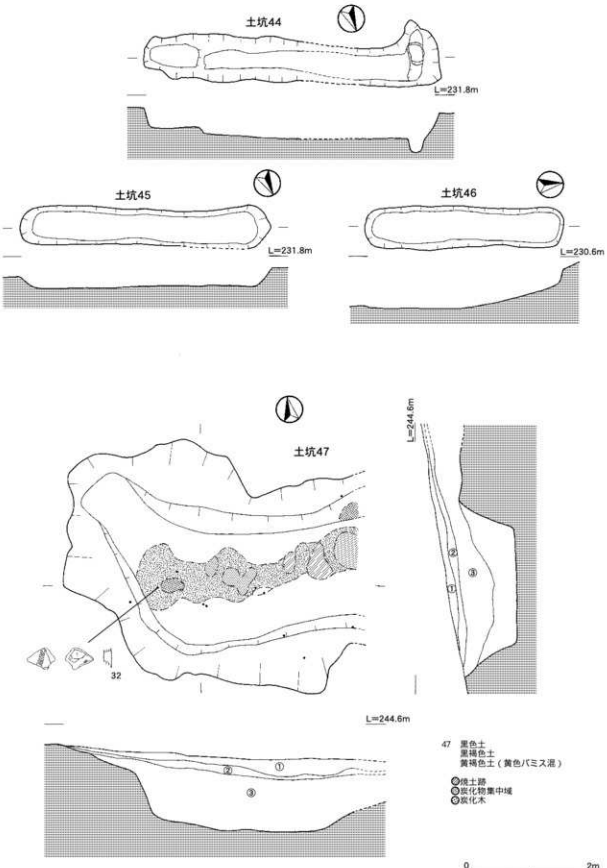
第26図　谷部　中世　畝状遺構２－(1)



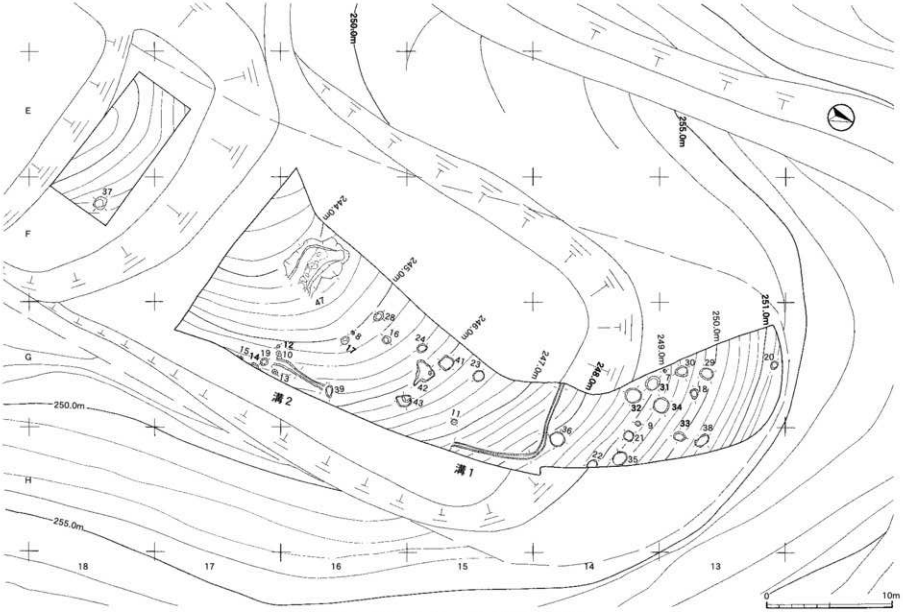
第27図　谷部　中世　畝状遺構２－(2)



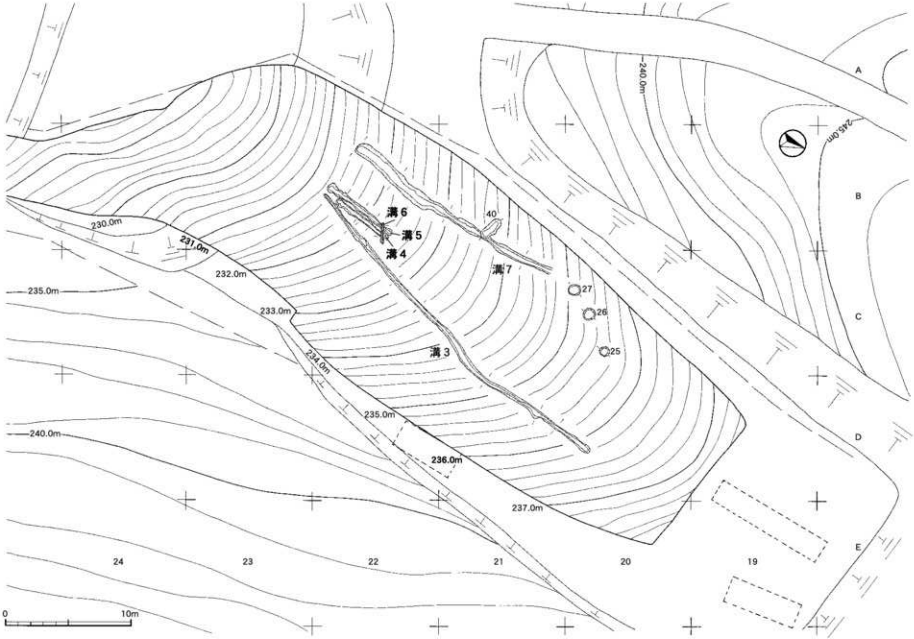
第28図　谷部　中世　畝状遺構２　断面図



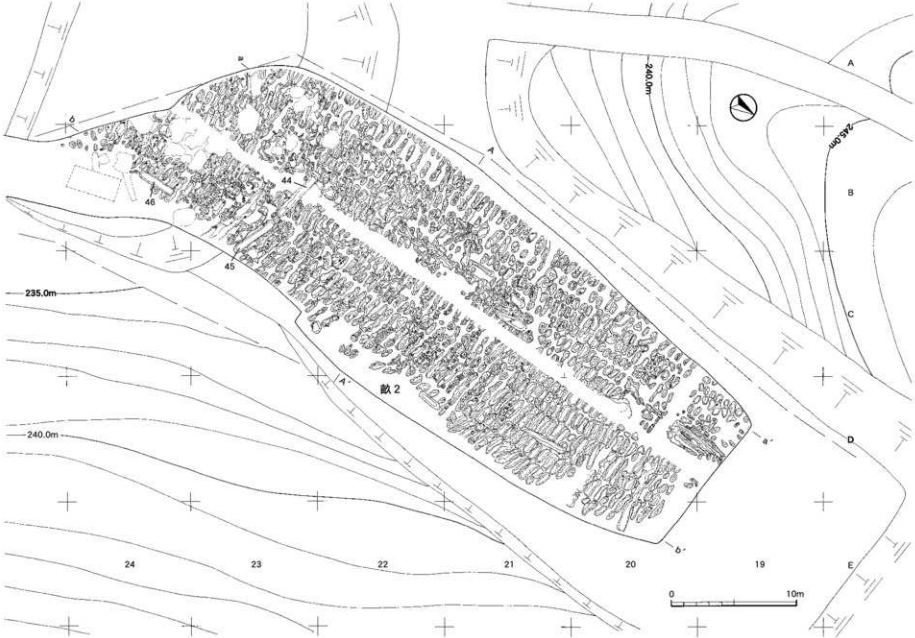
第29図　谷部　中世～近世　土坑



第30図　谷部　古代～中世　遺構配置図(1)



第31図　谷部　古代～中世　遺構配置図(2)



第32図　谷部　中世～近世　遺構配置図

第２表　谷部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
7	30	26	10
8	27	24	20
9	38	37	6
10	50	37	48
11	51	46	91
12	33	24	65
13	46	37	49
14	59	-	90
15	30	-	45
16	66	64	6
17	68	58	64
18	69	54	5
19	65	52	15
20	71	53	5
21	87	76	7
22	81	-	2
23	92	75	7
24	82	64	12
25	78	76	10
26	96	90	14
27	98	97	22

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
28	87	61	8
29	111	83	6
30	97	87	13
31	125	100	10
32	127	120	13
33	96	72	8
34	130	120	8
35	123	95	3
36	120	120	8
37	118	96	9
38	125	63	10
39	99	52	26
40	198	82	35
41	105	97	12
42	190	152	11
43	110	94	23
44	468	62	50
45	397	56	23
46	314	64	20
47	466	340	106

第３表　狩俣遺跡　石材分類表

石　材	概　　要
黒耀石	黒色を基調としガラス光沢を示す。断口は貝殻状。光を通すタイプ，光を通さない漆黒のタイプ，光を通し不純物を多量に含むタイプがある。割ったときに鋭利な切片が得られるので，石鏃など石器の材料として利用される。
玉　随	微結晶質の石英。同心円状の縞模様がある玉随を「めのう」と呼ぶ。縞の色は青灰色や濃赤色を基調としている。
チャート	微晶質の石英より緻密で硬い岩石。非晶質珪酸の殻を持つ放散虫などの遺骸が，微細な砕屑粒子とともに堆積し，続成作用を受けたもの。色調は灰色と黒色を基調としている。
玄武岩	代表的な火山岩で，全体的に黒っぽく見える。斜長石，かんらん石，輝石を含むが，まったく見えないものもある。ガラスや小さな磁鉄鉱を含むものもある。
安山岩	中性の火山岩で，日本の火山の多くはこの安山岩からできている。基調は灰色と黒色で輝石を多く含んだものや，表面が風化しているものもある。
凝灰岩	火山の爆発で飛ばされた火山灰が，陸上だけでなく海底にも堆積し，固まったものである。色調は灰色を基調としている。
花崗岩	地球上で一番多い深成岩で，全体に白っぽく見え，黒雲母がばらまかれたようになっている。ピンク色をしたカリ長石を含むきれいなものもある。
頁　岩	堆積岩のひとつで，泥岩が長い間続成作用を受け，数cm～10数cmくらいの厚さで地層面に沿って割れたものである。
砂　岩	径２～１／16mmの粒子で構成される砕屑岩。水流の安定している河川では，粘土質粒子の混入が少ないものができやすい。色調は灰色を基調としている。
泥　岩	砂岩と同じく堆積岩の一種である。水流が弱かったり不安定なところでできやすい。色調は灰色を基調としており，大きめの石英を多量に含んでいる。

参考文献　「検索入門　鉱物・岩石」保育社　「学研の図鑑　鉱物・岩石・化石」学習研究社

第４節　出土遺物

谷部の出土遺物点数は，狩俣遺跡全体の約７％弱にあたる419個である。なお，調査区域が急斜面に立地すること，また斜面上に不安定な流入土が厚く堆積していることなどから，調査の安全確保のため　層面以下の掘り下げは実施していない。現在の畑地の下には厚い流入土の堆積物が何層にも重なり合っているが，大部分で　層が残されていた。

調査の結果，縄文時代晩期，古墳時代，古代～中世，近世の遺物が認められた。出土の主体は古代の土師器や須恵器であるが，小破片も多く，土器40点，石器６点を図化した。

１　縄文時代（第33図１～８）

⑴　土器（第33図１～４）

１は深鉢形土器である。胴部はやや内弯気味に立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部には貼り付けの刻目突帯がめぐる。外面には横方向の粗いヘラケズリによる凹凸がある。内面には横方向のナデが施されている。

２～４は底部片で外面には編布圧痕が残り，内面は丁寧にナデが施されている。２の焼成は比較的良好である。

⑵　石器（第33図５～８）

５は佐賀県多久産の安山岩，６は頁岩製の打製石鏃である。５は先端が欠損し，基部の抉りは比較的浅く正三角形を呈する。６はドーム状の形状を呈するもので，基部の抉りは深い。

７は頁岩を素材とした磨製石斧である。全面を丁寧に研磨し，右側面には表・裏面からの擦り切り技法による加工痕がみられ，薄くなった後に切断したと判断される。

８は玉随製の縦長剥片の素材とした石匙で，裏面に主要剥離をそのまま残している。

２　古墳時代（第34図９～11）

９は甕で胴部から底部までが残る。底部はやや外反し端部は丸くおさまる。底部は中空で，脚部内面の天井部は丸い。体部内外面ともにハケ目状の工具痕，体部と底部の境には指頭圧痕，脚部内面には爪跡が残る。また，内面にはススが付着している。

10は甕の口縁部片でやや外反気味になる。内外面ともにナデが行われている。

11は甕の底部片である。端部は外反気味で丸くおさまる。内外面ともにナデが行われている。

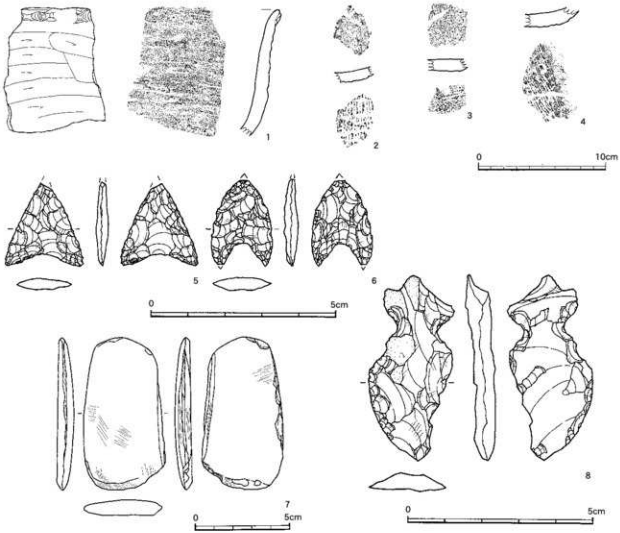
３　古代（第35図12～44）

⑴　土師器（第35図12～33）

12～15は坏の口縁部片で，内外面ともにヨコナデが行われている。14は復元口径が14.2㎝になり，焼成は良好である。

16は坏で底部から口縁部まで残り，口径が12.2㎝，器高4.4㎝，底径6.2㎝になる。体部と見込みの境は明確である。底部はヘラ切りの後に調整を行っていると思われる。体部内外面にはヨコナデが，内底面には成形時の調整痕が同心円状に残る。焼成は良好である。

17～24は坏の底部片である。復元底径は17，19，20が6.2㎝，18が7.0㎝，21が5.0㎝，24が8.8㎝になる。体部内外面はヨコナデが残る。いずれも底部切り離しはヘラ切りである。多くは切り離し後に底部の調整を行っているが，18，19は行われていない。22，23は底部切り離しの後，底部の端の調整が行われておらず，切り離しの際にはみ出した粘土の痕が残っている。



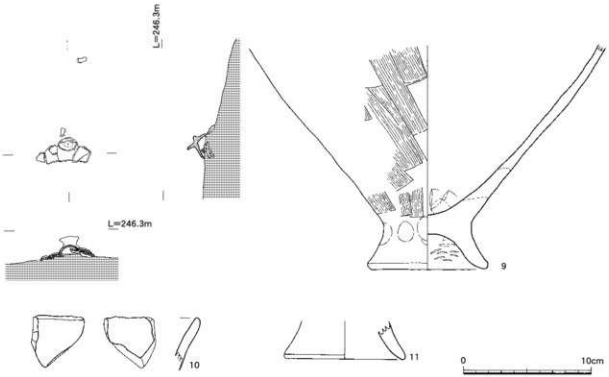
第33図　谷部　縄文時代の遺物

25は埦の底部片である。高台径は推定7.6cmになる。高台は貼り付けられており，外反気味に開き，端部は丸い。内外面ともにヨコナデが残る。また，高台内も丁寧に調整が行われている。

26～33は甕の破片と思われる。26は口縁部片で直線的である。焼成は良好で内外面ともに丁寧なナデが施されている。27は外反気味で調整はナデが行われている。28は溝２出土の頸部片である。外面はナデ，内面の上方はナデが，下方はヘラケズリが行われて，その境には稜ができている。29は土坑11出土の胴部片である。細片のため器形はわからないが，内外面ともにナデが行われている。30は土坑39出土の頸部片である。外面には籾痕と考えられる凹みがある。外面にはヘラケズリ，内面は比較的丁寧なナデが行われている。31は土坑39出土の胴部片である。内面は大部分が削れている。内面は丁寧なナデが行われている。32は土坑２出土の胴部片で，外面はナデ，内面はヘラケズリが行われている。33は胴部から頸部の破片である。胴部から口縁部へ向けて頸部が強く外反する。頸部の内面は稜を持たない。内外面ともに丁寧なナデが行われ，焼成は良好である。

⑵　黒色土器Ａ類（第35図34～38）

34～38は黒色土器Ａ類の破片で，外面はヨコナデ，内面はミガキが行われている。34～36は口縁



第34図　谷部　古墳時代の遺物

部片で，36は復元口径11 8㎝になる。

37は体部下半の破片で器種はわからない。他に比べ外面の色は赤味が強い。

38は埦の底部片である。高台が貼り付けられていたようだが剥がれている。

⑶　墨書土器（第35図39）

39は黒色土器A類の体部片で外面に墨書がある。小破片で文字は判読できない。外面はヨコナデが，内面はミガキが行われている。

⑷　須恵器（第35図40〜42）

40は壺の肩部の破片である。肩部に頸部が貼り付けられていたようだが剥がれている。外面には自然釉がかかり格子目タタキが残る。内面には同心円状の当て具痕が残る。頸部が剥がれた部分にも叩き目の痕が残っている。

41は溝２出土の体部片である。外面は丸みを帯び，器壁は薄い。

42は壺もしくは甕の胴部片である。外面に格子目タタキが，内面には平行文当て具痕が残る。

⑸　軽石製品（第35図43，44）

43，44は軽石製品の破片である。

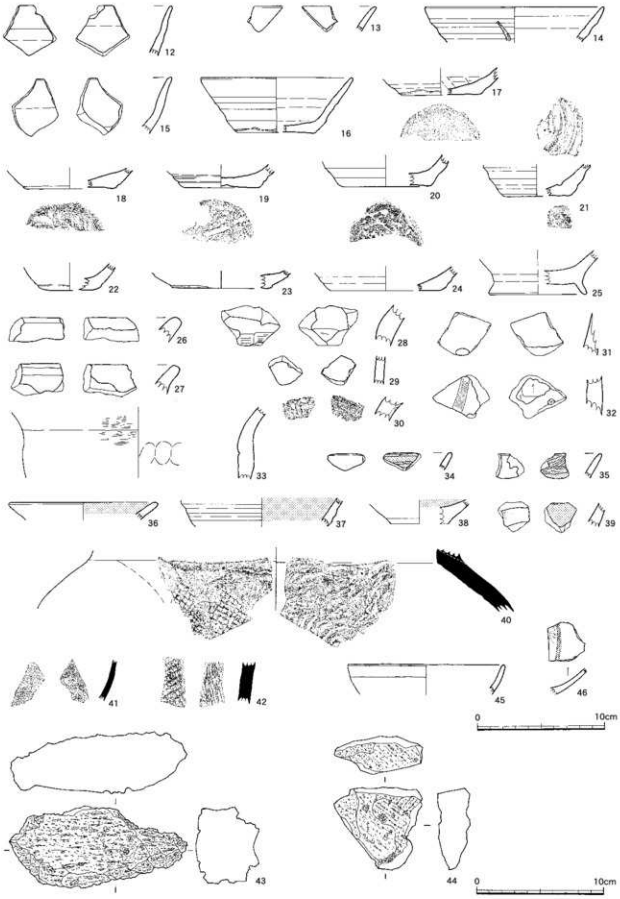
43は平坦な面が一面のみ残存する。残存面はやや赤く変色しており，火を受けた可能性がある。

44は全面に加工が確認され，比較的平坦に加工された面とケズリをそのまま残した凹凸で構成されている。なお，ケズリの幅は２㎝程度である。

４　近世（第35図45，46）

45は埦の口縁部片である。焼成は良好で外面には黒色の釉がかけられている。口縁部付近でわずかであるが稜を持つ。全体の形はわからないが，天目のような器形になると思われる。

46は磁器の碗もしくは皿の体部片である。釉色は灰色がかっている。文様は２条の圏線とその中に５本の線で松のような文様が描かれている。



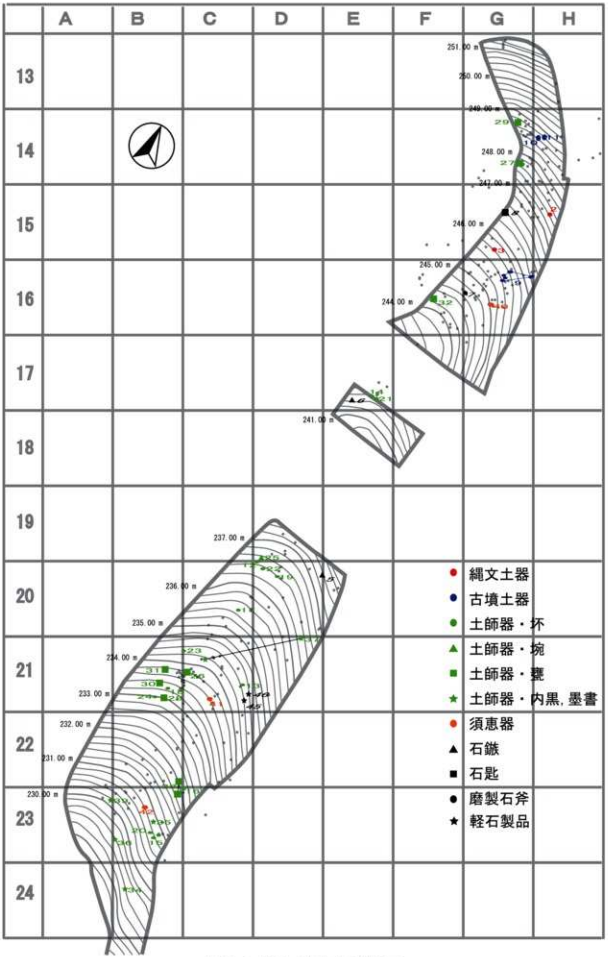
第35図　谷部　古代～近世の遺物

第４表　谷部　土器観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
33	1	G-17	b	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	-	-	-	口縁刻目突帯 条痕　ナデ	条痕　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						金雲母		16丁一括
	2	H-15	a	縄文土器（晩期）	-	底部	-	-	-	条痕	ナデ	褐	にぶい黄橙						赤色粒 細砂		
	3	F-16	a	縄文土器（晩期）	-	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 細砂		
	4	G-17	b	縄文土器（晩期）	-	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙								16丁一括
34	9	F-16 G-16	a	古墳土器	甕	胴部～底部	-	9.0	-	指圧痕 工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	褐灰黄						赤色粒		スス付着
	10	H-14	a	古墳土器	甕	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙						赤色粒		
	11	H-14	a	古墳土器	甕	底部	-	9.6	-	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐								
35	12	D-20	b	土師器	坏	口縁部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	明橙	橙						赤色粒 細砂		
	13	D-21	b	土師器	坏	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						細砂		
	14	E-17	b	土師器	坏	口縁部	14.2	-	-	ヨコナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒 細砂		
	15	B-23	b	土師器	坏	口縁部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐	にぶい黄褐						細砂		
	16	D-21	b	土師器	坏	口縁部～底部	12.2	6.2	4.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙						赤色粒 細砂		
	17	C-20	b	土師器	坏	底部	-	6.2	-	ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒 細砂		
	18	C-21	b	土師器	坏	底部	-	7.0	-	ヘラケズリ ナデ	ナデ	橙	浅黄橙								
	19	D-20	a	土師器	坏	底部	-	6.2	-	ヨコナデ	ナデ	明褐	明褐						赤色粒 細砂		
	20	B-23	b	土師器	坏	底部	-	7.2	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 細砂		
	21	E-17	b	土師器	坏	底部	-	5.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒・細砂小石		
	22	D-20	b	土師器	坏	底部	-	3.2	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙				ややあり				
	23	C-21	b	土師器	坏	底部	-	7.6	-	ヨコナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒		
	24	C-21	b	土師器	坏	底部	-	8.8	-	ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒 細砂		
	25	C-21	b	土師器	坏	底部	-	7.6	-	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒・細砂小石		
	26	C-21	b	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	褐	にぶい褐						赤色粒・細砂小石		
	27	G-16	a	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	にぶい橙	橙						赤色粒		
	28	B-21	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐						細砂		溝7
	29	G-14		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐						細砂		土坑34
	30	B-21	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ヨコキザミ	ナデ	褐灰	にぶい橙						細砂		土坑40
	31	B-21	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙						細砂		土坑40
	32	F-16	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙						細砂 小石		土坑41
	33	D-21	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	暗褐	灰褐						小石		
	34	B-24	b	内黒土師器	-	口縁部	-	-	-	ナデ	ミガキ	灰黄褐	黒褐						細砂		
	35	B-23	b	内黒土師器	-	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						細砂 小石		
	36	A-23	b	内黒土師器	皿	口縁部	11.8	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						細砂		
	37	C-21 D-21	a	内黒土師器	-	胴部	-	-	-	ヨコナデ	ミガキ	橙	褐灰								
	38	斜面中段	b	高台付土師器	坏	胴部	-	4.5	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						赤色粒 細砂		
	39	A-23	b	内黒土師器・黒書土器	-	胴部	-	-	-	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐						細砂		
	40	G-16	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	自然釉	タタキ痕	にぶい褐	灰						細砂		
	41	B-22	b	須恵器	皿	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	緑灰	緑灰				密				溝7
	42	B-22	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	タタキ痕	タタキ痕	灰	灰						細砂		
	45	中上段	表採	陶器	坏	口縁部	12.4	-	-	ヨコナデ	ナデ	黒褐	黒褐				密				
	46	中上段	表採	磁器	皿	胴部	-	-	-	施釉	施釉 草花文	灰	灰								

第５表　谷部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
33	5	石鏃	E-20	b	頁岩	2.3	2.1	0.3	1.15	
	6	石鏃	E-17	b	チャート	2.4	1.6	0.3	1.26	
	7	磨製石斧	F-16	a	ホルンフェルス	8.1	4.3	0.8	48.37	
	8	石匙	G-14	b	チャート	4.9	2.3	0.5	5.77	
35	43	軽石製品	D-21	b	-	14.1	6.4	5.1	120.00	
	44	軽石製品	D-21	b	-	6.5	7	3	28.40	



第36図　谷部　遺物出土状況図

第Ⅳ章　北部の調査

第１節　調査の概要（第37図）

北部の調査は，平成18年５～９月に調査を行った。

北部調査区は本遺跡北部に位置し，主体となる台地に当たる部分である。海抜高は約270mの台地であるが，東側，西側とも大きく開析され，高低差約40mの谷に挟まれた尾根状になっている。中央部調査区とは野首状につながっており，高低差約５m程の小高い台地となっている。調査区の面積は3,320㎡で，南北約120m，東西約70mのゆがんだ菱形を呈している。

平成13年度の確認調査では，市道を挟み西側に３ヶ所，東側に４ヶ所トレンチを設定し調査を行った。しかし，その後の計画変更により東側の２ヶ所（８，25Ｔ）のみが工事対象地となり，その他のトレンチ部分は工事対象地から除外された。

確認調査では，縄文時代早期，晩期の遺物包含層の存在が確認されているので，北部調査区の現市道部分を挟んで西側，東側に分けて本調査を行った。現市道は大きく掘削して作られており，部分的に包含層が残っている状態であるが，遺構の広がりなどを考慮しながら調査を進めた。

北部西側は，市道に沿って約70m，最大幅約20mほどの細長い調査区となった。上段は削平を受け表土下が　～　層であったが，下段側は谷部方向へ向かっての斜面となっており，遺物包含層が良好に残されていた。斜面の　層直下より畝状遺構を検出した。平成13年度の確認調査で検出した畝状遺構とはやや離れているが，形状や埋土など同じ特徴を持ったものであった。その他にも，古道や溝状遺構，土坑，縄文時代早期の集石などが発見された。

北部東側では，表土下よりほぼ全域に　～　層が混在した埋土を持つ畝状遺構が検出された。また，市道に沿うような位置で数条の古道が見つかり，溝状遺構，土坑，縄文時代早期の集石なども発見された。

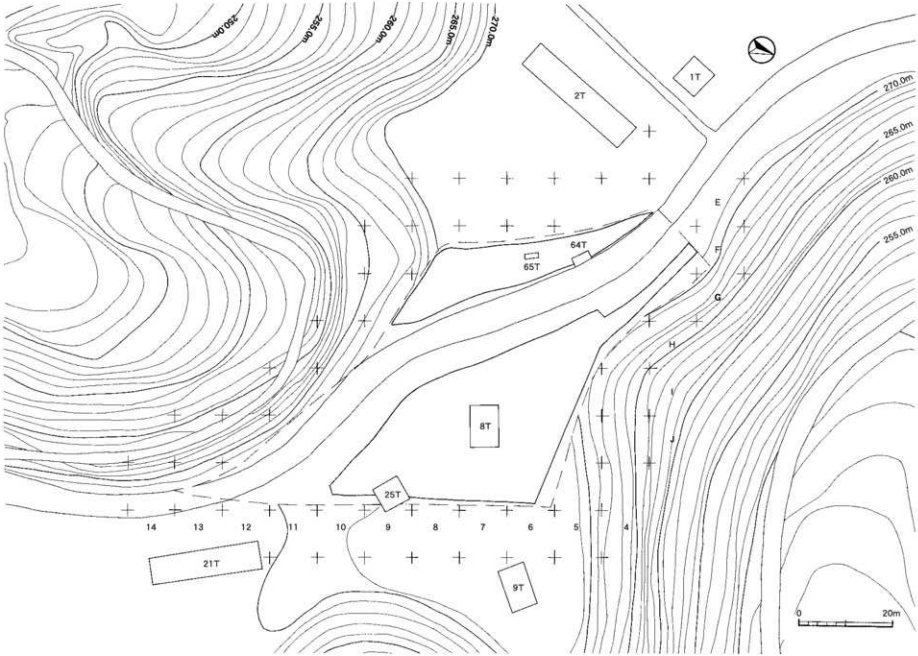
出土遺物は，　，　層がほとんど削平されているため，中世～近世の遺物は見られなかった。縄文時代早期の包含層から前平式土器や石坂式土器などの土器や石鏃，スクレイパーなどの石器が多数出土した。また，縄文時代前期，後期の土器，縄文時代晩期の石器も出土したが，数量的には多くない。古代については，削平の影響を受けていると考えられ，東側調査区よりわずかに出土した。

第２節　北部の層位（第38，39図）

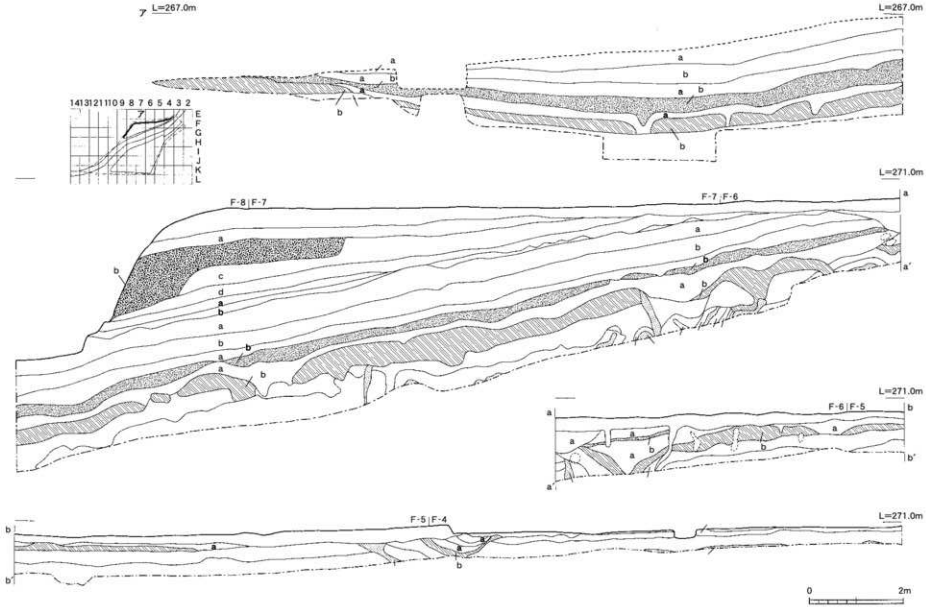
市道を挟んで西側では，上段側は圃場整備により大きく削平され，表土下より　～　層が露出している状態である。谷部へ向けての斜面となっている下段側は，地形の特性から大量の土砂が長年に渡り流れ込み，谷を埋めていったと考えられ，表土（現耕作面）の下から　層までは自然堆積土と流入土が混在して何層にも重なり合い，谷方向へ向かうほど層は厚くなっているが，土砂が滞留する場所に緩斜面が形成されている。なお，厚い表土下の　層以下は良好に残存している。

東側では表土下がほぼ　層であり，緩やかに下る台地の縁辺部に　，　層がわずかに残っている。

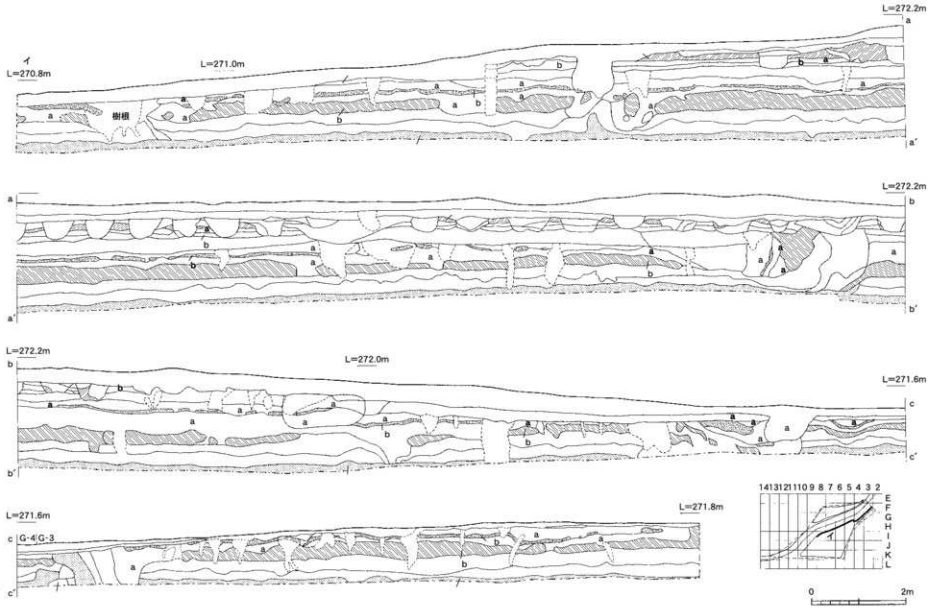
層以下については下層確認の結果，樹痕による撹乱が多少見られるが良好に残されており，表土下約1.5～２mが　層上面にあたる。



第37図　北部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第38図　北部　土層断面図(1)



第39図　北部　土層断面図(2)

第３節　検出遺構（第40～57図）

北部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の遺構は，集石が４基，土坑48基検出された。土坑は埋土に御池火山灰を含むものを，縄文時代後～晩期のものと判断した。

古代～中世の遺構は，　層上面で古道が10条，溝状遺構が６条，土坑が25基検出された。大部分が県道より東側の調査区より検出された。

中世～近世の遺構は，　層より畝状遺構２群，土坑39基が検出された。東側の畝状遺構は，掘り込みの方向が異なる部分も含まれるが，埋土や形状などの特徴が同じであることから同じ一群として取り扱った。

１　縄文時代（第40～44図）

縄文時代の遺構は，　層上面より集石が４基，　～　層上面より土坑28基検出された。集石は縄文時代早期のものであるが，　層直下のものと，　層のものに分かれることから時代差がある。

⑴　集石遺構（第40～42，44図）

狩俣遺跡全体から検出された集石遺構は，確認調査のものも含めて25基である。北部の４基を除いて，ほとんどが中央部調査区からの検出であり，縄文時代早期の遺物出土分布とほぼ同じである。台地部の未調査部分も多く，谷部，南部調査区では，急傾斜のため縄文時代の調査ができなかったことを考えると，狩俣遺跡全体の集石の総数はまだ増える可能性がある。

集石遺構は，割と狭い範囲に集中度が強いものと，比較的広い範囲に散在しているもの，どちらも兼ね備えたものとに大きく分けられる。また，下面に掘り込みを持つものと，持たないものにも分かれる。

以下，本遺跡北側から南側へ向かって記述していく。（確認調査分についてはＰ20，22参照）なお，各集石の規模，炭化物や掘り込みの有無，礫総数，石材については，第10表，重量組成については第11表に示した。

集石３号（第40，44図）

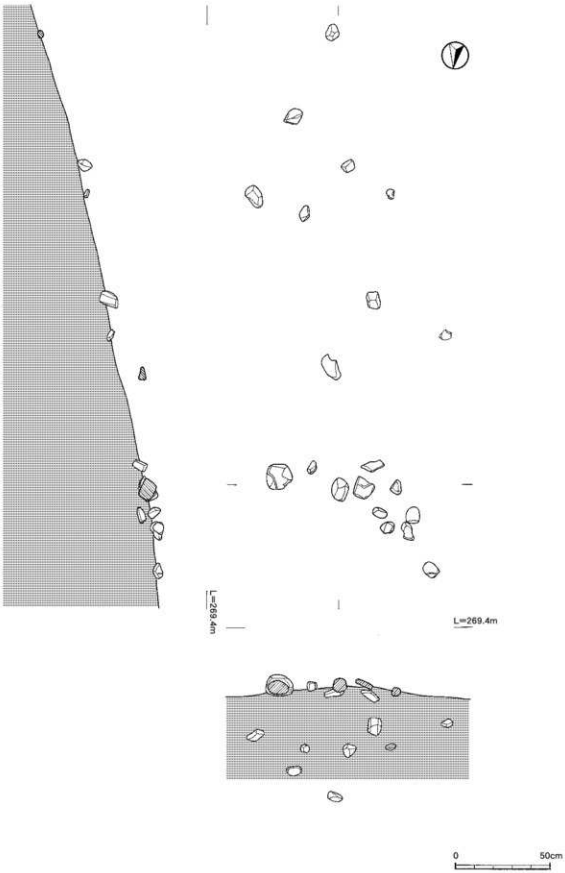
Ｆ－５区で検出された。礫総数は24個と少ないが，３　１ｍ程の範囲内に礫の分布が限定できることから集石と認定した。なお，若干集中傾向を見せる部分と，散在した部分で構成される。集中部分の礫は，径15㎝前後，重さ約150ｇの火熱を受けた破砕礫で構成するが，その周辺からは炭化物や掘り込みは確認していない。

石材は大部分が安山岩である。密集部から南側の緩やかな傾斜に沿って小礫が散在していることから，廃棄された集石遺構と判断される。

集石４号（第41，44図）

Ｆ－６区，集石３号の南東約５ｍ離れた斜面上で検出された。３　１３mの範囲内に，大きさ径５～10㎝の火熱を受けた破砕礫が，斜面に沿って散在した状態で検出された。本体となるべき礫の集中は見られなかった。

３号は　層上面，　層との境目で検出され，４号は　層中からの検出であることから，集石４号が古くなると判断できる。集石４号は，西側調査区の調査対象外地域との境目付近で隣接して検出された。礫総数は14個と少ないが，西側の調査区外へ広がる可能性があり，集石本体が未調査部分



第40図　北部　縄文時代早期　集石３号

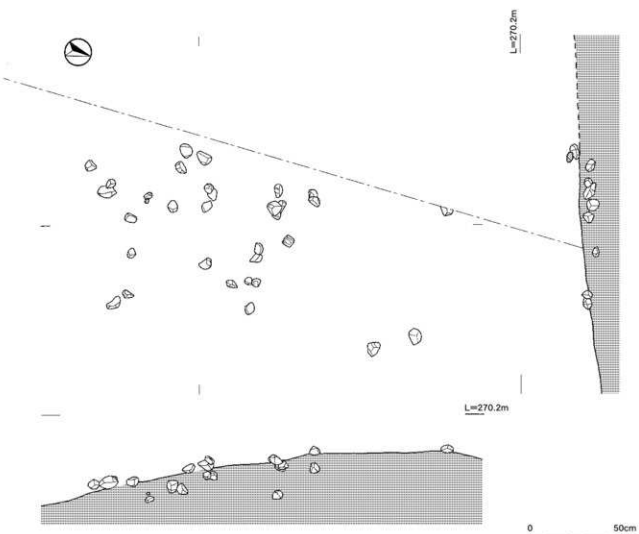
に存在することも考えられる。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石５号（第42，44図）

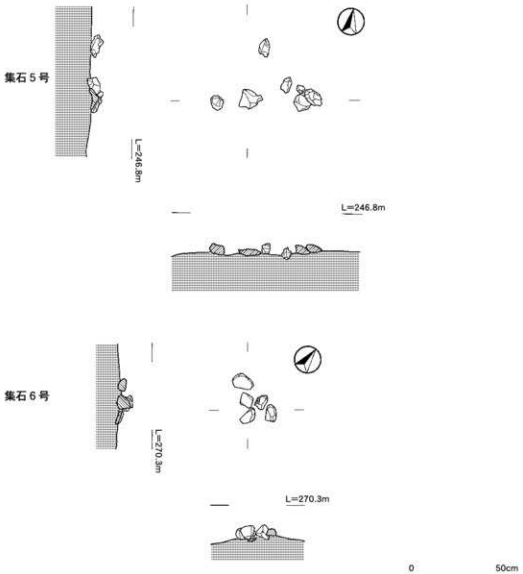
市道を挟んで東側調査区に当たるⅠ－６区で検出された。100　80㎝の範囲内に礫のまとまりが見られ，礫数は８個である。北側，南側が斜面になる尾根上の微高地で検出されている。礫数は少ないが，周辺の斜面には礫の散在が見られるため，集石の礫が多数斜面に流失したと考えられる。礫は，径５～16㎝前後，重さ50～500ｇの角礫であり，石材は大部分が安山岩である。火熱を受けたと思われる破砕はあまり見られないが，赤化が見られた。下部に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石６号（第42，44図）

Ｊ－８区，集石５号の南東約24m離れた地点で検出された。南側約３ｍ先には急斜面が迫っており，台地の縁辺部に当たる49　49㎝の範囲内に，大きさ径10㎝前後の拳大の角礫がまとまって検出された。礫数は５個と少なく，重量300ｇ程度とほぼ同程度の礫で構成されていた。石材は安山岩と花崗岩であり，火熱を受けたと思われ，部分的に破損が認められた。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。



第41図　北部　縄文時代早期　集石４号



第42図　北部　縄文時代早期　集石５，６号

⑵　土坑（第43，44図）

縄文時代の土坑は計28基検出された。全て　層での検出であるため，縄文時代後～晩期の土坑であると推定される。埋土は　層黄色パミスの少し混じる暗褐色土が主体である。

土坑48～70は平面径50㎝前後の円形（　類），土坑71は平面径約１ｍの円形（　類），土坑72～74は平面形が楕円形（　類）を呈するものであり，土坑75は不定形（　類）である。

土坑48～70は　類の土坑であり，平面径の平均は28 5　24 0㎝であり，ほぼ円形を呈する。土坑48～59は　類の中でも浅めのもので，深さ14～39㎝である。断面形状はＵ字型またはボウル状を呈するものが大部分を占める。土坑60～70は　類の中でもやや深めのもので，深さ29～57㎝である。断面形状は長方形またはＵ字型を呈するものが多い。埋土中に御池カルデラを起源とする黄色パミスが混在しており，内壁の崩落と思われる赤褐色土の小ブロックも見られる。

土坑72〜74は　類で，平面形の長径　短径の平均は93.6　39.6㎝，深さ17〜19㎝であり断面形状は皿状を呈する。土坑74の埋土中に黄色パミスのブロックや炭化物が確認された。

土坑48（第43図）

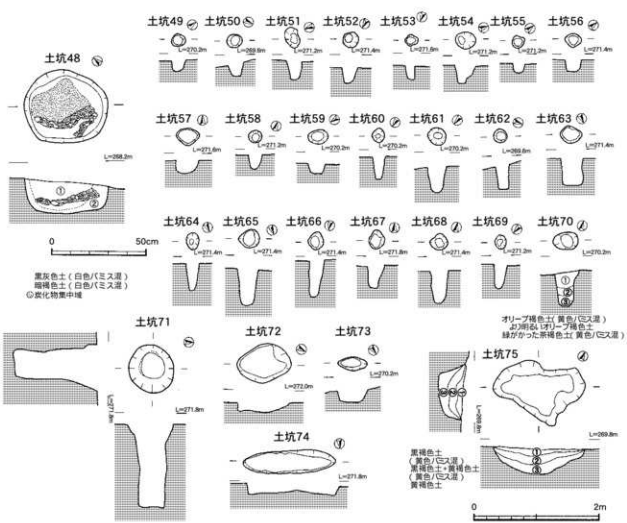
G－8区の　層で検出された。検出された平面径は45　38㎝，深さは39㎝である。断面形状はかまぼこ型を呈する。平坦面を持つ底部付近から炭化木が出土した。残存状況が良く，33　17㎝，厚さ5㎝のしっかりとした木片である。埋土は黄色パミスの混ざった暗褐色土が主体であるが，中心部は粘質の強い炭化物の集中した黒灰色土が堆積していた。樹種は不明であるが，放射性炭素年代測定の結果は2,900　30という測定結果を得ている。

土坑71（第43図）

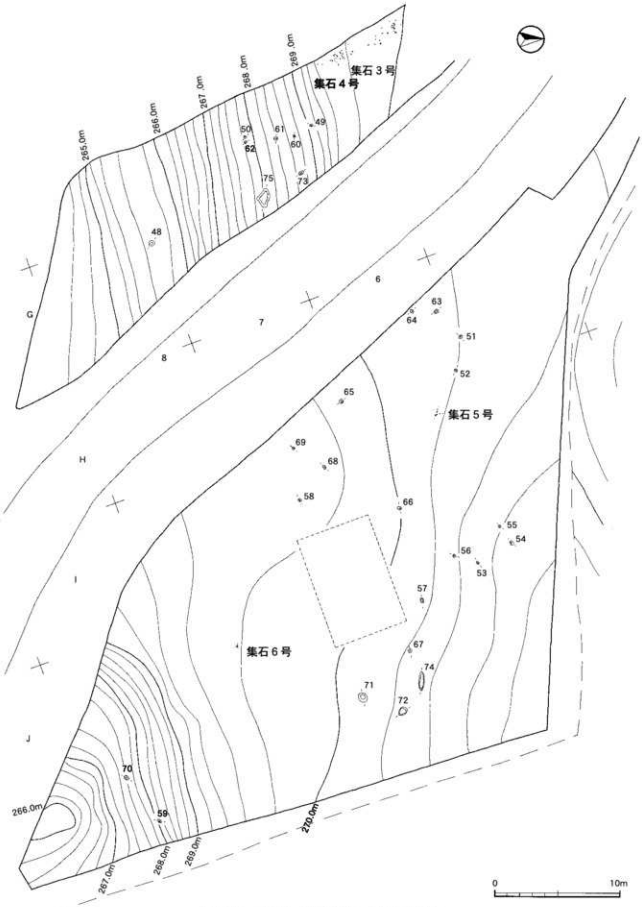
J－8区の　層で検出された。検出された平面径は76　72㎝，深さは1.3mである。断面形状は検出面近くがやや広がる長方形を呈する。周辺に同形状の土坑は見られない。

土坑75（第43図）

F－7，8区，台地の縁辺部の　層で検出された。平面径は不定形であり，深さは39㎝である。断面形状はレンズ状を呈し，下位はパミスを含む黄褐色土が強く，上位は黒褐色土が中心である。



第43図　北部　縄文時代　土坑



第44図　北部　縄文時代　遺構配置図

２　古代～中世（第45～49，56図）

古代～中世の遺構は，　層上面で古道が８条，溝状遺構が２条，土坑18基が検出された。埋土は　ａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく中世の可能性を残すことから，古代～中世の遺構として取り扱った。北部の西調査区では，斜面の一部を削りながら平坦地を確保して整備していた。東調査区では，現市道に沿って古道や溝状遺構が数条検出された。古代から人の往来する通路は，ほぼ同じで変わらないことが判明した。

⑴　古道（第45～48，56図）

古代～中世の古道を８条検出している。

古道１（第45図）

Ｇ－７，８区で，　層上面で検出された。ほぼ東西方向に向かって直線的に延び，斜面を斜め方向に上がっていくように硬化面が残存していた。検出された硬化面の長さは4.4ｍ，幅46～68㎝で，暗茶褐色土に黒色土が混在している。表面は硬く締まっているが，下位は砂質が強い。東側方向へは延びているが，市道により切られているため全体像は不明である。

古道２（第45図）

Ｆ－６，７区の　層上面，古道１から西に約９ｍ離れた位置で，ほぼ東西方向に向かって緩く蛇行をしながら硬化面が検出された。東端は消失しているが，西側方向は調査区外へ延びている。検出された硬化面の長さは5.1ｍ，幅38～60㎝で，暗茶褐色土に黒色土が混在し，表面は硬く締まっているが，下位は砂質が強い。古道１と同様に，斜面を斜め方向に上がっていくように硬化面が残存しており，特徴が類似する。また，方向も延長線方向にあり同じ古道の可能性も考えられるが，途中が消失しているので全体像は不明である。

古道３（第46図）

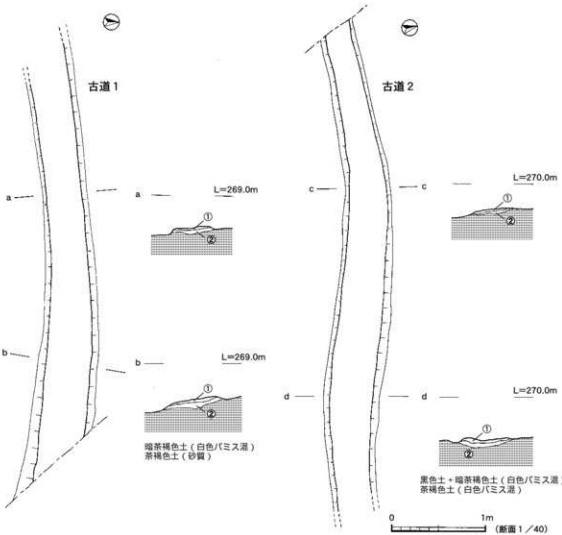
Ｉ，Ｊ－８，９区で，　層上面で検出された。やや緩やかに孤を描きながら延び，Ｉ－８区からＪ－９区方向へ斜面を下るように硬化面が残存していた。西端は溝状遺構12に切られており，東端は調査区外へと延びている。検出された硬化面の長さは5.2ｍ，幅45㎝程度で，黒褐色土が硬く締まっており，表面に黒色土が残っていた。

古道４（第46図）

Ｉ，Ｊ－８，９区，古道３から北側へ約４ｍ離れて，ほぼ同一方向に向かって硬化面が検出された。やや緩やかに孤を描きながら延び，Ｊ－10区方向へ下るように続いている。古道３と同じように，西端は溝状遺構12に切られており，東端は調査区外へと延びている。検出された硬化面の長さ14.4ｍ，幅30～60㎝である。硬化面除去後に底面から浅い皿状の凹みが連続して見られた。この小ピットは，平面径約44㎝，深さ約４㎝のほぼ円形を呈し，鉄分の沈着により赤褐色に変色した土が硬く締まっていた。

古道５（第46図）

Ｉ，Ｊ－９区で，古道３，４とほぼ同じ方向であるが，少し東側に向かって硬化面が検出された。東端はＫ－９区方向へ直線的に下りながら消失している。西端は古道３，４と同じように溝状遺構12に切られているが，古道４の下位に重なり合っていることから古道４よりも古い。検出された硬化面の長さは11.8ｍ，幅22～45㎝である。古道３～５は検出面がほぼ同じであり，方向も同じで重



第45図　北部　古代～中世　古道1，2

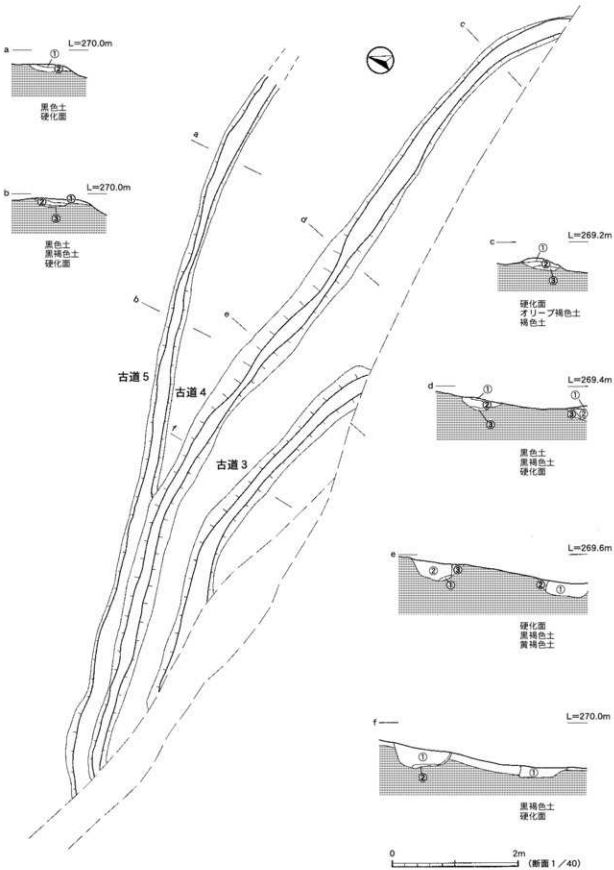
なり合うように見つかっていることから，時間差の少ない同時期の古道と思われる。

古道6（第47図）

Ｊ，Ｋ－９，10区で，古道４を延長するように検出された。Ｋ－１区方向へ直線的に延び，東端は消失している。検出された硬化面の長さは7.8m，幅44㎝程度で，黒褐色土が硬く締まっており，表面に細粒な黒色土や赤褐色の土が僅かに残る。西端は重なり合っており，古道４より古い古道であるが方向や特徴が似ており，台地上を直進する方向と谷へ向かって下っていく方向の分かれ道として一定期間使われていた可能性がある。

古道７（第47図）

Ｋ－10区，古道６から北側へ約４ｍ離れて，ほぼ同一方向に向かって硬化面が検出された。直線的な硬化面が，Ｌ－11区方向へ続いている。古道８と交差しており，古道８により一部切られている。両端とも消失しており，全体像は不明であるが，古道６と同じように黒褐色土が硬く締まっており，方向も同じであるので，あまり時間差のない同時期の古道であると思われる。検出された硬



第46図　北部　古代～中世　古道3，4，5

化面の長さは3.5m，幅は約44㎝である。

古道８（第47図）

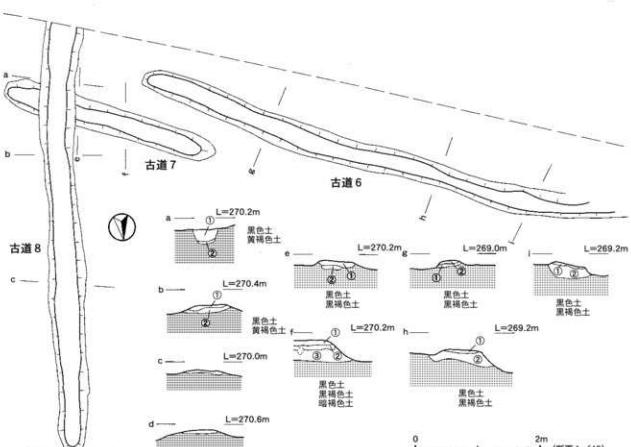
Ｋ－９，10区で，斜面を垂直に下るようにほぼ南北方向に検出された。北側は明確でないが，南側は調査区外へと延びている。これまでの古道３～７までが谷への斜面を廻るように緩やかに下っているのに対して，古道８はまっすぐに下っている。北端と南側のレベル差は，約40㎝である。検出された硬化面の長さは6.8m，幅は約52㎝であり非常に硬く締まっている。暗褐色土と黒色土が混ざる表面には，砂質のある黒色土が残っていた。古道７と交差しており，一部切っていることから，古道７よりも新しい古道であると位置づけられる。

⑵　溝状遺構（第48，56図）

古代～中世の溝状遺構を３条検出している。

溝状遺構８（第48図）

Ｉ－５，６区で略東西方向に検出された。埋土は暗黄色土が主体であり，黒褐色土や黄色パミスも見られた。検出された長さは14m，幅は54～120㎝，深さ約27㎝であり，やや蛇行しながら南西方向から北東方向へ緩やかに傾斜しながら延びている。北東側は途中で消失しているため全体像が明確ではないが，北側の谷へ向かって続いていたと推定される。断面形態は，南西側が浅い皿状，北東側がボウル状を呈し，底面付近に炭化物が見られた。底面に平坦面を持つが，凸凹が多く見ら



第47図　北部　古代～中世　古道６，７，８

れる。凹みに黄色パミスが堆積している部分も確認された。

埋土より土師器片が出土し図化した。（第65図144）

溝状遺構９（第48図）

Ⅰ－５，６区，溝状遺構８に重なるように検出された。埋土は黒褐色土が主体であり，暗黄褐色土や炭化物も含んでいた。両端は消失しており全体形は不明であるが，方向は略南北方向であり，北側の谷へ向かって流れていたと推測される。溝の切り合い関係により，溝状遺構８より新しいものである。検出された長さは２ｍ，幅は30～50㎝，深さ約28㎝であり，断面形状はレンズ状を呈している。

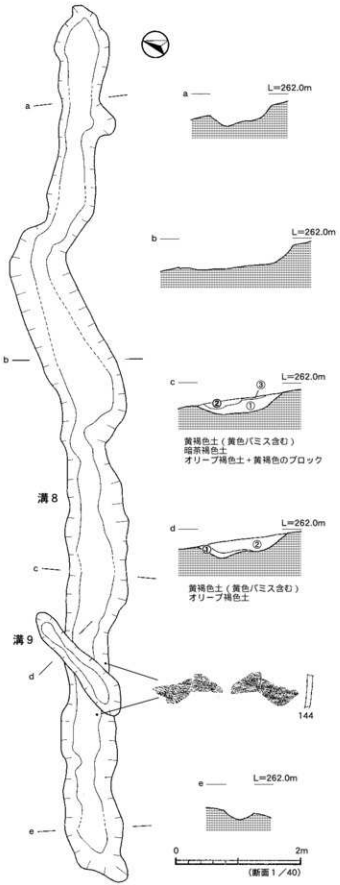
溝状遺構10（第51図）

Ⅰ，Ｊ－８，９区で北西－南東方向に検出され，北西側の台地上から南西側の斜面へ向かって，緩やかにカーブを描きながら谷へと向かって延びていた。埋土は黒色土が主体であり，わずかに黄褐色土や黄色パミスが混在していた。検出された長さは13ｍ，幅は26～42㎝，深さ約４㎝であり，断面形状はレンズ状を呈し，底面に平坦面や硬化面などは確認されず凸凹が多い。埋土中より遺物は出土しなかった。

⑶　土坑（第49，56図）

古代～中世の土坑は，計18基が検出された。すべて　層での検出であり，埋土は　ａ層の黒色土の単一層に黄色土の小ブロックがわずかに混じるものが多い。土坑76～89は平面径30㎝前後の円形（　類）を呈するもので，深さが浅いものと深いものに分けられる。土坑90～93は，平面形が楕円形（　類）を呈するものである。集中は見られないが，市道を挟んで西側調査区での検出が多い。

土坑76～89は　類の土坑であり，平面径の平均は28　24 5㎝で，ほぼ円形を呈する。



第48図　北部　古代～中世　溝状遺構８，９

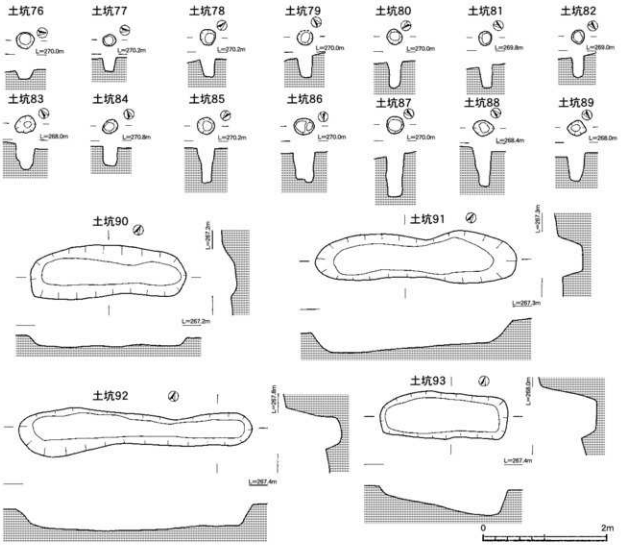
類の中でも土坑76～84は浅めのものであり，深さ14～42㎝，土坑85～89はやや深めのもので深さ42～58㎝である。土坑76の断面形状は逆台形を呈すが，その他はU字型を呈するものが大部分を占める。土坑83，85は途中に段を持つ。

土坑90～93（第49図）

F，G－8区の　層で近接して検出された。いずれも楕円形を呈した土坑であり，埋土は，掘り込まれた際に混入したと思われる黄褐色土の小ブロックがわずかに見られるが，ほぼ黒色土の単一層である。

土坑90の平面径は245　79㎝，深さは16㎝，土坑91の平面径は319　65㎝，深さは33㎝で，どちらも断面形状は皿状を呈し，古道10の下位から検出されている。

土坑92，93は段差に沿うように配置されている。土坑92の平面径は371　48㎝，深さは37㎝で，断面形状は深皿状を呈すが底面は地形に合わせて東側が下がっている。土坑93の平面径は203　70㎝，深さは41㎝で，断面形状は皿状を呈す。どちらも段差を延長するように掘られているため斜面の縁辺部から底面までの深さは約80㎝である。溝状遺構11，古道10の下位から検出されている。遺構の前後関係，埋土状況などから，古代の貯蔵穴であると判断した。



第49図　北部　古代～中世　土坑

3　中世～近世（第50～57図）

中世～近世の遺構は，　～　層上面で古道が２条，溝状遺構が３条，土坑33基が検出された。埋土は安永ボラや文明ボラを含む黒色土が主体であるが，遺構内遺物が少なく明確にできないものも含まれることから，中世～近世の遺構として取り扱った。

北部の西調査区では，斜面の一部を削りながら谷底へ向けての道を整備していた。東調査区では，現市道に沿って，古代の溝状遺構に平行した中世の溝状遺構が並んで検出された。この溝状遺構は古道としても使われ，斜面へ下るように延びていた。

⑴　古道（第50，57図）

中世～近世の古道は，西側調査区にて２条検出している。

古道９（第50図）

Ｆ，Ｇ－８区で，南側へ向かって下る斜面の一部を削平し，平坦面を造成した後の　層上面にて検出された。南西－北東方向に向かって直線的に延び，斜面を横切るようにして硬化面が残存していた。削平後のためレベル差は少なく，ほぼ平坦な古道である。検出された硬化面の長さは7.9m，幅38～70㎝で，表面は黄色ブロックの混じった黒褐色土に白色パミスが混在していた。２～４㎝の硬化面の下位には砂質の強い黒褐色土が存在していた。東端は消失し西側は調査区外へ延びる。

古道10（第50図）

Ｅ～Ｇ－８，９区，古道９北側に約１～1.5m離れ，ほぼ平行するように並んで検出された。検出された硬化面は，西側調査区境から北西へ向かって，削平によってできた段差に沿ってやや北側へ膨らみながら直線的に延びている。Ａ－８区付近で南東方向へ約50　屈曲し，南側の谷へ向かって下っていく。Ｇ－８区部分は高低差約30㎝以上の下り道となっている。検出された長さは17.6m，幅38～70㎝で古道９よりやや幅広である。表面は白色パミスや黄褐色土混じりの黒褐色土が主体であり，硬く締まっているが下位は砂質が強い。古道９との前後関係は不明であるがほぼ同時期のものと推定され，Ｆ－８区では溝状遺構11と平行しているが，Ｇ－８区に入ると上位に硬化面が位置しているので，溝状遺構11より新しい古道である。

⑵　溝状遺構（第50～52，57図）

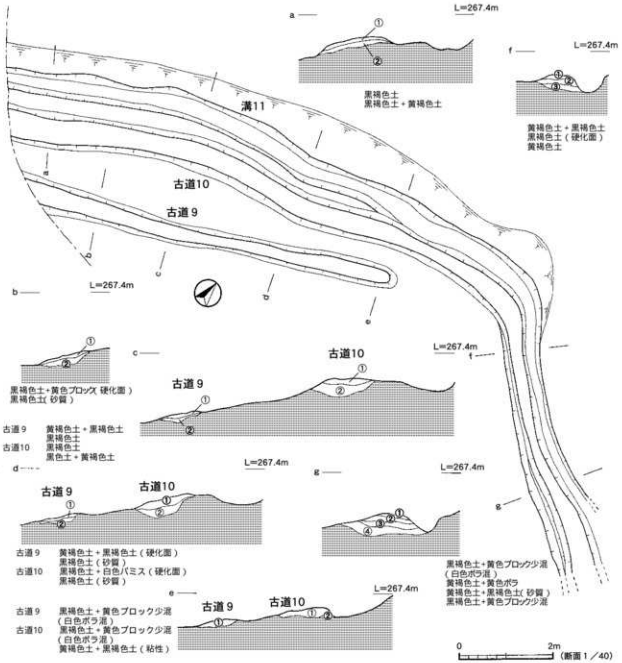
中世～近世の溝状遺構は，西側調査区で１条，東側調査区で２条の計３条検出している。

溝状遺構11（第50図）

Ｅ～Ｇ－８，９区，古道10の北側にほぼ平行するように並んで検出された。削平によってできた段差に沿って南側の谷へ向かって下っていくが，古道10と重なりが見られ，硬化面の下位を流れ下っていくように検出された。検出された長さは17.5m，幅32～70㎝で斜面部分が幅広である。深さと断面形状は，直線部分が約16㎝の浅い皿状を呈し，斜面部分が約38㎝の逆台形である。埋土は黄色土ブロック混じりの砂質の強い黒色土で，埋土中より遺物は確認されなかった。Ｆ，Ｇ－８区で検出された古代の土坑90～93の上位に掘られており，斜面の削平によって作られた平坦面は，当初は畠作目的であったと思われるが，その後道路としての役割が大きくなったと推測される。

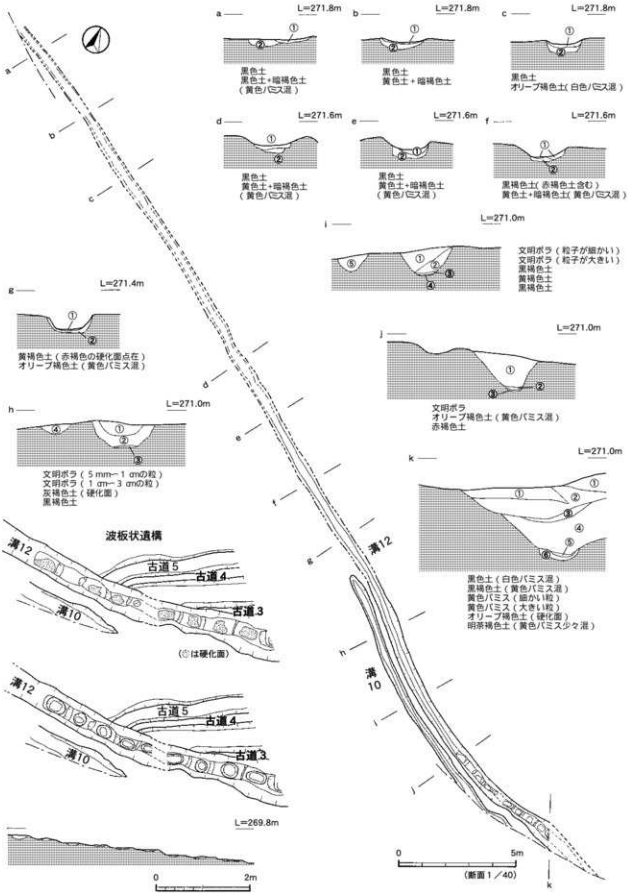
溝状遺構12（第51図）

Ｇ～Ｊ－５～９区，溝状遺構10の東側にほぼ平行するように並んで検出された。Ｇ～Ｉ－５～７区付近は，北西から南東方向へ緩やかに下りながらほぼ直線的に延びており，Ｊ－８，９区付近か



第50図　北部　古代～近世　古道9，10　溝状遺構11

らは溝状遺構10と同じように，曲りながら急斜面の谷へと下っていくように検出された。検出された長さは43m，幅40㎝～１ｍで斜面へ向かって幅広になる。埋土のほとんどは黄色パミス（文明ボラ）が主体であり，黒色土も部分的に混じっているが，大量のボラによって埋め尽くされていた。表面には粒子の細かい黄色パミスと黒色土が確認されたが，埋土中はボラの粒子が細かい部分と大きい部分が混在し，黒色土も混じり方にムラがあることから，流れ込んだ後に激しく動いていると思われる。その後の削平や畝状遺構４により切られた部分も多く，東端から約20mは上位が削平され，畝状遺構４の畝間部分によって底面下まで切られ消失していた。わずかに文明ボラを埋土とする溝の底面付近が残されていた。そこから約10mは，上位は切られている部分が多いが，底面付近は全て残されていた。深さと断面形状は，台地上の直線部分は検出面からの深さが約24㎝の浅い皿状を呈し，斜面部分が約98㎝の逆台形である。斜面を下るに従って深くなる傾向にある。



第51図　北部　古代～近世　溝状遺構10，12

古道としても使われていたと思われ，埋土下面の平坦部に硬化面を確認した。特に斜面部では硬化面が階段状に検出され，段ごとに赤褐色をした波板状の凹みがあり，谷へ下る通路として利用されていたと推測される。波板状の凹みは34　26㎝の円形を呈し，深さ約５㎝の浅いレンズ状である。

溝状遺構13（第52図）

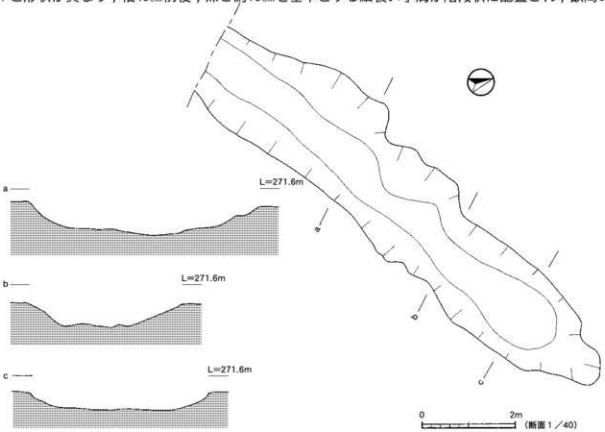
Ｈ，Ｉ－６区で，略東西方向に溝状遺構12や畝状遺構４の一部を切るように検出された。市道側からほぼ直線状にＪ－６区方向へ延びている。検出された長さは10.4m，幅1.6～2.3mで，狩俣遺跡では最も広い溝状遺構である。深さは約25㎝と幅の割に深さは無く，薄いレンズ状を呈している。埋土は白色パミスを多く含む黒褐色土で，底面付近には，造成の際生じたと思われる黄色土の小ブロックが混じり，一部にマンガンの鉄分の沈着による赤褐色の変色が見られた。中世の包含層がやや下り始めるＪ－６区より東側では検出されなかったことから，近世以降のものと推測される。

⑶　畝状遺構（第53，54，57図）

中世～近世の畝状遺構は，西側調査区で１群，東側調査区で１群の計２群検出している。

畝状遺構３（第53図）

Ｆ，Ｇ－６～８区の　ａ層上面にて，畝状遺構が検出された。北部の市道を挟んで西側に当たる斜面において，北東－南西方向を基調とした畝間の列が，黒色土または暗褐色土を掘り込む形で残存し，斜面を下る階段状に規則的に並ぶ。掘り込み面は自然地形を一部削平しながら作った平坦面であり，上面には　層混じりの黒褐色土が覆い，明確な　層は確認されなかった。畝については凸部が見あたらず，上位からの堆積物に押し流されたと思われ確認されなかった。西側の尾根をひとつ越えたＡ，Ｂ－５，６区の斜面において畝状遺構１の存在が確認されているが，畝間は畝状遺構１と形状が異なり，幅40㎝前後，深さ約10㎝を基本とする細長い小溝が階段状に配置され，畝間の

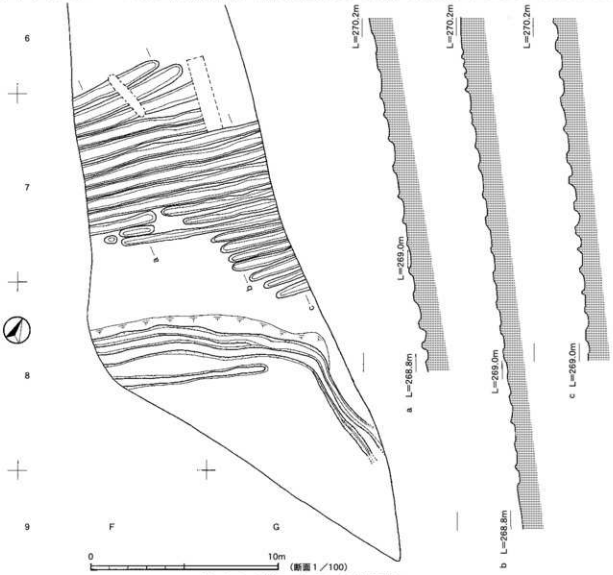


第52図　北部　中世～近世　溝状遺構13

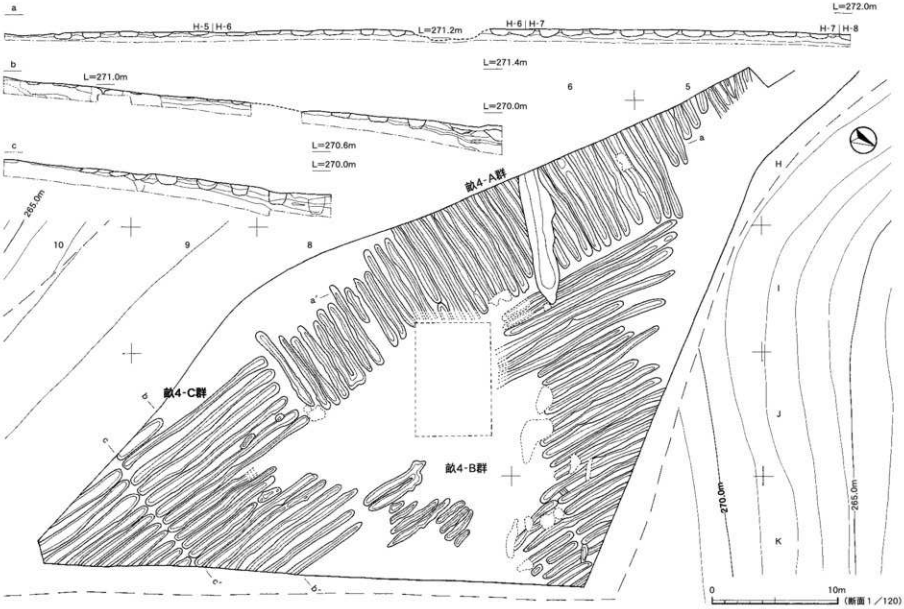
端は南北方向に残る消失部分にのみ見られ，それ意外には確認されなかった。埋土はやや粘質のある黒色土が主体であり，文明ボラが全体的に混在している。断面は底面に凸凹を持つ皿型のものが多い。畝状遺構１，２とは時期が異なり，大規模なボラ抜後に作られたものと推定される。

畝状遺構４（第54図）

Ｇ〜Ｋ－５〜10区の　〜　層上面，北部の市道を挟んで東側で畝状遺構が検出された。　層堆積後にある程度の平坦面を造成して作られ，その後の削平により検出面は削平部分では　〜　層上面，盛り土部分では　層上面と安定しない。それに伴い，埋土も黒色土が主体であるが，暗褐色土や黄色土が部分的に混在し，文明ボラの混入割合も大きく異なる。Ｄ，Ｅ－７，８区は，現代の畑地造成のため削平され消失しているが，それ以前は存在していたと思われる。畝間の規模は幅40㎝前後，深さ約25㎝の断面形状がＵ字型を基本とし，底面に凸凹が多い。畝間の配列方向に違いが見られ概ね３群に分かれるが，区割り溝や畦などは確認されなかった。４－Ａ群は，略南北方向の畝間列が台地から東側へ緩やかに下るように並び，北端の掘り込みは略東西方向に揃っている。４－Ｂ群は，略東西方向の畝間列が北側へ緩やかに下るように並んでいるが，削平による消失部分が多く全体像は不明である。４－Ｃ群は，略東西方向の畝間列が台地から南側へ緩やかに下るように並んでいる。



第53図　北部　中世　畝状遺構３



第54図　北部　中世　畝状遺構４

西端，東端ともに残存状況が良好で，全長9 8mを基本とする畝間が整然と並んでいる。

⑷　土坑（第55，56図）

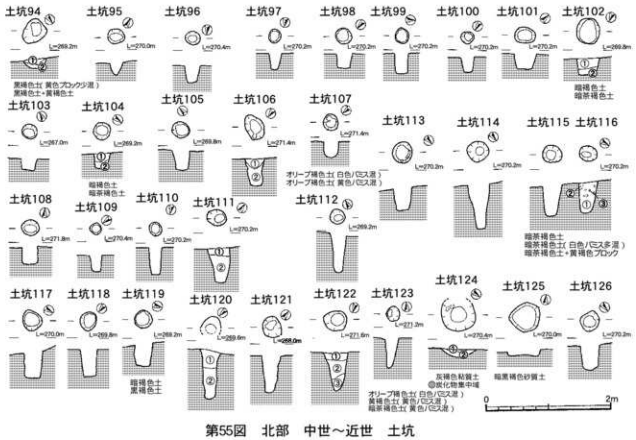
中世〜近世の土坑は，計33基が検出された。　一　層での検出であり，30㎝程度の土坑が９割以上であり，１mを越える大型のものや楕円形のものは確認されなかった。埋土は白色パミスを含む黒色土または褐色土が中心である。また，黒色土や黄褐色土などがブロック状に混在しているものも見られた。また，土坑の集中する地域は見られず，調査区全体から検出された。

土坑94〜124は　類の土坑で，平面径30㎝前後の円形を呈する。土坑94〜109は平面形の平均が29 .1　25 5㎝で，深さが17〜41㎝と比較的浅い。土坑110〜124は平面形の平均が32 .6　27 .8㎝で，深さが12〜61㎝とやや深いものである。ともに埋土は白色パミスを含む黒色土が主体であるが，下位に黄色パミス，上位に白色パミスと分かれるものも見られた。炭化物を含むものも数基確認された。断面形態は，土坑94以外はすべてＵ字型または上位が開き気味の長方形を呈する。

土坑125，126は　類の土坑であり，平面形の平均42 5　38 5㎝で，ほぼ円形を呈する。深さ10〜38㎝で，125はレンズ型，126は浅い皿型を呈する。土坑125の底面付近は砂質のある黒褐色土であり，その中心付近が粘質のある灰橙色土に変化し，炭化物も見られた。

土坑94（第55図）

Ｇ－７区の台地の縁辺部から南側の斜面へ下る，　層で検出された。平面径は45　38㎝の歪みのある円形を呈し，深さは17㎝である。断面形状はボウル型を呈し，埋土は底面付近がやや粘性を持つ暗黄褐色土，上位が黒褐色土主体に黄褐色土が部分的に混在している。全体に黄白色パミスと炭化物が少量混ざる。埋土中より種子と思われる炭化物が３点出土し，分析の結果１点は桃の種子と



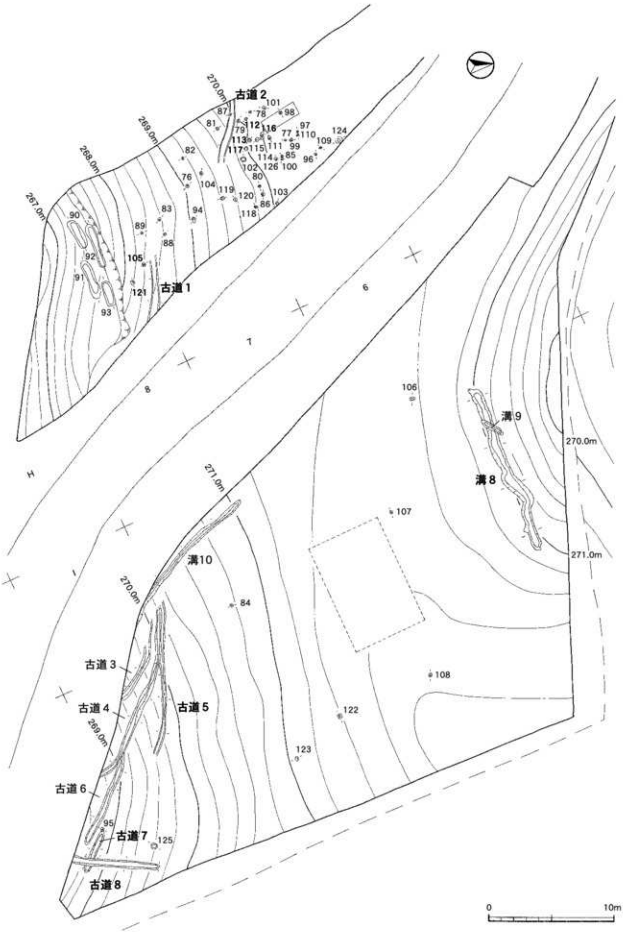
第55図　北部　中世〜近世　土坑

同定される。桃の種子は，全長約２㎝，全面に短い溝が並び片方の先端部が尖った楕円形をしている。他の２個についてもほぼ同じと思われる。

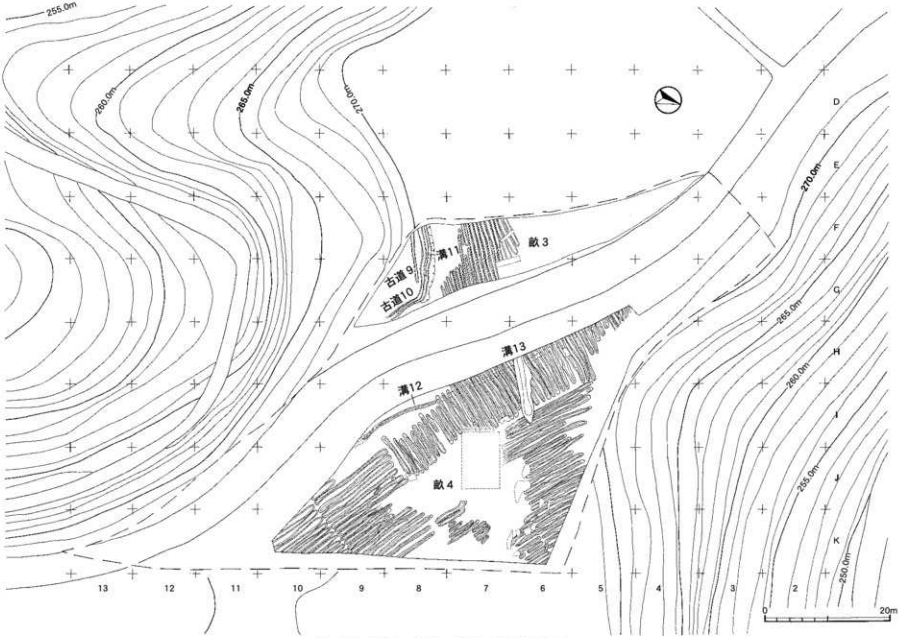
第６表　北部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
48	45	38	39
49	23	21	28
50	25	21	21
51	32	24	30
52	25	25	25
53	20	18	21
54	32	26	30
55	20	18	14
56	25	22	19
57	36	28	22
58	22	20	22
59	32	22	16
60	24	20	36
61	30	27	41
62	23	21	29
63	35	27	44
64	25	20	42
65	33	30	57
66	28	25	55
67	30	26	36
68	28	25	52
69	24	20	37
70	40	26	54
71	76	72	129
72	85	61	17
73	48	24	19
74	148	34	18
75	146	84	39
76	39	37	14
77	20	19	23
78	26	22	33
79	26	23	32
80	26	24	42
81	23	20	35
82	24	20	33
83	34	28	37
84	25	20	30
85	28	27	56
86	34	26	52
87	29	27	57

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
88	34	26	58
89	26	24	42
90	245	79	16
91	319	65	33
92	371	48	37
93	203	70	41
94	45	38	17
95	28	24	17
96	25	22	28
97	23	22	28
98	26	25	23
99	25	21	34
100	21	20	25
101	34	26	25
102	41	37	27
103	25	24	20
104	29	27	27
105	29	27	32
106	42	29	41
107	25	22	24
108	28	25	28
109	20	19	26
110	23	20	45
111	32	22	60
112	26	24	61
113	33	30	32
114	35	32	71
115	31	27	50
116	29	24	50
117	33	31	43
118	31	29	45
119	30	27	36
120	33	20	79
121	35	30	59
122	38	32	58
123	23	21	46
124	57	48	12
125	49	46	10
126	36	31	38



第56図　北部　古代～近世　遺構配置図



第57図　北部　中世～近世　遺構配置図

第４節　出土土器

北部の出土遺物点数は合計190個であり，遺跡総点数の約３％に相当する。しかも，190点中約半数は本調査区外となった平成13年度の確認トレンチからの出土である。北部調査区一帯は，近年の畑地整備事業や個人による土壌改良のための工事が行われており，上位に当たる縄文時代後～晩期の一部と古代～近世の遺物包含層は削平されていた。したがって，この地区で取り扱う遺物は，縄文時代早期が中心となる。

縄文時代早期の遺物包含層である　，　層は良好に残されている部分もあり，その部分は現位置を保った遺構・遺物が捉えられている。

１　縄文時代（第58～64図47～139，71図）

狩俣遺跡の縄文時代の土器は，早期から晩期まで，　類から　類までの17類に分類される。

この分類は全ての調査区に共通であり，　，　，　類については，同類の中でも形態の違いからさらに細分した。なお，　～Ⅻ類は縄文時代早期に該当する。

･a類	貝殻条痕文を主とする円筒土器で，口唇部が鋭角で，貝殻条痕が斜行するもの
･b類	類の中で，口唇部が平坦で，貝殻条痕が横位に施されるもの
類	貝殻条痕文の上に沈線文等を施文する二重施文土器
類	貝殻刺突文を施す円筒土器
類	横位の貝殻押引文が施文される円筒土器
類	口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕文横位・綾杉状等に施文するもの
類	貝殻刺突文を主体とするもの
類	口縁部に横位の貝殻条痕文を施すもの
類	ヘラ状工具による斜格子状の文様が施されるもの
･a類	押型文土器で，山形押型文及び楕円押型文を施すもの
･b類	口縁部から胴部中位に山形押型文，胴部中位から底部に貝殻押型文を施すもの
類	完形土器　口縁部が大きく外反するもので全体に特殊な回転施文のあるもの
Ⅺ類	外反する口縁部で，連続刺突と沈線文が施されるもの
Ⅻ類	微隆起突帯を廻らす壺型土器
類	縄文時代前期の土器で，みみず腫れ突帯を廻らし，胴部は貝殻条痕が施されるもの
類	縄文時代前期の土器で，短沈線文を主とするもの
類	縄文時代後期の土器で，胴部に貝殻復縁によると思われる連点文が施されるもの
類	縄文時代後期の土器で，胴部に沈線文を施すもの
Ａ･a類	縄文時代晩期の深鉢形土器で，刻目突帯を有しないもの
Ａ･b類	縄文時代晩期の鉢形土器で，刻目突帯を有するもの
Ｂ類	縄文時代晩期の浅鉢形土器
Ｃ･a類	縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に組織痕が認められないもの
Ｃ･b類	縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に席目状の組織痕が認められるもの
Ｃ･c類	縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に網目状の組織痕が認められるもの

(1) 縄文時代早期（第58～62図47～105）

Ⅰ類土器（第58図47，48）

47，48は　類土器で　ａ類と　ｂ類に細分される。47は　ａ類で斜位の貝殻条痕文を浅く施している。48は　ｂ類の土器で横位に施した貝殻条痕文の上に縦位の貝殻条痕文を重ねている。

Ⅱ類土器（第58図49）

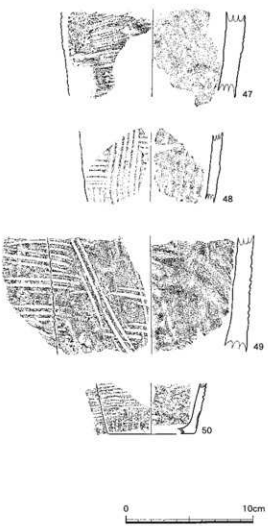
49は　類土器の胴部である。胴部に横位の貝殻条痕文を施した後斜位の貝殻条痕文を施すものである。

Ⅳ類土器（第58図50）

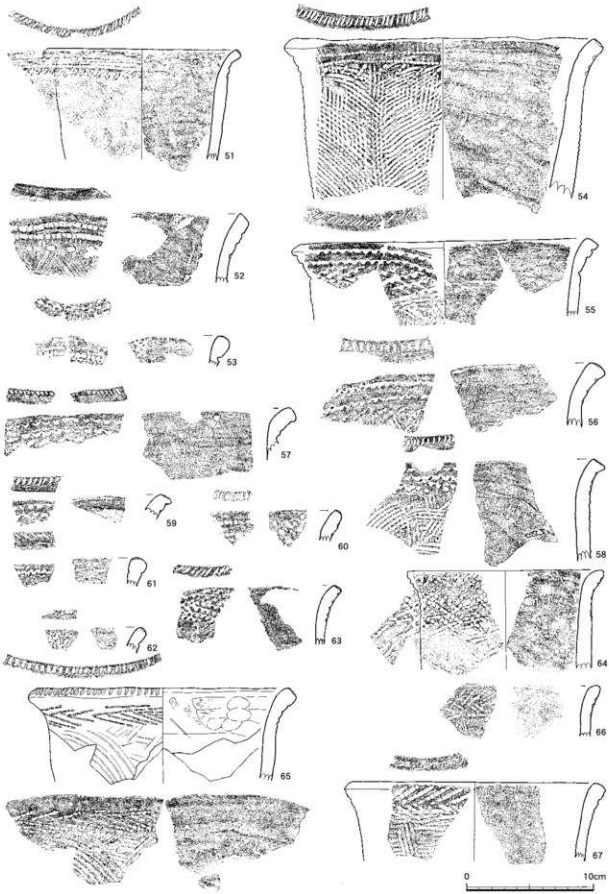
50は　類土器の底部である。胴部には貝殻腹縁による押引文を施し，下位に縦位の貝殻刺突文を施すものである。

Ⅴ類土器（第59～61図51～98）

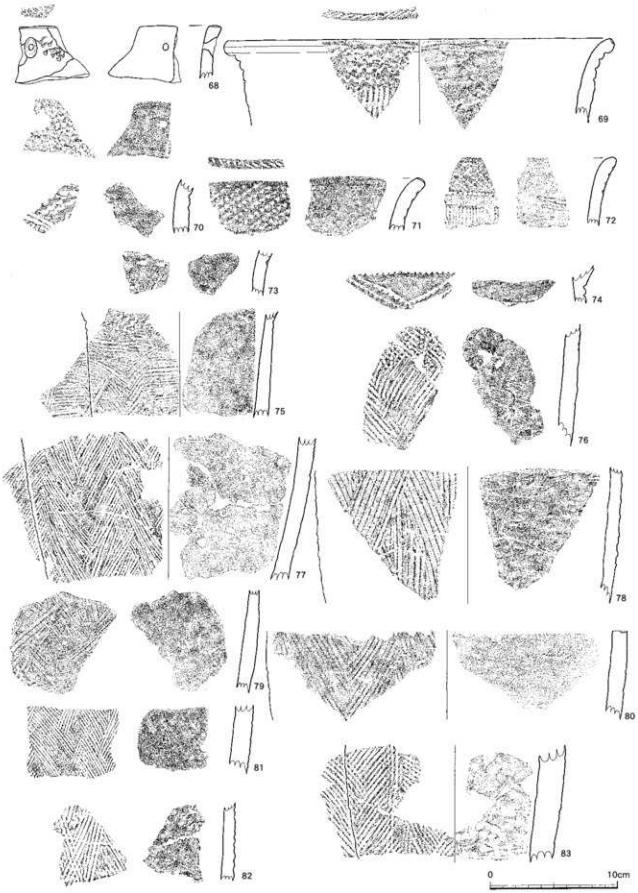
51～98は　類土器で，口縁部が外反し頸部でやや締まり胴部でわずかに膨らみつつ底部に至るタイプと，口縁部が直行し直線的な胴部を経て平底の底部に至るタイプがある。文様は貝殻条痕文であるが綾杉状に施すものが多く見られる。51～53，56～61，65は口縁部に横位の貝殻刺突文を二条施し52と56は貝殻刺突文の下に刻みが施されている。53は二条目から欠損している。51，57～61は貝殻刺突文の下に斜位の貝殻刺突文が施されている。54は横位の貝殻刺突文を一条施し，55は斜位の貝殻刺突文を施している。62～64，66，67は口縁部に斜位の貝殻刺突文を組み合わせて，くの字状或いは羽状に施している。68は口縁部に斜位の貝殻刺突文が二条施されており，補修孔が見られる。69は口縁部に横位の貝殻刺突文を四条施しており胴部に縦位の貝殻条痕文を施している。70は口縁部に浅い貝殻条痕が二条斜位に施され，その直下に貝殻刺突文が逆方向に斜位に施されている。71は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施しており，口唇部に刻みが見られる。72は口縁部に斜位の貝殻刺突文を重ねて施しており，その直下に米粒状の連点文を施している。73は口縁部に連点文が施されており，浅い貝殻条痕文が施されている。74は口縁部に横位の貝殻刺突文を施しており，その直下に斜位の貝殻刺突文を左右に施している。口唇部は欠損している。75は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し，胴部は貝殻条痕文を横位に施した上から綾杉状の貝殻条痕文を重ねて施している。76～94は胴部にあたる。76～78，81，83，87，88，92，93は綾杉状の貝殻条痕文を施している。76は貝殻条痕文の上に斜位の貝殻刺突文を左右に施している。83は



第58図　北部　縄文時代早期の土器(1)



第59図　北部　縄文時代早期の土器(2)



第60図　北部　縄文時代早期の土器(3)

上部の割れ口が磨耗している。92は綾杉状に施した貝殻条痕文の上に縦位の貝殻条痕文を施している。79は波紋状の貝殻条痕文を重ねて施している。80は縦位の貝殻条痕文を浅めに施し，その上から斜位の貝殻条痕文を浅めに施している。82は浅い条痕文を斜位に重ねるように施している。84は貝殻条痕文をランダムに重ねて施している。85は条痕文を縦位に施し，その上から斜位の条痕文を重ねて施している。86は条痕文を縦位に施し，その上から斜位の条痕文を左右に重ねて施している。89は条痕文を斜位に施している。90，91は底部に近い部分で，90は綾杉状に施した貝殻条痕文の上から横位の貝殻条痕文を底部付近に施している。91は貝殻条痕文を縦位に施しその上から斜位の貝殻条痕文を交差するように重ねて施している。84は貝殻条痕文を縦位に施し，その上から斜位の貝殻条痕文を施している。95～98は底部にあたる。93は底部付近に縦位の貝殻条痕文を施している。96は綾杉条痕文を底部付近まで施し，その上から横位の条痕文を重ねて施している。立ち上がりの部分には米粒状の刻みが見られ，底部内面は凹凸が見られる。97は胴部の立ち上がり部分に米粒状の刻みを施している。底の部分には炭化物が付着している。98は胴部に貝殻条痕文を縦横に施し，底部付近に横位の条痕文を施している。底部外面にも条痕文が見られる。

Ⅸａ類土器（第62図99，100）

99，100は　ａ類土器である。99は口縁部が外反し山形押型文を縦位に施している。内面は同じく山形押型文を横位に施している。100は胴部にあたり，文様は松の木等のような突起物を持つ枝を回転施文したものと考えられ「イチゴ」と呼ばれる押型文土器と思われる。

Ⅹ類土器（第62図101，102）

101，102は　類土器の底部である。101は山形押型文を縦位に施すもので，102は沈線文を施すものである。

Ⅻ類土器（第62図103～105）

103，104はⅫ類土器の壺形土器である。内傾する口縁部に微粒突帯を廻らすものである。105はⅫ類土器の底部である。

⑵　縄文時代前期（第62図106～116）

ⅩⅢ類土器（第62図106）

106は　類の土器の底部にあたる。底部付近に斜位の条痕文を施し，その上から横位の条痕文を重ねて施している。

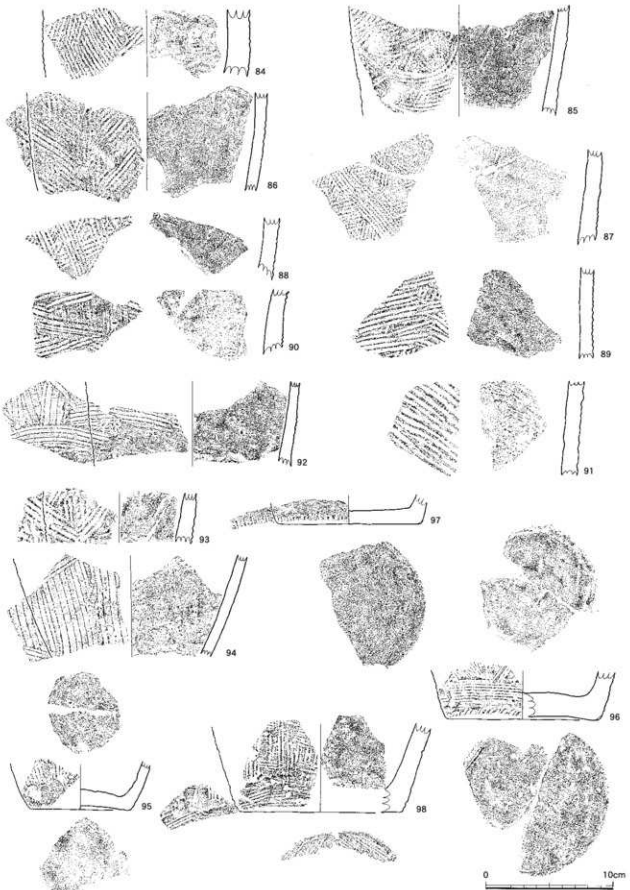
類土器（第62図107～116）

107～116は　類土器で，107～115は胴部にあたる。107は斜位の沈線文を左右に施している。108～110は沈線文を縦横に施している。111～114は沈線文を横位に施している。115は浅い斜位の沈線文を左右に施している。116は底部で浅い沈線文を横位に施している。

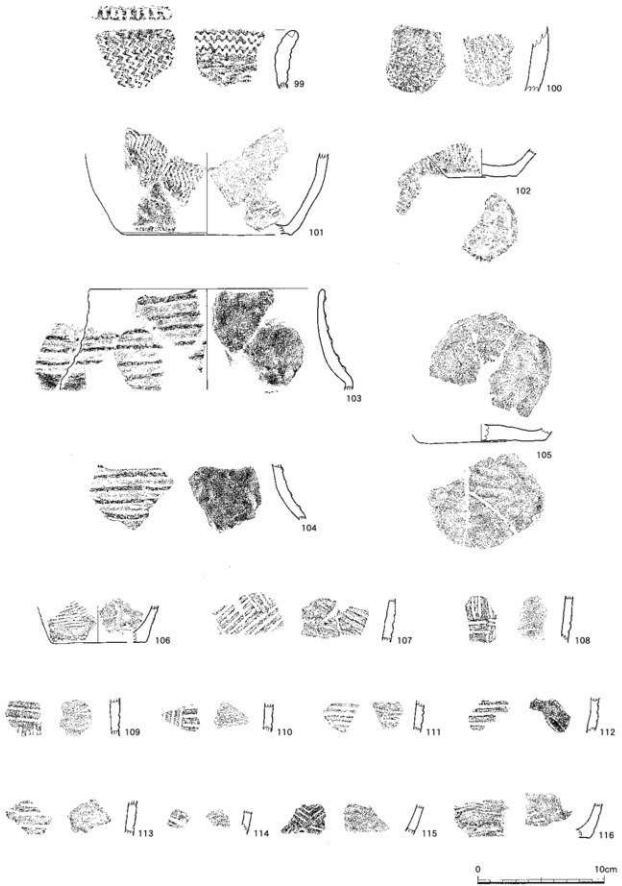
⑶　縄文時代後期（第63図117～126）

類土器（第63図117～126）

117～126は　類土器にあたる。117，118は波状の口縁部で，117は口縁部にやや太めの沈線文を二条横位に施しその下に同じ太さの沈線文をＳ字状に施している。内面の口縁部に一部突起が施されている。118は浅めの沈線文を波状に二条施している。119は口縁部に横位の沈線文を一条施し120，121は胴部で沈線文を二条施している。122は胴部から底部にあたり，外面はナデによる調整



第61図　北部　縄文時代早期の土器(4)



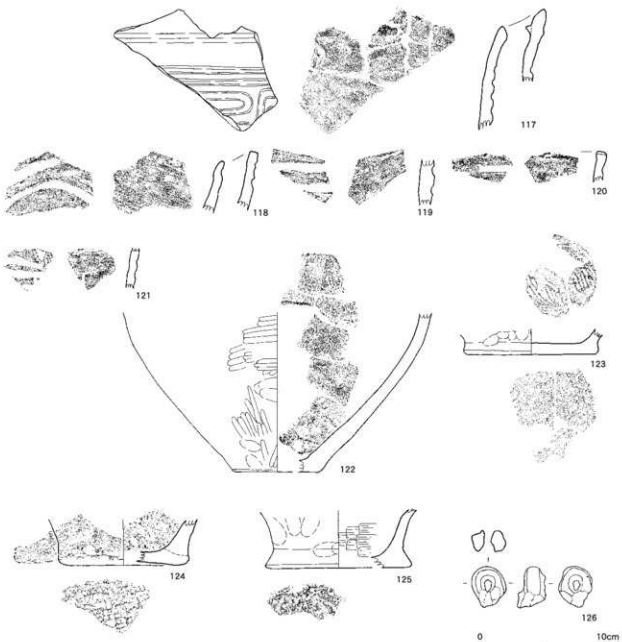
第62図　北部　縄文時代早期の土器(5)・前期の土器

を受けている。123〜125は　類土器の底部にあたる。124は網代底である。125は内底面に貝殻条痕が残る。126は口縁部上端に施される装飾と思われる。円形で中心に穿孔が穿たれており，欠損部分が見られる。

⑷　縄文時代晩期（第64図127〜139）

Ⅺ類Ａ土器（第64図127〜129）

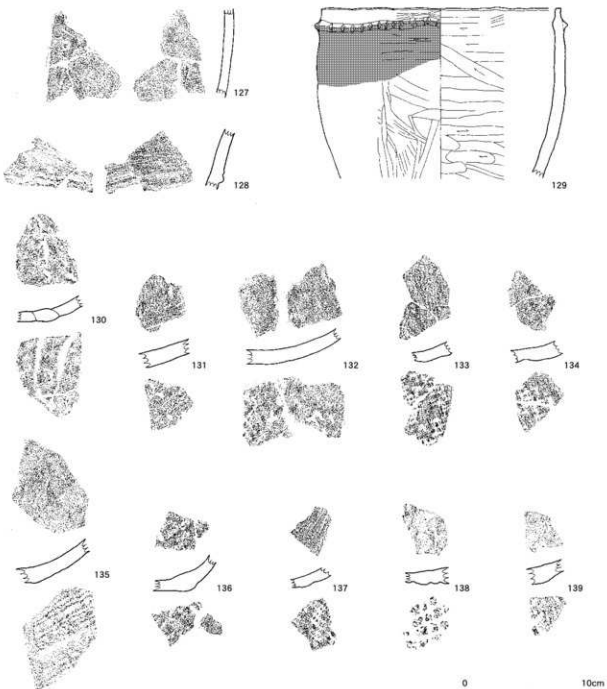
127〜129は　類Ａ土器で深鉢型土器である。127，128は　類Ａ－ａ土器にあたり129は　類Ａ－ｂ土器にあたる。127，128は胴部で129は胴部に突帯を廻らしている。129は口縁部直下に刻目突帯を廻らし，口縁部から胴部にかけて一部炭化物が付着している。放射性炭素年代測定の結果，2480　30yrBPという数値が確認できた。



第63図　北部　縄文時代後期の土器

Ⅻ類Ｃ土器（第64図130～139）

130～139は　類Ｃ土器で鉢型土器である。130，131はＣ－ａ土器でボウル状を呈し組織痕が無い若しくは消されているタイプである。132～137はＣ－ｂ土器で底部に席目状の組織痕が見られるタイプである。138，139はＣ－ｃ土器で底部に網目状の組織痕が見られるタイプである。



第64図　北部　縄文時代晩期の土器

2　古代　（第65図140～144）

140～144は古代の土器である。

140は甕の口縁部から胴部にあたる。口縁部は外反しており，色調はにぶい橙色を呈する。外面は丁寧なハケ目調整で，内面は胴部上位まで工具によるヘラ削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

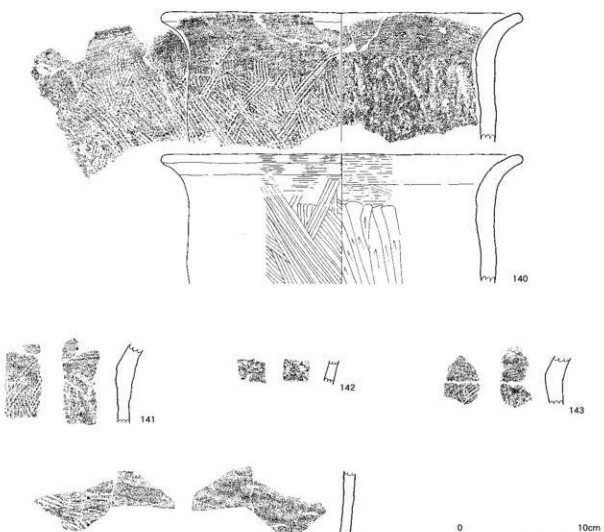
141～144は甕の胴部にあたる。141はにぶい黄橙色を呈し，外面は140と同じくハケ目調整で内面は工具によるヘラ削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

142は褐色を呈し，外面はハケ目による調整が見られ内面はナデによる調整をうけている。胎土は細砂粒を含み土師質である。

143はにぶい褐色を呈し，外面はハケ目調整で，内面は工具による削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

144は黒褐色を呈し，外面は工具痕がスジ状に残る。内面はナデによる調整が施されている。

140，141，143は同一個体ないし同種類の土器と思われる。



第65図　北部　古代の土器

第７表　北部　土器観察表(1)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他	分類	備考
58	47	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	明赤褐色	橙							a	
	48	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい橙							b	
	49	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	50	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部一胴部	-	6.8	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄						磁鉄鉱 小石		
59	51	B-2		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	15.0	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙								
	52	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕、刺突文 工具ナデ	ナデ	にぶい褐	橙						小石		
	53	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	橙	にぶい褐						小石		
	54	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	24.0	-	-	口唇部連点 条痕 ヨコヤザミ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	55	B-2		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	22.6	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	56	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	暗褐	褐						赤色粒 小石		
	57	F-8		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	沈線	ナデ	明褐	橙						チタン鉄鉱 小石		
	58	K-7		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	-	-	-	沈線、照糸 口唇部連点	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						金雲母 小石		
	59	K-7		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	照糸 口唇部連点	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	60	F-5		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕 口唇部連点	ナデ	にぶい褐	橙						赤色粒 小石		
	61	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石		
	62	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒 小石		
	63	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突連続文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	64	H-6 I-6		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	15.4	-	-	沈線、ナデ スス付着	ナデ	にぶい褐	褐						赤色粒 小石		
	65	F-4 I-6		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	20.0	-	-	沈線 口唇部連点	指圧痕 ヘラケズリ	黒褐	にぶい赤褐						赤色粒		
	66	K-7		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻刺突連続文	ナデ	明黄褐	橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	67	B-2		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	19.0	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	明赤褐色								
60	68	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		補修孔
	69	B-2		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	30.4	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	70	2T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 小石		
	71	J-8		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	連続押し引き文	ナデ	橙	橙						赤色粒 小石		
	72	K-6		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	沈線 連続押し引き文	ナデ	褐	にぶい褐						赤色粒 小石		
	73	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	工具ナデ 刺突文	ナデ	橙	にぶい褐						小石		
	74	B-2		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙								
	75	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	-	-	-	沈線 照糸	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	76	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線 連続押し引き文	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐						チタン鉄鉱 小石		
	77	K-8		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	赤褐						磁鉄鉱 小石		
	78	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	明褐	にぶい褐						赤色粒 小石		
	79	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	橙						赤色粒 小石		
	80	K-10		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						チタン鉄鉱 小石		
	81	K-6		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐						チタン鉄鉱・小石 シル質石・赤色粒		
	82	I-7		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線 連続押し引き文	ナデ	にぶい褐	褐						小石		
	83	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						小石		
61	84	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文（縦杓文）	ナデ	にぶい黄橙	褐灰						小石		
	85	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	86	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		
	87	I-6		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	橙						小石		
	88	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	89	I-7		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		
	90	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	ヘラ状条痕文	ナデ	黒褐	にぶい赤褐						小石		
	91	F-4		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		
	92	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		

第８表　北部　土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
61	93	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱 小石		
	94	2T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい明黄褐	黄橙					磁鉄鉱 小石		
	95	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	7.8	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	96	J-8 K-6		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	12.0	-	条痕	ナデ	明褐	赤褐						赤色粒・小石		
	97	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	11.0	-	キザミ目条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
	98	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部一胴部	-	12.6	-	貝殻条痕文 条痕	ナデ	橙	橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
62	99	J-9		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	押型文 口唇部連点	押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	100	21T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石		
	101	I-7		縄文土器（早期）	深鉢	底部一胴部	-	13.2	-	押型文	ナデ	浅黄	灰黄						小石		
	102	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	5.4	-	沈線	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙						磁鉄鉱 赤色粒・小石		
	103	I-7		縄文土器（早期）	壺	口縁部一胴部	19.2	-	-	沈線 条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	Ⅺ	
	104	I-7		縄文土器（早期）	壺	胴部	-	-	-	沈線 条痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄						小石	Ⅺ	
	105	2T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	9.8	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙						赤色粒 小石	Ⅺ	
	106	-	-	縄文土器（前期）	深鉢	底部一胴部	-	7.8	-	条痕	ナデ	橙	橙						チタン鉄鉱 小石		
	107	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	黄橙	にぶい黄橙						小石		
	108	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石		
	109	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石		
	110	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		
	111	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石		
	112	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石		
	113	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	114	K-10		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石		
	115	J-7		縄文土器（前期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙						小石		
	116	2T		縄文土器（前期）	深鉢	底部一胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱		
63	117	F-8 G-8	b	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	沈線	ナデ 口縁に突帯	橙	橙						小石		
	118	J-9		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	橙	橙						小石		
	119	K-10		縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	沈線	ナデ	褐	黒褐					密			
	120	J-9		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	121	K-10		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	褐	にぶい褐								
	122	K-9 J-K-10		縄文土器（後期）	深鉢	底部一胴部	-	6.6	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐						赤色粒 小石		
	123	K-8		縄文土器（後期）	深鉢	底部	-	10.0	-	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙						チタン鉄鉱		
	124	K-9		縄文土器（後期）	深鉢	底部	-	8.8	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	橙						チタン鉄鉱		紐代底
	125	K-7		縄文土器（後期）	深鉢	底部	-	11.0	-	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐						チタン鉄鉱 小石		
	126	F-7	a	縄文土器（後期）	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙								
64	127	F-8 G-8	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐							A	
	128	F-7 G-7	a	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 刻目突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙						赤色粒 小石	A	
	129	8T	-	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部一胴部	19.0	-	-	ナデ ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐							A	スス付着
	130	G-4	横転	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						小石	C	
	131	G-8	b	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐						赤色粒 小石	C	
	132	F-8 G-7	b	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	明黄橙	にぶい黄橙						小石	C	
	133	F-8	b	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	C	
	134	G-7	b a	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	C	
	135	H-7	b	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	C	
	136	J-7 K-10		縄文土器（晩期）	深鉢	底部一胴部	-	-	-	圧痕	ナデ	黒褐	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	C	
	137	G-8		縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	C	
	138	F-7	a	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	黒褐	黒褐						赤色粒 小石	C	
	139	F-8	b	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	黒褐	黒褐						小石	C	
65	140	J-6		古代土器	甕	口縁部一胴部	28.6	-	-	ハケメ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱 小石		
	141	J-6		古代土器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ	ケズリ	褐	にぶい褐						小石		
	142	F-8	-	古代土器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ	ナデ	にぶい赤橙	にぶい褐								
	143	J-6	a	古代土器	甕	頸部	-	-	-	ハケメ	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 小石		
	144	I-5		古代土器	甕	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐						小石		漆B

第５節　出土石器

狩俣遺跡の北部では，縄文時代早期と晩期の遺物包含層から石器が出土している。

早期では石鏃・石匙・スクレイパー・微細剥離痕剥片・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・敲石・凹み石・石皿が，晩期では石鏃・磨石が確認できる。なお，黒曜石・安山岩・玉髄・チャート・砂岩・泥岩等が主要石材として使用されている。

１　縄文時代早期（第66〜69図145〜176）

早期の石器は，石鏃８点，スクレイパー５点，微細剥離痕剥片４点，磨製石斧２点，打製石斧２点，礫器１点，磨石５点，凹石１点，石皿４点の計32点である。

⑴　石鏃（第66図145〜152）

８点の石鏃が確認できる。

145〜147はいわゆる正三角形鏃で，145，146の基部の抉りは浅く，145は右脚部，146は先端部を欠損するが，先端部を含む突出する３ヶ所は鋭く作り出されている。147の裏面には素材剥片の剥離面が多く残され，表面と基部では平坦剥離が多用され，整形は微細な剥離を重ねることで仕上げている。147は基部の抉りを深くし，左側縁部にも意図的な抉りの痕跡が見られる。145，146は安山岩，147はチャートを用いている。148〜151はいわゆる長身鏃で，内151は二等辺三角形鏃に該当する。148の基部は直線的で，全体が鋭利な仕上がりを見せる。149，150は脚部の長さが異なる特徴を持つ相似形で，成形状況から判断し，意図的に作り出した形状と見られる。151はやや厚手の剥片を素材とし，表面では平坦剥離を多用している。裏面では周辺のみに成形剥離をとどめ，素材剥離面を多く残している。

148，149は安山岩，150の黒耀石は桑ノ木津留産，151は玉髄を使用している。

152は帰属が明確でないが，未製品，両側縁の抉りからは抉入状石器等が想定される。

⑵　スクレイパー（第66図153〜157）

153はチャート製で，左側縁下位を除く縁辺に刃部加工と見られる剥離が認められる。頭部付近の加工が著しく，裏面では打瘤を除去し，表面では平坦剥離が施される。おそらく，掻器として使用したと見られる。154からは，打点移動を繰り返す剥片剥離技術の存在が読み取れる。155は礫他面の石核から取り出された横長剥片の先端部に，両面方向からの刃部加工が認められる。156は剥片の右側縁部に細かい刃部加工が認められるが，本体は破損している。157も不定型な横長剥片の周辺に刃部加工が認められる。なお，以上５点はいずれも削器的機能を備えている。

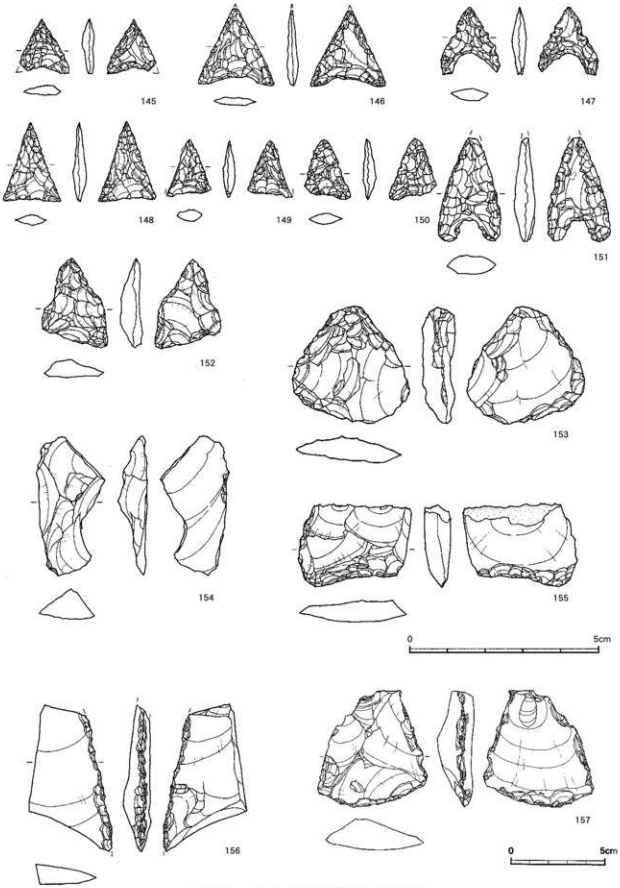
153と154はチャート，155と156は安山岩，157は玉髄を使用している。

⑶　微細剥離痕剥片（第67図158〜161）

158〜161は微細な剥離痕が見られる剥片である。

158右側縁部の両面と下端部に，159は左側縁部に，160は不定型な横長剥片の下端部に微細剥離が見られ，161は打面周辺に微細剥離が，左側縁部と下縁部には使用痕と見られる刃潰れが残る。なお，これに用いた剥片はいずれも打面転移を繰り返す剥離技術から剥ぎ出された不定形剥片を使用している。したがって，用途（機能）を目的として剥ぎ取った目的剥片では無く，使用用途に緊急に選択したものと解される。

石材は，158と161が玉髄，159はチャート，160は黒耀石である。



第66図　北部　縄文時代早期の石器(1)

⑷　磨製石斧（第67図162，163）

162は横断形の分厚いレンズ状を呈する全磨製石斧で，敲打成形後，全身の研磨仕上げを行っている。刃部の残存状況は良好といえる。163も丁寧な仕上げが見られ，刃部の作り出しすなわち，切っ先は鋭い。

⑸　打製石斧（第68図164，165）

いわゆる扁平打製石斧で，164が短冊形，165が分銅形に区分できる。

164は表裏逆に掲示しており，主要剥離面からは横長剥片を選択したことが読み取れる。周辺部は鋭角な小剥離で成形し，背面には各方向からの平坦剥離を加え，扁平化に努めたと読み取れる。

165も扁平な剥片を選択し，刃部はリダクションを繰り返したと見られる。いずれも安山岩を選択している。

⑹　礫器（第68図166）

166はローリング作用による摩耗面で形成する扁平礫を素材とし，側縁の一角に裏面方向からの刃部形成が認められる。石材は安山岩を使用している。

⑺　磨石（第68，69図167〜171）

磨石と区分したが，敲打痕もあり，磨面との両機能を備えたものもある。

167は凝灰岩を使用していることから，摩耗が激しい。168は砂岩を使用し，側縁部や頂部，端部に敲打痕が明瞭に残る。169は凝灰岩，170は安山岩を使用し，170の磨石としての使用頻度は極めて高いと言える。表裏両面は平坦化を成すほどに使用され，右側縁部，頂部，端部は敲打具としての機能も備えている。171は砂岩を用い，両面に摩擦面が残る。

⑻　凹石（第69図172）

172は安山岩製の凹石である。正面に凹石としての使用痕が見られ，裏面に磨り面が見られる。

⑼　石皿（第69図173〜176）

173〜176は石皿である。いずれも安山岩を使用しており，破損した石皿の一部が採取されている。174，175も石皿の一部であるが，特に横断面の観察では，弯曲した使用面が観察できる。

2　縄文時代晩期（第70図177〜182）

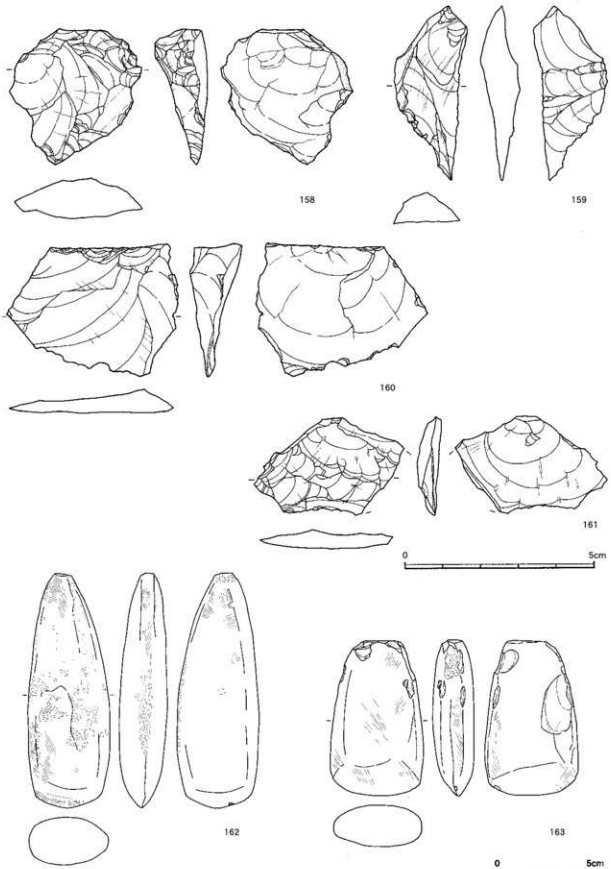
晩期の石器は，石鏃5点，磨石1点の計6点である。

⑴　石鏃（第70図177〜181）

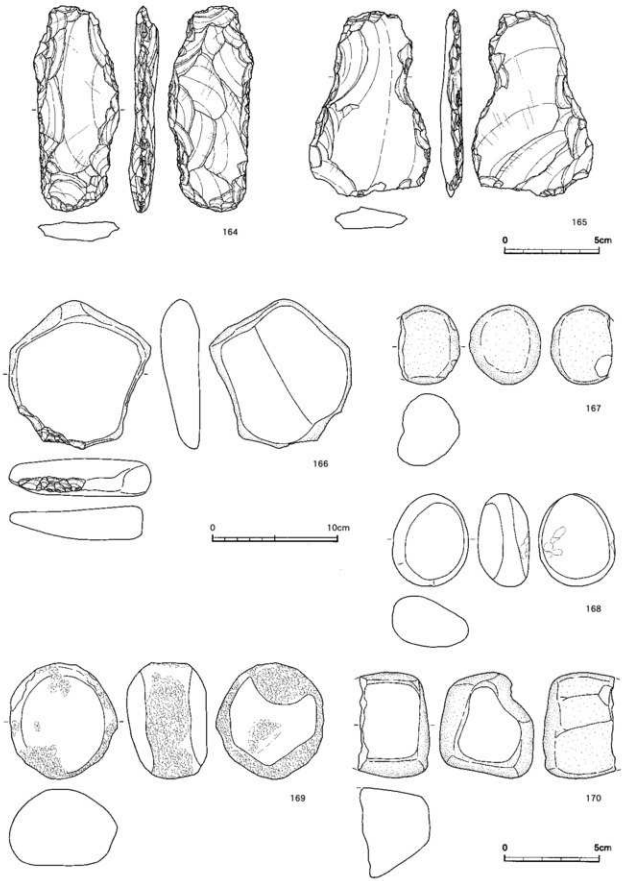
177は側縁部上位で鋭角に屈曲するいわゆる五角形鏃で，先端部は欠損する。なお，成形状況から未製品の可能性もある。178は両側縁部がドーム状に弯曲する小型鏃で，薄く仕上げている。179は長身鏃で，欠損する先端部を推定復元すると1５：１０程の長幅比が求められる。180は178と同じくドーム状の形状で，基部が深く抉られたものである。181は脚部の作り出しに特徴が見られる。177はチャート，178，179は安山岩，180は黒耀石で，その特徴から腰岳産の可能性を指摘できる。

⑵　磨石（第70図182）

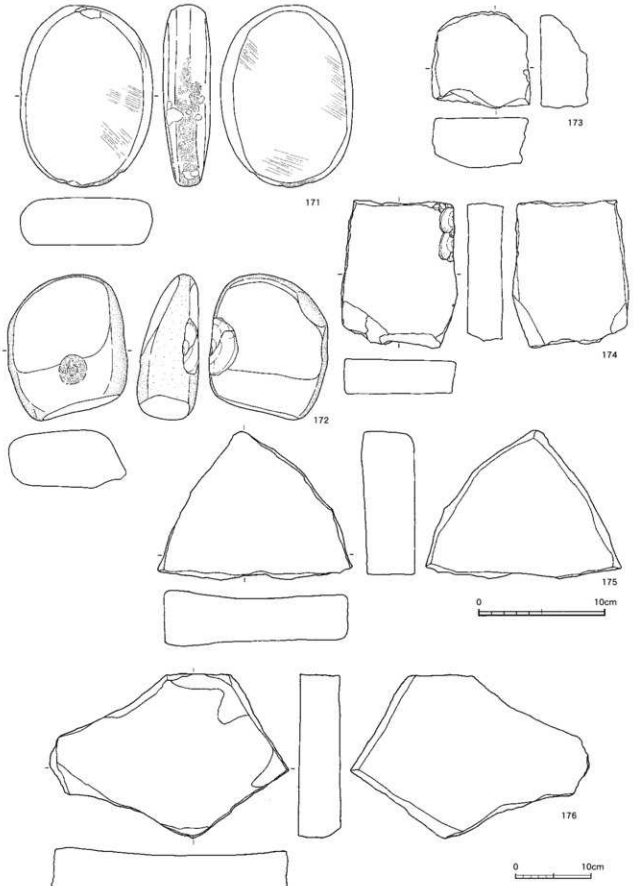
182は円形の磨石で，正面中央部，右側縁部及び裏面上部に敲打痕を持つことから，両機能を備えていると判断できる。摩耗面の最も著しいのは裏面中央部付近で，安山岩を使用している。



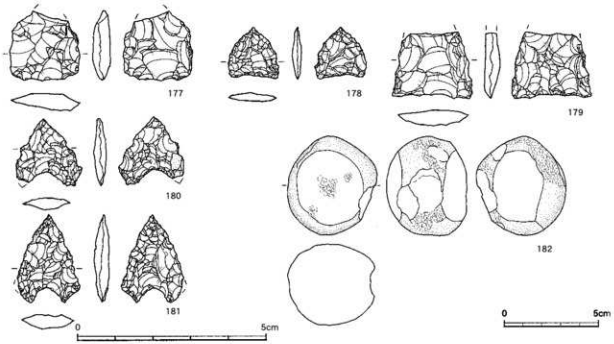
第67図　北部　縄文時代早期の石器(2)



第68図　北部　縄文時代早期の石器(3)



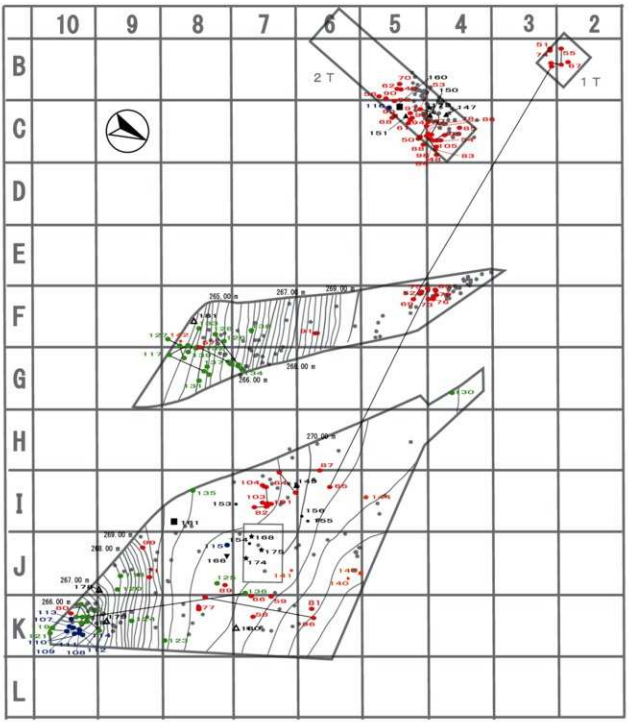
第69図　北部　縄文時代早期の石器(4)



第70図　北部　縄文時代晩期の石器

第９表　北部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
66	145	石鏃	試掘	表採	安山岩	1.5	1.3	0.3	0.33	一括
	146	石鏃	試掘	表採	安山岩	2	2	0.2	0.83	一括
	147	石鏃	2T		黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.62	
	148	石鏃	21T		安山岩	2.1	1.5	0.3	0.68	一括
	149	石鏃	I-6		安山岩	1.5	1.2	0.3	0.38	
	150	石鏃	2T		黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.41	
	151	石鏃	2T		玉髄	2.8	1.6	0.4	2.03	
	152	石鏃	試掘	表採	安山岩	2.3	1.7	0.4	1.70	一括
	153	スクレイパー	I-7		チャート	3	3.1	0.8	7.29	
	154	スクレイパー	8T		チャート	3.7	1.8	0.8	3.51	
	155	スクレイパー	I-6		安山岩	2.2	3	0.6	4.86	
	156	スクレイパー	I-6		安山岩	3.8	2.2	0.6	4.99	
	157	スクレイパー	試掘	-	玉髄	6.2	5.9	1.5	56.51	
67	158	微細剥離痕剥片	-	表採	チャート	3.6	3.5	1.1	13.69	
	159	微細剥離痕剥片	-		チャート	4.6	1.9	0.9	4.97	一括
	160	微細剥離痕剥片	I-8		チャート	3.5	4.5	0.6	14.78	
	161	微細剥離痕剥片	2T		黒曜石	2.6	4	0.5	4.94	
	162	磨製石斧	試掘	-	砂岩	12.4	4.3	2.5	203.21	
	163	磨製石斧	試掘	-	砂岩	8.2	5	2.2	141.21	
68	164	打製石斧	試掘	-	安山岩	10.9	4.5	1	81.20	
	165	刃部磨製石斧	試掘	-	安山岩	9.8	6.4	1.1	83.03	
	166	磨器	J-8		安山岩	11.8	11.2	2.7	471.49	
	167	磨石	-	表採	凝灰岩	4.2	3.3	3.8	53.21	
	168	磨石	8T		砂岩	4.9	4	2.7	74.47	
	169	磨石	-	表採	凝灰岩	6.2	5.7	4	215.83	
	170	磨石	-	-	安山岩	5.6	3.8	4.8	157.54	
69	171	磨石	試掘	-	砂岩	14.4	10.4	3.8	893.32	
	172	くぼみ石	2T		安山岩	11.5	9.4	4.5	774.84	
	173	石皿	I-6，7		安山岩	7.7	7.8	3.7	350.00	一括
	174	石皿	8T		安山岩	11.6	9.2	2.8	629.17	
	175	石皿	8T		安山岩	11.3	14.4	4.5	1070.00	
	176	石皿	-	-	安山岩	30.3	21.4	7	6000.00	
70	177	石鏃	-	表採	チャート	1.9	1.8	0.4	1.93	
	178	石鏃	J-9	b	安山岩	1.3	1.3	0.3	0.45	
	179	石鏃	K-9		安山岩	1.7	2.1	0.4	1.68	
	180	石鏃	K-7		黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.71	
	181	石鏃	F-8	b	黒曜石	2.4	1.7	0.4	1.20	
	182	磨石	-	a	安山岩	5.2	4.75	4.3	148.48	



- 縄文土器（早期）
- 縄文土器（前期）
- 縄文土器（後・晩期）
- 古代土器
- スクレイパー（縄文早期）
- 微細剥離痕剥片（縄文早期）
- 礫器（縄文早期）
- 磨石・石皿（縄文早期）
- 石鏃（縄文晩期）

第71図　北部　遺物出土状況図

第Ⅴ章　中央部の調査

第１節　調査の概要（第72，73図）

中央部の本調査は，Ｋ，Ｌ－16～22区を平成18年２～３月，Ｋ～Ｌ－23～27区を平成18年５～７月，Ｇ～Ｌ－28～52区を平成18年７月～19年３月に調査を行った。

本遺跡の主体となる部分が中央部調査区であり，265m前後の台地で北部調査区より若干低く，西側に谷部調査区を見下ろす位置となる。東側は平坦面で，台地の東端までは140mほど離れる。

平成13年度の確認調査により，台地東端の縁辺部には縄文時代早期の竪穴住居跡，土坑などの遺構，遺物が出土し，早期の集落が存在する可能性が指摘されている地域である。南側へ向かって行くと緩やかに標高が下がり，尾根状に伸びる南部調査区へと続く。調査区の面積は12,660㎡で，南北約380m，東西の最大幅が約70m，北側が鋭角に尖り，南側がややすぼまる細長い調査区である。調査前は畑地として利用されていた。

平成17年度の調査では，谷部調査区と並行して北側のＫ～Ｌ－16～22区部分について３ヶ所トレンチを設定し調査を行った。調査区外となった台地東端の縁辺部のトレンチから縄文時代早期の遺構・遺物が発見されていたので遺構の広がりを期待しながら調査を進めたが，関連するような成果は認められなかった。

平成18年度の調査では，中央部調査区に計17ヶ所の確認トレンチを設定し，遺構や遺物包含層の残存状況を確認しながら調査を行った。北側調査区と並行してＫ～Ｌ－23～27区部分の調査を行い，Ｇ～Ｌ－28～37区，Ｇ～Ｌ－38～44区，Ｇ～Ｉ－45～52区と順次南側へ向けて調査区を広げていった。大規模な天地返しを受けているところ以外は，ほぼ全面で畝状遺構が検出されたことから，全体像の把握を主眼に置き調査を進めた。

平成19年１～３月は，縄文時代早期の調査を中心に行った。旧石器時代についての確認調査も行ったが，認められなかった。

中央部の検出遺構は，縄文時代早期の集石や土坑，縄文時代中～後期の落とし穴，古代の掘立柱建物跡柱，土坑，中世の畝状遺構などである。

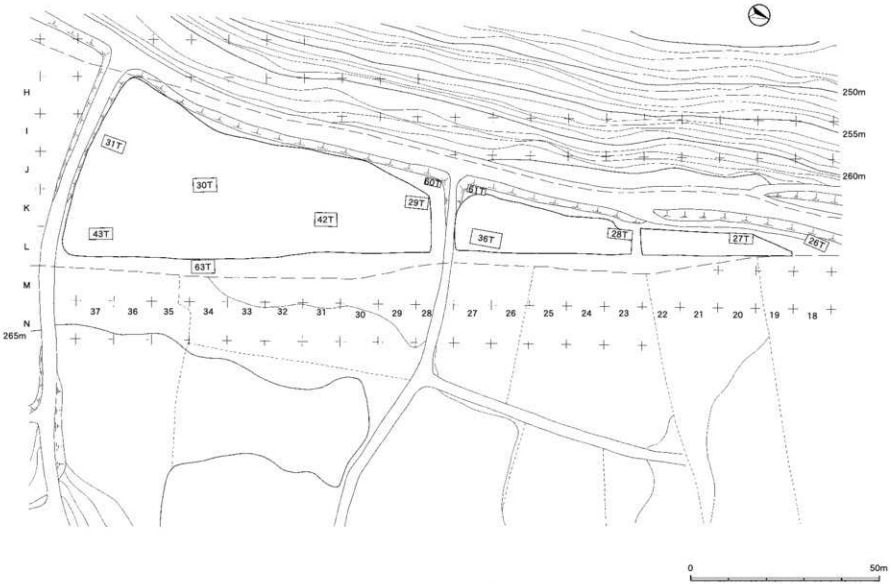
出土遺物は，縄文時代早期の包含層から前平式土器や下剥峯式土器，押型文土器，石坂式土器などの土器や石鏃，石斧，磨石，石皿などの石器が多数出土した。また，縄文時代前期，後期，晩期の遺物も出土した。古代については，土師器，須恵器，焼塩土器，紡錘車などが出土した。

第２節　中央部の層位（第74～78図）

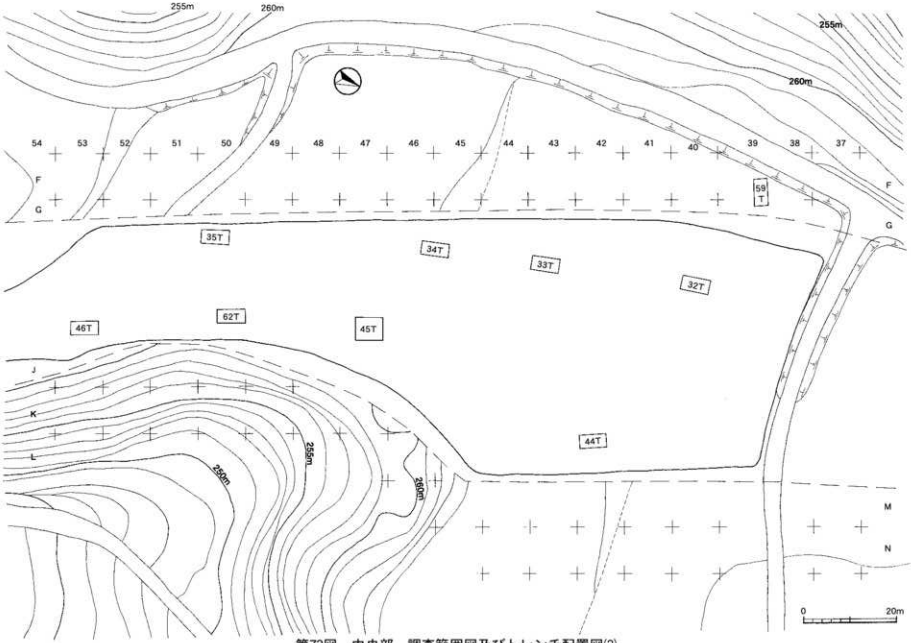
Ｋ～Ｌ－16～27区，Ｇ～Ｌ－38～44区では，大規模な天地返しが行われ，概ね　層までが撹乱を受けていた。しかし，縄文時代早期の包含層である　，　層は良好に残されていた。

また，Ｉ～Ｋ－33～36区で上層の削平により表土下は　層であった。

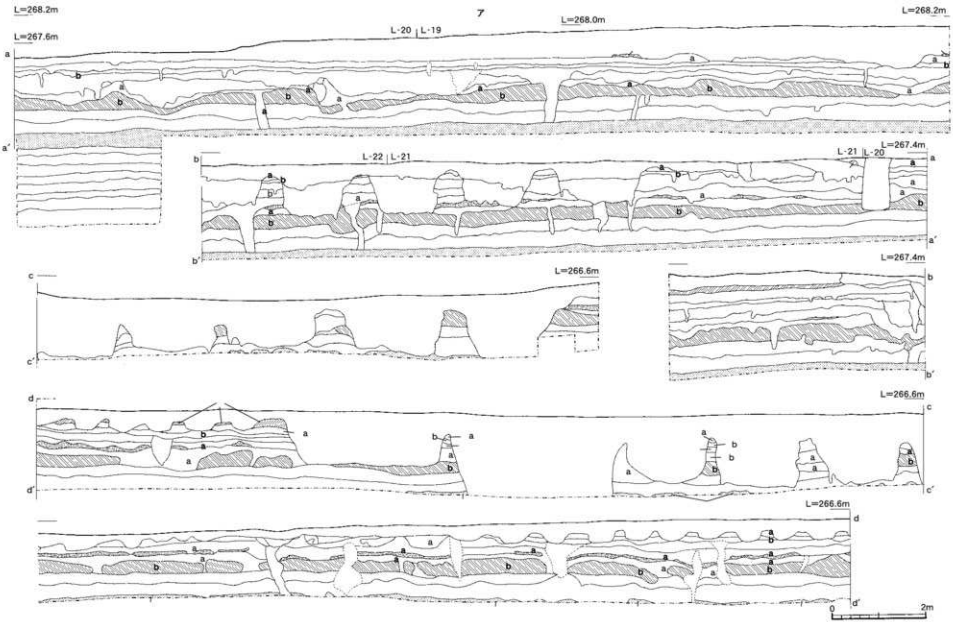
　層については，畑作の障害となるためポラ抜きが行われたと見られ，東西の谷へ下る台地の縁辺部など部分的にしか残っていなかった。その他では，包含層が良好に残されており，横転などもあまり見られなかった。



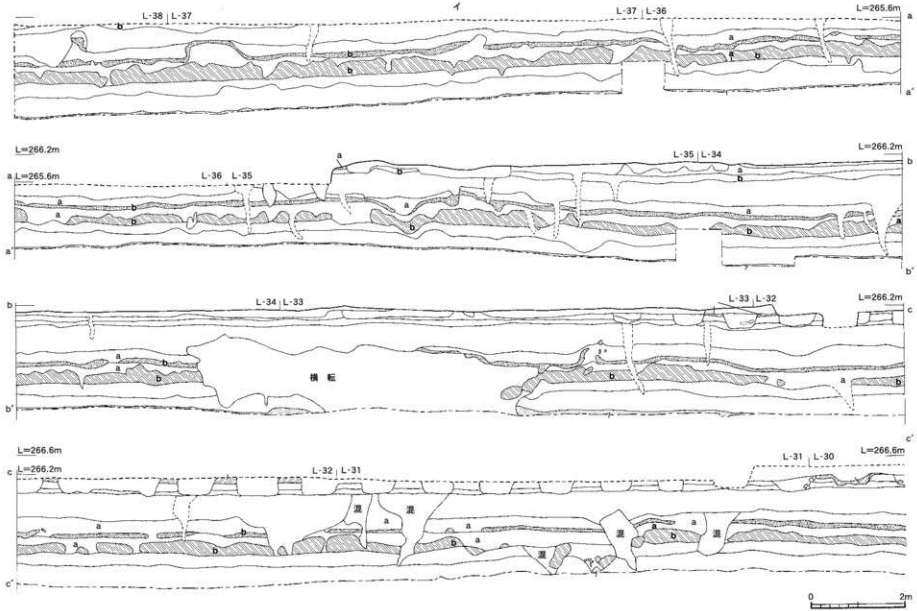
第72図　中央部　調査範囲図及びトレンチ配置図(1)



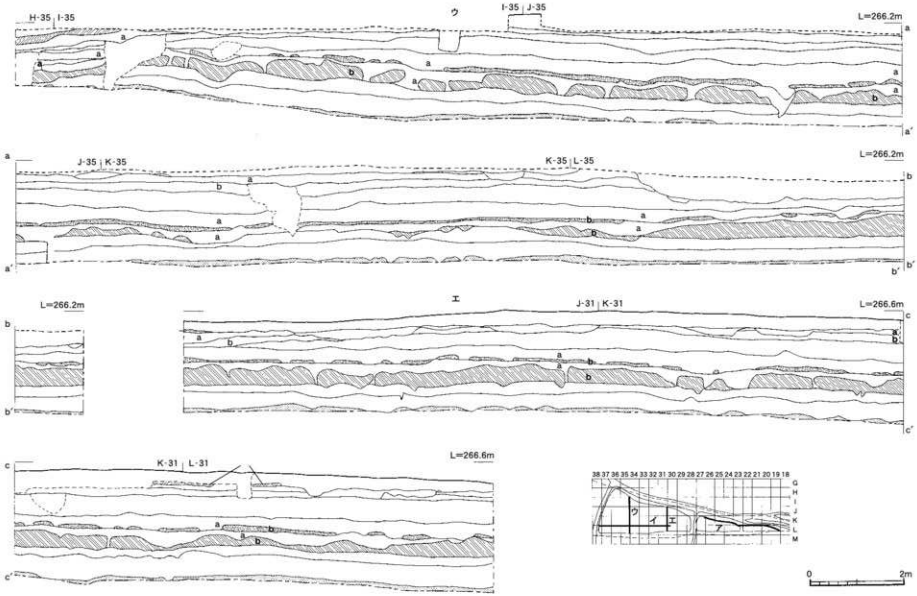
第73図　中央部　調査範囲図及びトレンチ配置図(2)



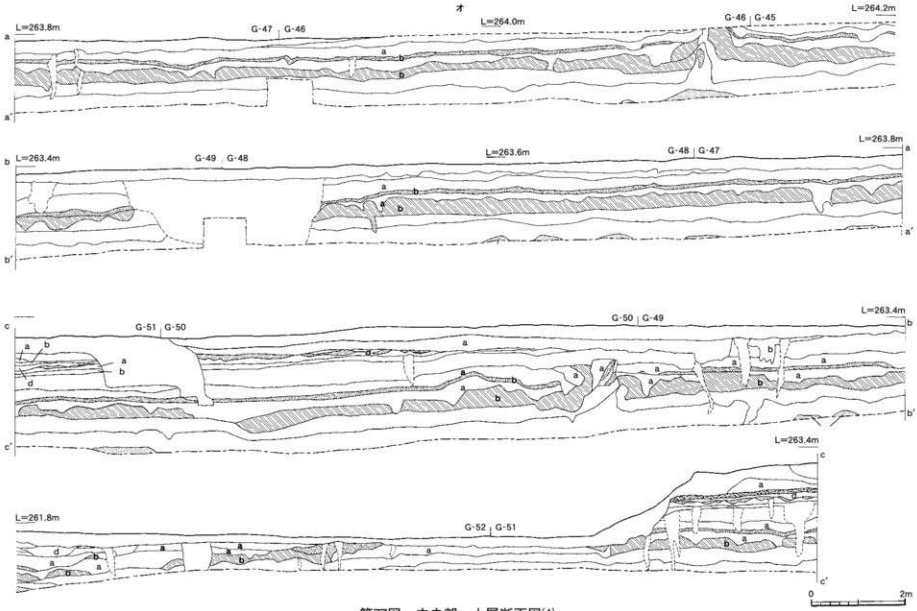
第74図　中央部　土層断面図(1)



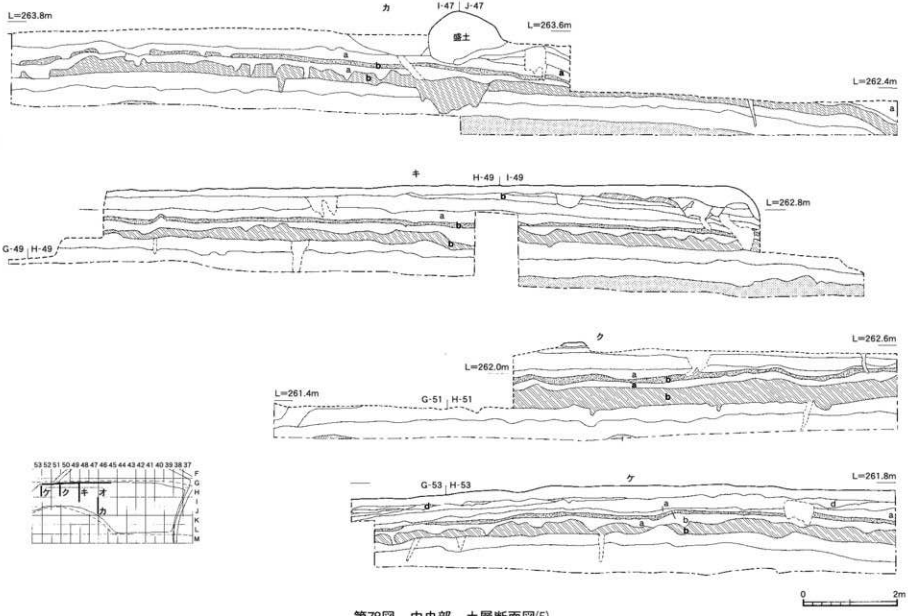
第75図　中央部　土層断面図(2)



第76図　中央部　土層断面図(3)



第77図　中央部　土層断面図(4)



第78図　中央部　土層断面図(5)

第３節　検出遺構

中央部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の遺構は，早期が集石遺構19基，石器集積遺構１，土坑10基，前〜晩期が落とし穴２基，焼土跡２，土坑13基が検出された。集石遺構全体の７〜８割は，中央部より検出されている。

古代〜中世の遺構は，掘立柱建物跡が３棟，溝状遺構13群，土坑11基が検出された。

中世〜近世の遺構は，古道１条，埋土に文明ボラを含む畝状遺構７群，安永ボラを含む畝状遺構１群，土坑が38基検出された。

１　縄文時代早期（第79〜95，100，101図）

縄文時代早期の遺構は集石遺構19基，石器集積遺構1，土坑10基である。

集石遺構は，北部調査区と同様に，　層下面から　層上面，　層中のものに分けられる。また，形態も狭い範囲に集中するものと，広い範囲に散在するものに大きく分けられる。中央部全域で確認されているが，中央部から南部へ分布する傾向が見てとれる。

石器集積遺構は，　類土器の集中域に隣接して磨石・敲石２個と石皿が集中して出土した。

土坑は，　層上面で検出され，埋土は　層の黒色土が主体である。

⑴　集石遺構（第79〜94，100，101図）

縄文時代早期の集石遺構は19基検出された。掘り込みを持つものは19基中３基である。

集石７号（第79図）

Ｌ－23区，　層上面で検出された。73　63㎝の範囲内に，大きさ径10㎝前後の角礫の集中が認められた。礫数は10個で，石材は安山岩主体となる。顕著な赤化した礫はみられないが，加熱による破損に起因すると思われるものは数点認められる。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

周辺に集石遺構は検出されていないが，縄文時代早期の主体部に当たる台地東側の集石１，２号までの間に数多く存在すると予想されるが，未調査のため全体像は不明である。

礫の中には石器の転用が１点含まれており，遺構内遺物として取り扱った。（第166図660）

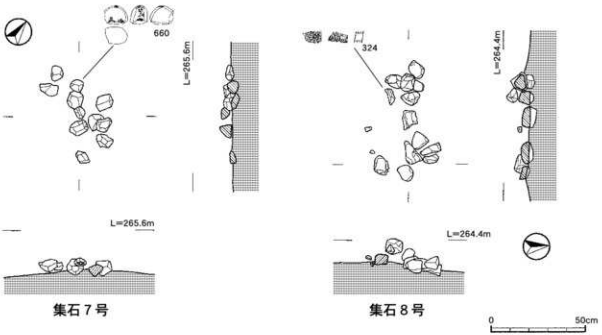
集石８号（第79図）

Ｌ－30区，　層で検出された。礫数は14個と少ないがほぼ同規模の拳大であり，径が10㎝強，重量500ｇ以上とやや大きめの礫が半数を占める。90　60㎝の範囲内に楕円状にまとまりが見られた。石材は大部分が安山岩であり，花崗岩も含まれる。全てが火熱を受けたと思われる破砕礫であり，一部赤化が見られた。下部に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石内に縄文早期土器が１点出土しており，遺構内遺物として取り上げた。（第130図324）

集石９号（第80図）

Ｌ－31，32区，8号の南東側約15ｍの　層で検出された。２　２ｍの範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められた。礫数70個中30個ほどに集中が見られ，隙間無く密集していた。下位に掘り込みは確認されなかったが，74　67㎝の範囲で炭化物の集中が認められた。礫は火熱を受け赤化した破砕礫と角の取れた角礫が混在しており，石材はほとんどが安山岩であるが砂岩や花崗岩も一部含まれる。大きさ径が20㎝近いやや大型の礫も含まれるが，10㎝未満の小礫も多く，重量が100ｇ前後から１㎏を越えるものまでいろいろな大きさの礫で構成されている。集中部と散在し



第79図　中央部　縄文時代早期　集石７，８号

た部分の礫の特徴が類似することから，同一の集石と判断した。

集石10号（第80，83図）

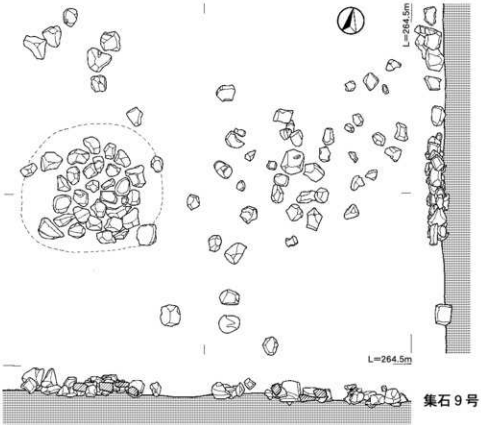
Ｊ－35区，　層で検出され，掘り込みを伴うもので，礫は281　195㎝の範囲で確認される。掘り込み内に礫が集中し，その周辺に散在した礫で構成される。掘り込みの大きさは，70　65㎝のほぼ円形を呈し，深さは約40㎝である。　層の黒色土に掘り込まれ，掘り込みの底面には炭化物を多く含んでいた。礫数は68個で，石材は10㎝前後の拳大をした安山岩で大部分を占めるが砂岩や頁岩も含まれる。掘り込みのある中央部分を中心として，火熱を受け赤化した破砕礫が半数以上を占め，周辺を含めた上面に５㎝前後の小振りなものが多く，底面に近づくにつれて拳大になる傾向がある。

集石11号（第81，83図）

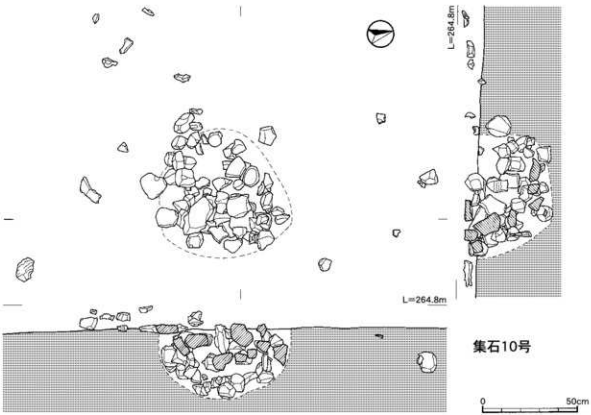
Ｊ－36区，10号の南側約８ｍの　層上面で検出された。160　120㎝の範囲内に，礫がやや集中した部分と散在した部分で構成する。礫総数は19個と少なく，石材はほとんどが安山岩であり，赤化したものも多い。礫のほとんどが火熱を受けたと思われる大きさ径10㎝以下，重量200ｇ以下の破砕礫で，全体の半数以上を占める。集中部分に　層の黄色パミスが多く含まれる部分が116　65㎝の範囲で認められたが，集石との関連は不明である。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石12号（第82，83図）

Ｋ－36区，10号の南東側約12ｍ，11号の東側11ｍ離れた　層上面で検出された。２　１２ｍの範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められる。礫数は68個で，礫の大部分は火熱を受けたと思われる径10㎝前後の破砕礫で，赤化も認められる。石材はほとんどが安山岩であり，頁岩，凝灰岩，砂岩なども含まれている。検出された集石の範囲内に，炭化物や掘り込みは認められなかった。

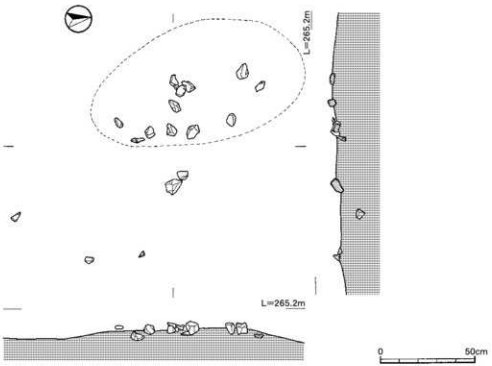


集石９号



集石10号

第80図　中央部　縄文時代早期　集石９，10号



第81図　中央部　縄文時代早期　集石11号

集石10～12号は近接しており，いずれも尾根状の縁辺部に位置している。

集石13号（第84図）

Ｈ－39，40区，12号の南側約40mの　層上面で検出された。142　116㎝の範囲内に，破砕礫の集中が認められた。礫数29個で，径約15㎝，800ｇ程の角礫もわずかに含まれるが，本体は径10㎝以下，重量300ｇ以下のもので占められている。石材は頁岩と花崗岩の割合が多い。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

礫間出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果は，8，230　50yrBPである。

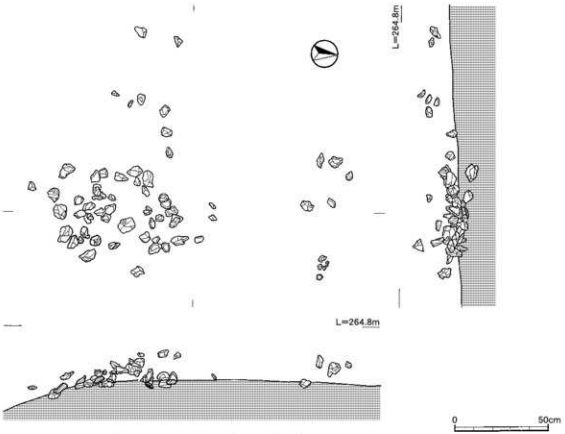
集石14号（第84図）

Ｉ－42区，13号の南東側約20mの　層上面で検出された。154　116㎝の範囲内に，中央に礫が集中した部分がわずかに見られるが，全体的に散在した状態で検出された。礫数は36個で，全てが加熱を受けたと思われる径10㎝以下，重量200ｇ以下の破砕礫である。赤化したものも多く，径５㎝以下の破片も10個以上含まれる。石材は半数が安山岩であり，周辺に炭化物や掘り込みは認められなかった。

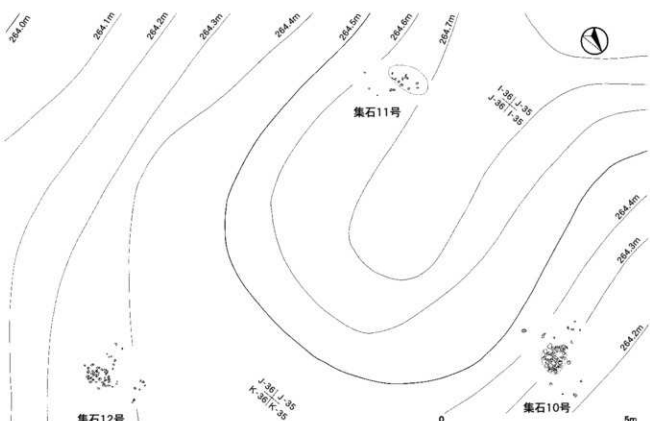
礫間で出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は，7，260　40yrBPである。

集石15号（第84，87図）

Ｉ－44区，14号の南側約25mの　層で検出したもので，下位に掘り込みを伴う。礫は254　204㎝の範囲内に分布し，掘り込み内の礫と周辺の散在部分からなる。掘り込みの大きさは70　65㎝，深さ39㎝のほぼ円形を呈しており，底面付近には多くの炭化物を含んでいた。礫数67個で，大きさ径約10㎝の拳大のものが大部分を占めるが，重量１㎏近い角礫も存在する。散在した礫も含め火熱を受けた破砕礫や，赤化しているもので構成する。石材は安山岩が大部分をしめるが，頁岩や花崗岩，



第82図　中央部　縄文時代早期　集石12号



第83図　中央部　縄文時代早期　集石10～12号配置図

砂岩なども含まれる。

集石16号（第85，87図）

Ｈ－45区，15号の南西側約10mの　層上面で検出された。２３　２３mの範囲内に礫が散在している。礫数は24個でほとんどが径10㎝以下，重量300ｇ以下の小礫で構成されていた。石材は安山岩を主体に凝灰岩や砂岩なども含まれる。礫は火熱を受けた痕跡は見あたらず，炭化物や掘り込みも確認されなかった。

集石17号（第85，87図）

Ｊ－45区，15号の南東側約13m，16号の東側約15mの　層で検出された。208　141㎝の範囲内に，礫が散在した状態で検出されまとまりは見られない。礫数は27個で，火熱を受けたと思われる径10㎝以下，重量150ｇ以下の破砕礫で構成する。石材は安山岩が中心で，検出された集石の周辺に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石18号（第86，87図）

Ｊ－46区，17号の南東側約３ｍに隣接して検出された。検出面は　層上面で，２６　１６mの範囲内に礫が散在して検出され，礫の集中は見られない。礫数は46個で，径10㎝前後の破砕礫で構成されている。石材は半数が安山岩であり，頁岩，玄武岩，花崗岩，砂岩なども含まれている。検出された集石の範囲内に炭化物の飛散が見られ，掘り込みは認められなかったが，西側に火熱を受けた痕跡と思われる60　52㎝の円状を呈した茶褐色の変色域が見られ，遺構の中心部と推定される。

集石15，16号は尾根状の台地にあり，集石17，18号は緩やかな斜面上に位置している。いずれの集石も南側の斜面方向に礫が散在する傾向にある。

集石19号（第92図）

Ｌ－44区，18号の北東側約20mの　層で検出された。１５　１５mの範囲内に礫の集中が認められたが，集中部分は見られない。礫総数44個で，径10㎝前後，重量200ｇ程度のものが大部分であるが，50ｇ～１㎏までのものまで幅が広い。石材は半数以上が安山岩であるが，花崗岩，頁岩なども含まれる。全てに火熱を受けたと思われる破砕が見られ，赤化や破砕が激しいものがある。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石を構成する礫中に遺物の転用品が１点含まれていたので図化した。（第167図670）

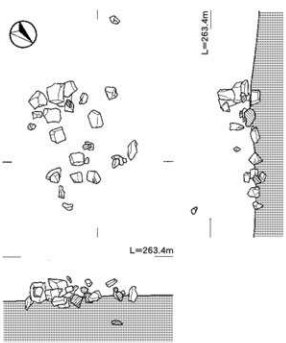
集石20号（第88，90図）

Ｇ－48区，　層上面で検出された。258　220㎝の範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められた。礫数は94個であるが，約７割の礫が75　60㎝の範囲に集中して隙間無く積み重なっており，残りの約30個が東側に広く散在していた。集中部の下位に明確な掘り込み遺構は確認できていないが，掘り込み遺構が存在した可能性は高い。また，炭化物の集中も確認していない。石材は半数以上が10㎝前後の安山岩の火熱を受けた破砕礫であり，赤化したものも多い。炭化物の集中は無いが，少量が全体的に広がって見られた。

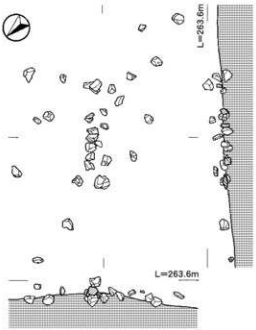
集石内に縄文早期土器が２点出土しており図化した。（第167図294，298）

集石21号（第88，90図）

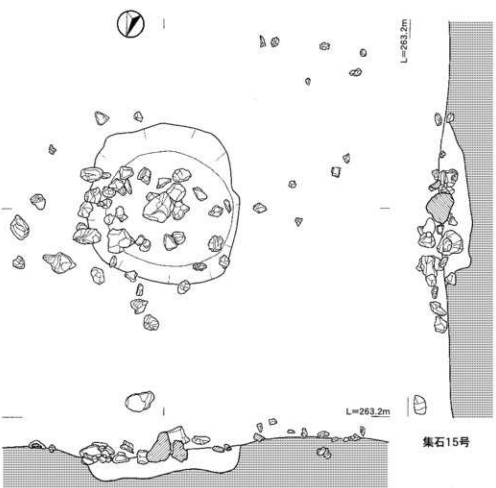
Ｇ－48区，集石20号の北東側に隣接して検出された。検出面は　層上面である。243　185㎝の範囲内に，礫のまとまった部分と散在した部分が認められ，北側方向へ散在している。礫数は50個で



集石13号



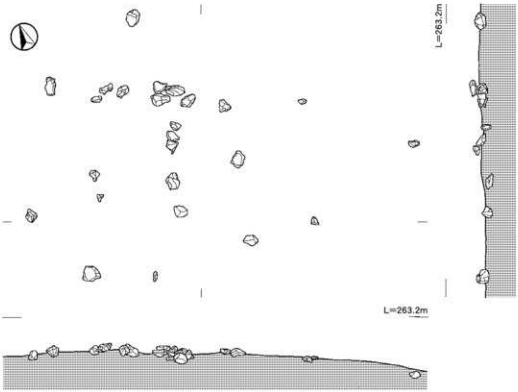
集石14号



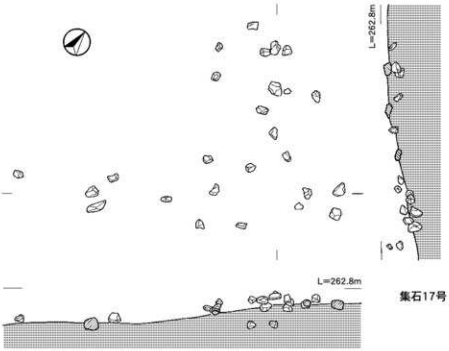
集石15号

0 50cm

第84図　中央部　縄文時代早期　集石13，14，15号



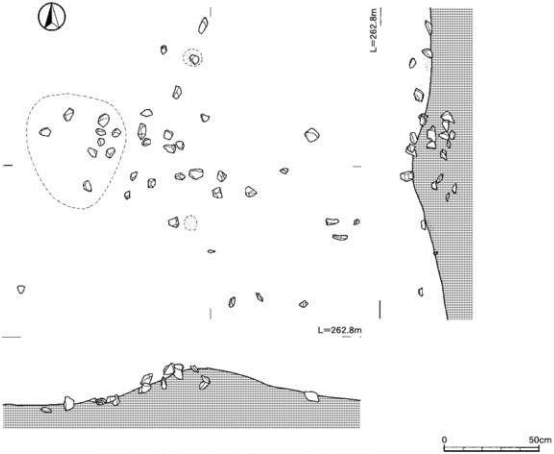
集石16号



集石17号

0 50cm

第85図　中央部　縄文時代早期　集石16，17号



第86図　中央部　縄文時代早期　集石18号

あり，全てが径10㎝前後の礫であり，火熱を受けた破砕礫が大部分を占めている。石材は安山岩，花崗岩が中心であり，砂岩も含まれる。集中部分の礫はあまり多くないが，下位の65　53㎝の範囲に強く赤化した跡が確認された。集石の中心部と思われるが，北東側にある集石20号と隣接していることから，21号を本体とする同一の集石であり，廃棄の際に礫が散在したものが集石21号の可能性がある。

礫の中には石器の転用品が２点含まれており，遺構内遺物として取り扱った。（第164図644，第166図659）

集石22号（第89，90図）

Ｈ－49区，　層上面で検出された。248　221㎝の範囲内に，礫のまとまった部分と散在した部分，その他に横転の影響で大きく動き，本体下部30㎝のところまで移動した部分が認められた。　層上面で散在した礫は，本体部分から東側方向へ広がっている。　層上面にとどまり集中して検出されたものは，35個であり礫総数の約半分であり，東側に散在している礫は12個である。本体の下位に　層が大きく入り込み，そこで礫の集中が２ヶ所に見られた。横転の影響を受けた部分がそのまま本体下部に潜り込んでいたと思われる。地層の横転により大きく撹乱を受けている礫は29個であり，集石22号全体の礫数は111個である。散在した礫も転がるように出土しているので，横転の影響と考えられる。石材はほとんどが安山岩であり，拳大の破砕礫が多い。

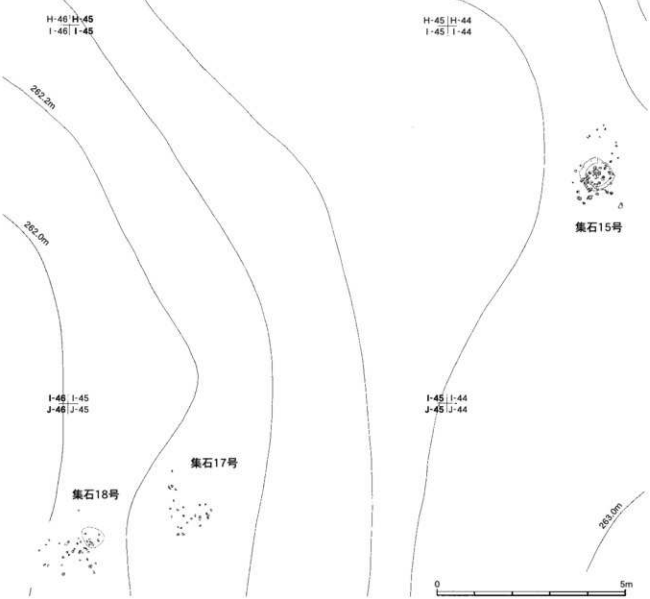
集石23号（第89，90図）

Ｉ－49区，22号の東側約10ｍ離れた　層上面で検出された。214　165㎝の範囲内に，礫が散在し

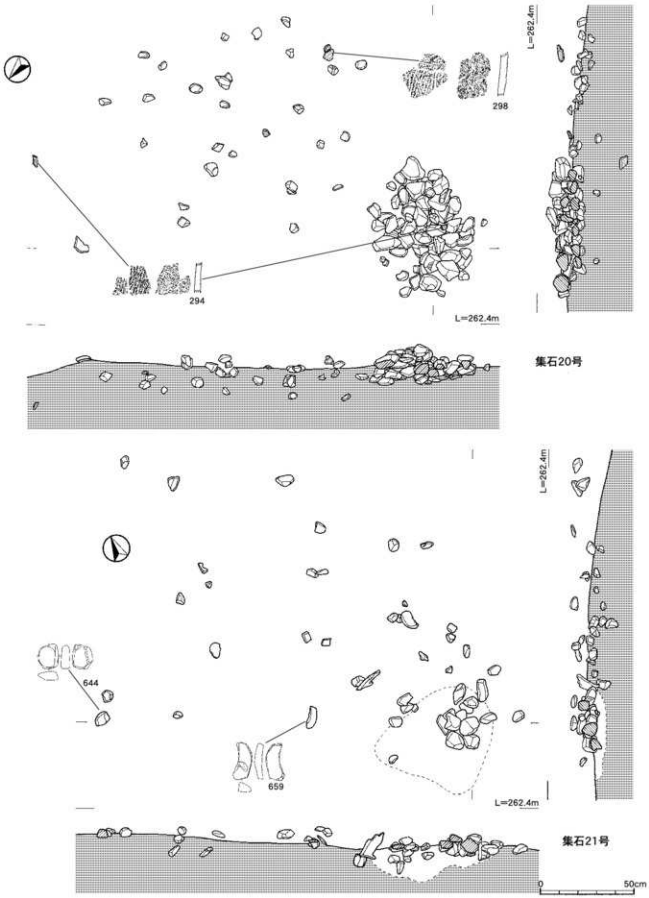
ていた。礫数は33個で，まとまりは見られないが火熱を受けた５～10㎝の破砕礫である。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石24号（第91，93図）

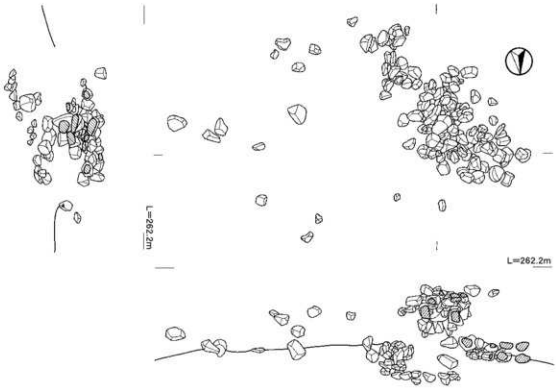
Ｈ－51区，　層で検出された。163　128㎝の円形をした範囲内に，中心が凹むような形で礫が隙間無く敷き詰められていた。下部には深さ約40㎝，断面形がボウル状をした掘り込みが認められ，底面近くに多くの炭化物を含む黒色土が堆積していた。礫数は203個で，大きさ径10～15㎝，重量500ｇ～１㎏の角礫が中心である。石材は安山岩が半数以上を占め，火熱を受けた痕跡が全てに見



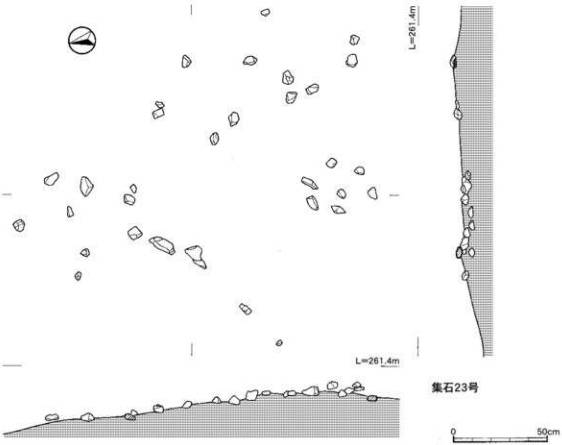
第87図　中央部　縄文時代早期　集石15～18号配置図



第88図　中央部　縄文時代早期　集石20，21号

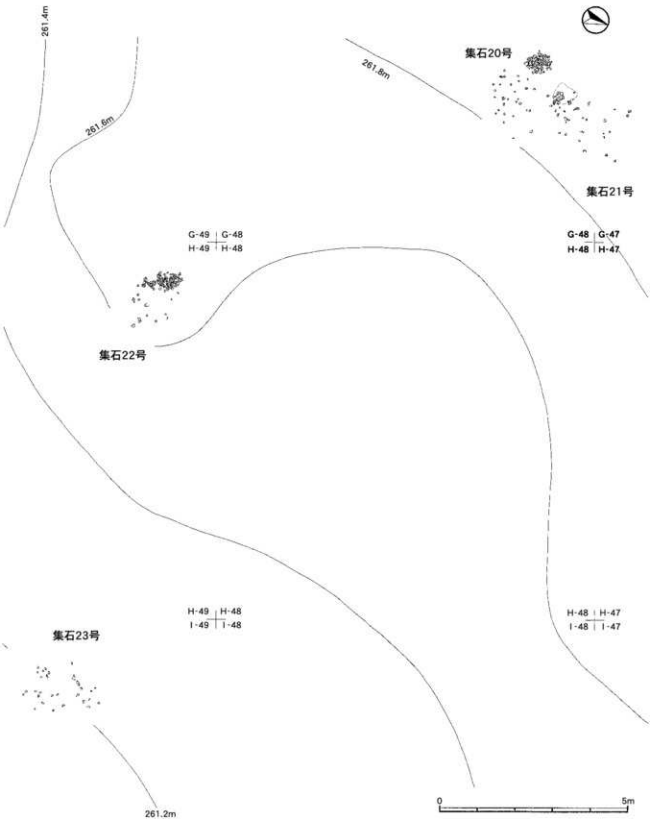


集石22号



集石23号

第89図　中央部　縄文時代早期　集石22，23号



第90図　中央部　縄文時代早期　集石20～23号配置図

られ赤化したものも多い。下位に進むにつれてやや小礫が多くなり，火熱や赤化が激しい。敷き詰められた礫は厚さ25～30㎝ほどに及ぶが，掘り込みの底面付近には見られず，集石として使用される前に掘られた火に関係する土坑で，上部の集石と時間差があるのではないかと想像される。

掘り込み内炭化物の放射性炭素年代測定を行い，8 ,745　35yrBPという測定結果が出ている。

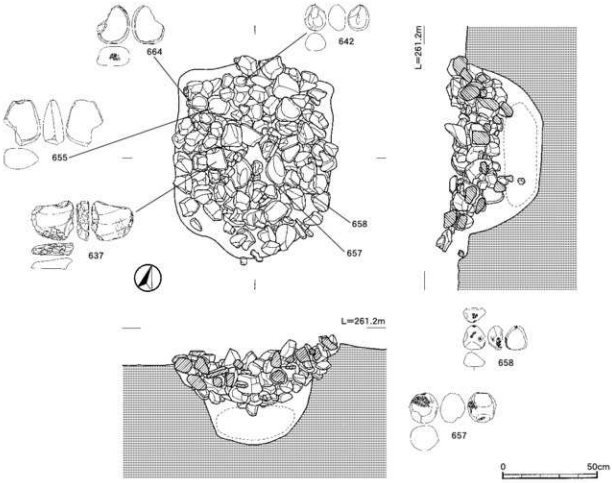
集石を構成する礫には，石器の転用品が16点と多く含まれていた。16点中６点について図化した。（第163図637，第164図642，第165図655，第166図657，658，664）

集石25号（第92，93図）

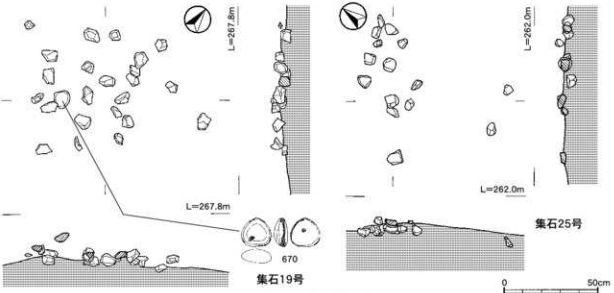
Ｈ－52区，24号の南東側約10ｍの　層上面で検出された。110　105㎝の範囲内に，細長い礫のあつまりが見られた。礫総数は18個と少なく，石材はほとんどが大きさ径10㎝前後，重量200ｇ程度の安山岩である。炭化物や掘り込みは認められないが，火熱を受けたと見られる破砕がある。

石器集積遺構（第95図）

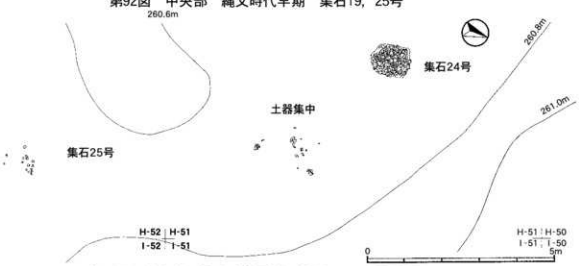
Ｈ－52区の　層上面で砂岩質の磨石・敲石が２個，花崗岩の石皿１個が隣接して出土した。下位に明確な掘り込みは見られなかったが，周辺からの遺物や礫等の出土は少なく，出土状況から人為的に置かれたものではないかと考えられる。（遺物については「第５節出土石器」第167図671，672，第169図683参照）



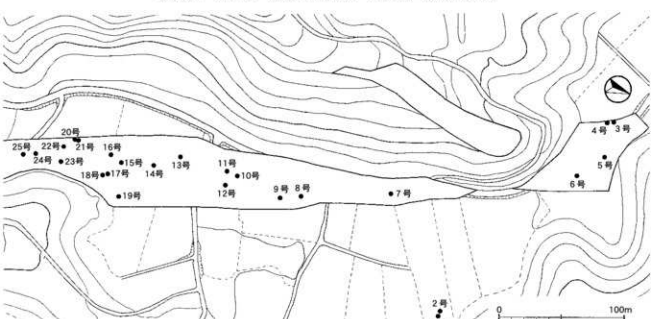
第91図　中央部　縄文時代早期　集石24号



第92図　中央部　縄文時代早期　集石19，25号



第93図　中央部　縄文時代早期　集石24，25号配置図



第94図　狩俣遺跡　縄文時代早期　集石配置図

第10表　狩俣遺跡　集石集計表

名前	検出地点（グリッド）	集石範囲(cm)（長径×短径）	炭化物範囲(cm)（長径×短径）	掘込規模(cm)（長径×短径×深さ）	礫総数（個）	石材（個）							
						砂岩	頁岩	泥岩	花崗岩	安山岩	玄武岩	凝灰岩	その他
1号	23T	92　42	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-
2号	23T	35　26	-	-	15	-	-	-	-	-	-	-	-
3号	F-5区	300　98	-	-	24	-	-	-	1	13	7	3	-
4号	F-6区	300　134	-	-	14	1	-	-	2	8	3	-	-
5号	I-6区	100　80	-	-	8	-	-	-	2	6	-	-	-
6号	J-8区	49　49	-	-	5	-	-	-	2	3	-	-	-
7号	L-23区	73　63	-	-	10	1	-	-	1	8	-	-	-
8号	L-30区	90　60	-	-	14	-	-	-	4	10	-	-	-
9号	L-31，32区	200　200	74　67	-	70	3	-	-	11	53	1	-	2
10号	J-35区	281　195	-	70　65　40	68	7	5	1	12	36	4	3	-
11号	J-36区	160　120	116　65	-	19	1	5	-	2	6	4	1	-
12号	K-36区	200　120	-	-	68	2	4	2	13	36	5	6	-
13号	H-39，40区	142　116	-	-	29	-	9	-	10	5	5	-	-
14号	I-42区	154　116	-	-	36	5	6	-	2	18	3	2	-
15号	I-44区	254　204	86　80	70　65　39	67	4	3	-	9	41	5	5	-
16号	H-45区	230　230	-	-	24	4	-	-	-	10	2	8	-
17号	J-45区	208　141	-	-	27	1	2	-	5	19	-	-	-
18号	J-46区	260　160	60　52	-	46	2	7	-	5	26	5	-	1
19号	L-44区	150　150	-	-	44	2	2	-	16	23	1	-	-
20号	G-48区	258　220	-	-	94	7	3	4	16	58	6	-	-
21号	G-48区	243　185	65　53	-	50	5	1	-	8	35	-	-	1
22号	H-49区	248　221	-	-	111	4	5	1	11	75	9	6	-
23号	I-49区	214　165	-	-	33	3	1	-	2	20	6	1	-
24号	H-51区	163　128	105　86	85　60　40	203	3	26	1	22	143	5	3	-
25号	H-52区	110　105	-	-	18	2	-	-	-	10	4	2	-

第11表　狩俣遺跡　集石重量組成表

（単位：ｇ）

名前	～50	～100	～150	～200	～250	～300	～350	～400	～500	～700	～1000	1001～	合計
1号	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2号	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3号	7	4	8	3	1	-	1	-	-	-	-	-	24
4号	-	1	6	2	3	-	1	1	-	-	-	-	14
5号	1	-	1	-	-	1	1	1	3	-	-	-	8
6号	-	-	-	-	-	2	2	-	1	-	-	-	5
7号	-	-	-	1	1	-	2	-	3	2	1	-	10
8号	1	-	1	1	-	-	1	1	2	7	-	-	14
9号	-	-	3	3	2	2	7	5	14	19	5	10	70
10号	4	2	2	3	6	3	1	1	5	13	14	14	68
11号	5	5	2	2	2	2	-	-	1	-	-	-	19
12号	10	11	16	5	14	2	1	5	2	2	-	-	68
13号	7	8	1	2	2	3	-	-	4	-	2	-	29
14号	11	15	5	5	-	-	-	-	-	-	-	-	36
15号	4	12	12	2	10	6	2	3	4	4	8	-	67
16号	3	3	4	4	4	3	2	-	-	1	-	-	24
17号	2	9	11	1	2	1	-	-	1	-	-	-	27
18号	7	13	11	9	3	2	-	-	1	-	-	-	46
19号	2	2	5	9	8	2	4	3	5	1	2	1	44
20号	9	12	17	12	10	9	7	3	4	7	3	1	94
21号	6	10	12	2	8	4	1	-	3	2	2	-	50
22号	1	4	21	11	17	8	13	10	10	10	5	1	111
23号	1	7	11	8	1	-	3	2	-	-	-	-	33
24号	19	4	11	12	18	14	7	12	24	31	24	27	203
25号	5	1	2	3	3	1	1	1	1	-	-	-	18

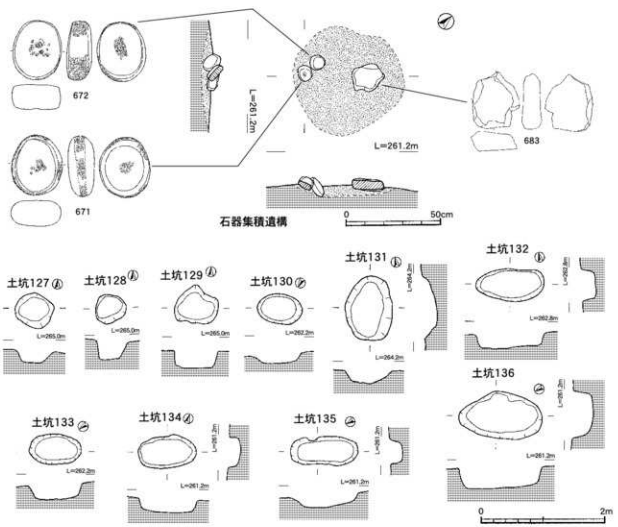
⑵　土坑（第95，100，101図）

縄文時代早期の土坑は，土坑127〜136の10基検出された。いずれも　層上面で検出され，埋土は　層の黒色土である。土坑127〜129は平面径50㎝前後の円形（　類），土坑130〜136は平面形が楕円形（　類）を呈するものに分けられる。検出された土坑は，２，３基単位で台地の縁辺部に位置する傾向がある。

土坑127〜129は　類の土坑であり，平面径の平均が73　65㎝のほぼ円形を呈する。検出面からの深さは比較的浅く，深さ19〜32㎝である。断面形状は，逆台形（土坑127），Ｕ字型（土坑128，129）を呈する。埋土中より遺物は出土しなかった。土坑130〜136は　類の土坑であり，平面径の平均が101　56㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは11〜33㎝である。断面形状は，逆台形（土坑130，131），Ｕ字型（土坑132〜134，136），皿形（土坑135），を呈する。埋土は　層の黒色土であり，埋土中より遺物や炭化物は出土しなかった。

土坑133〜135（第95，101図）

Ｈ－50区の　層上面で検出された。３基の土坑は非常に近接しており，いずれも長径95㎝，短径49㎝程度の楕円形を呈する。検出面からの深さは約22㎝で底面に平坦面を持つ。底面より小ピットは確認されないが，台地の縁辺部に当たる場所に掘られていることから落とし穴の可能性もある。



第95図　中央部　縄文時代早期　石器集積遺構，土坑

2　縄文時代中～晩期（第96～101図）

縄文時代中～晩期の遺構は，落とし穴２基，焼土跡２，土坑13基である。

落とし穴はＫ－24～27区で２基検出されており，いずれも西側の谷へと向かう台地の縁辺部に当たる。２トレンチで検出された１～３号とは谷を挟んで約200ｍほど離れているが，同じ西側の谷へ向かう台地上にあり立地条件が似ている。

⑴　落とし穴（第96，97，100図）

縄文時代中～晩期の落とし穴は２基である。どちらも御池火山灰を多く含むものである。

落とし穴４号（第96，100図）

西側の谷へと向かう台地の縁辺部に当たるＫ－27区で検出された。　層下面では御池火山灰の集中が一部見られたが，中央に大きな樹痕による撹乱があり明確な形状を確定することが出来なかった。　層上面まで掘り下げ，平面形を明確にすることができた。平面形は，中央に撹乱があり不明な部分も残るが，略南北方向に主軸を持つ長方形を呈している。長径　短径は146　57㎝，深さは検出面から24㎝である。しかし，　層下面から検出面まで80㎝近くあることから，深さは１ｍ前後あったと推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，床面には平坦面を有している。撹乱を受けていない床面から小ピットを13検出した。小ピットが集中しておらず，10～20㎝間隔で床面全体に配置されていた。小ピットの形状は，平均して5．9　4．9㎝の円形を呈し，深さ約22㎝で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。落とし穴の埋土は，御池火山灰を多く含む黄褐色土が主体であり，壁面の崩落と思われる　～　層が混じり込んでいる。なお，底面の小ピット長径，短径，深さについては，第12表にまとめた。

落とし穴５号（第97，100図）

落とし穴４号から北側方向に約25ｍの　層上面で検出された。平面形は，略東西方向に主軸を持つ方形に近い楕円形を呈している。長径　短径は125　52㎝，深さは検出面から65㎝である。４号と同様に　層下面から検出面まで１ｍ近いことから，実際の深さは１ｍ70㎝を越えると推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，床面には広めの平坦面を持つ。床面に小ピットは確認されなかった。埋土は御池火山灰を多く含む黄褐色土が主体であり，わずかに赤褐色土が部分的に混ざる。床面付近には，黒色土が黄褐色土と混ざり合った状態が見られた。

⑵　焼土跡（第98，101図）

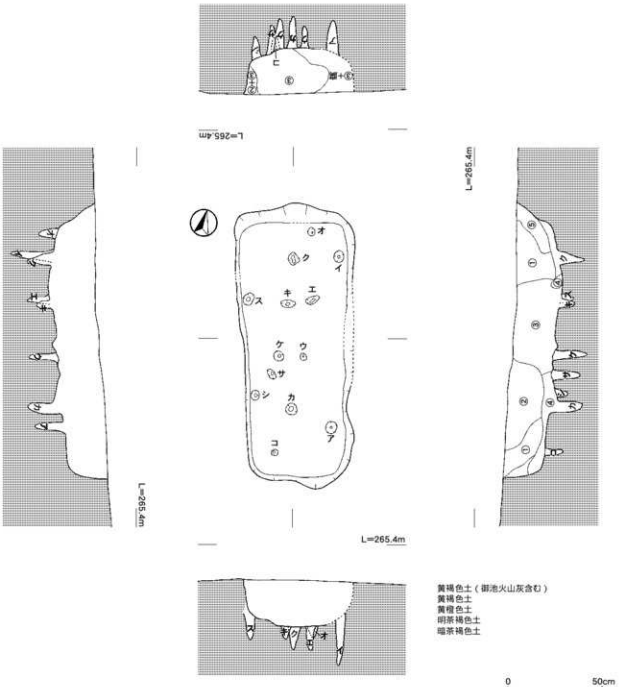
縄文時代中～晩期の焼土跡は２基である。２基は近接しており，どちらも赤橙色を呈している。

焼土１（第98図）

Ⅰ－46区，　層で検出された。浅い掘り込みの平面形は，長径　短径が156　78㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約10㎝である。床面に平坦面は見られず，緩やかな曲線を描きながら立ち上がっている。埋土に炭化物は確認されず，　ｂ層が火熱を受け赤化したと思われる明赤褐色土が主体であり，１㎝前後の赤橙色ブロックも含まれていた。底面の南半分には床面が火熱により変色したと思われる赤化が見られるため，廃棄後の凹地に捨てられた可能性がある。土器片（146図485）が出土しているが，廃棄後捨てられた可能性があるため縄文時代中～晩期の遺構として取り扱った。

焼土２（第98図）

Ⅰ－46区，焼土１の南側に隣接して検出された。浅い掘り込みの平面形は，長径　短径が78　64

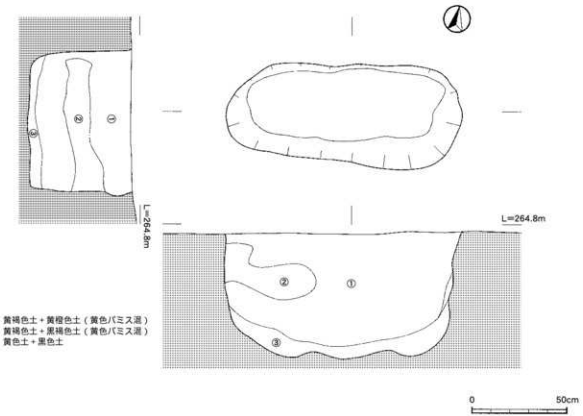


第96図　中央部　縄文時代中期　落とし穴４号

第12表　中央部　落とし穴４号小ピット計測表

小ピット	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
ア	6.8	6.0	16.0
イ	6.9	5.0	25.0
ウ	4.0	3.8	16.0
エ	7.9	4.0	24.5
オ	5.0	4.9	21.0
カ	6.2	6.0	22.5
キ	8.0	4.2	24.5

小ピット	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
ク	7.0	5.7	25.0
ケ	5.9	5.0	25.5
コ	4.2	4.0	21.0
サ	5.9	5.0	25.0
シ	6.2	5.0	21.0
ス	7.0	5.2	20.0



第97図　中央部　縄文時代中期　落とし穴５号

㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約５㎝である。床面に平坦面を持ち，断面が皿状を呈している。埋土は　ｂ層が火熱を受け赤化したと思われる明赤褐色土であり硬化していた。底面には火熱により変色が見られる。焼土内より遺物は出土していないが，焼土跡１との距離が近く特徴も類似することから，ほぼ同時期のものと判断した。なお，焼土跡１，２の下位より住居跡は検出されていないので，屋外炉として使用された可能性も考えられる。

⑶　土坑（第99～101図）

縄文時代中～晩期の土坑は，土坑137～149の13基である。いずれも　～　層上面で検出され，埋土は　層の御池火山灰を含む黄褐色土または暗褐色土である。土坑内に遺物は見られなかったが，黄色パミスを多く含むものが多い。Ｋ，Ｌ－25～27区にやや集中が見られ，東側へ落ち込んでいく斜面へと続く台地の縁辺部を，取り囲むように検出された。落とし穴4，5号の近くに集中していることから，何らかの関連も推定される。土坑137～147は，平面径が小さいほぼ円形を呈するもの（　類）であり，さらに50㎝以下（土坑137～143）と50㎝～１ｍ（土坑144～146），深さの深いもの（土坑147）に分けられる。平均は34　31㎝，深さ25㎝である。土坑148は１ｍ前後の円形を呈するもの（　類），土坑149は楕円形を呈するもの（　類）に分けられる。それぞれの形状は，土坑148が平面径107　91㎝，深さ26㎝，土坑149が140　45㎝，深さ22㎝である。断面形状は，土坑141がレンズ状である以外はＵ字型をしたものが多く見られる。

土坑141（第99図）

Ｋ－25区，　層上面で検出された。平面形は35　29㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは11㎝である。断面形状はレンズ状を呈しており，砂質が強く柔らかい暗褐色土の上に硬化した黄色パ

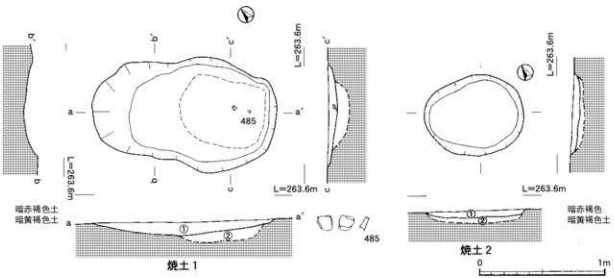
ミスを含む黄色土が見られた。検出面はまだ上位にあったと推定されるが，火熱を受けた痕跡が認められないため，黄色パミスが硬化した理由については不明である。

土坑146（第99図）

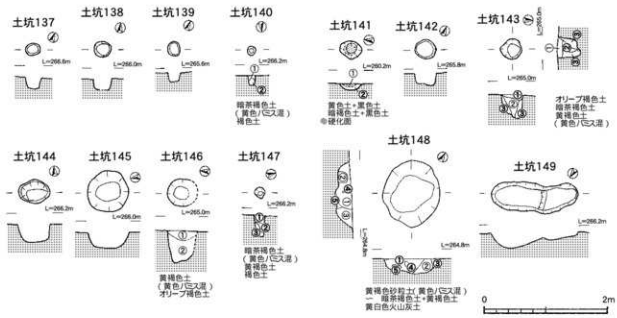
Ｋ－31区で検出された。平面形は48　44㎝のほぼ円形を呈していると思われるが，掘立柱建物跡２号のＰ９によって断ち切られており，南側半分の形状は不明である。深さは50㎝である。

土坑148（第99図）

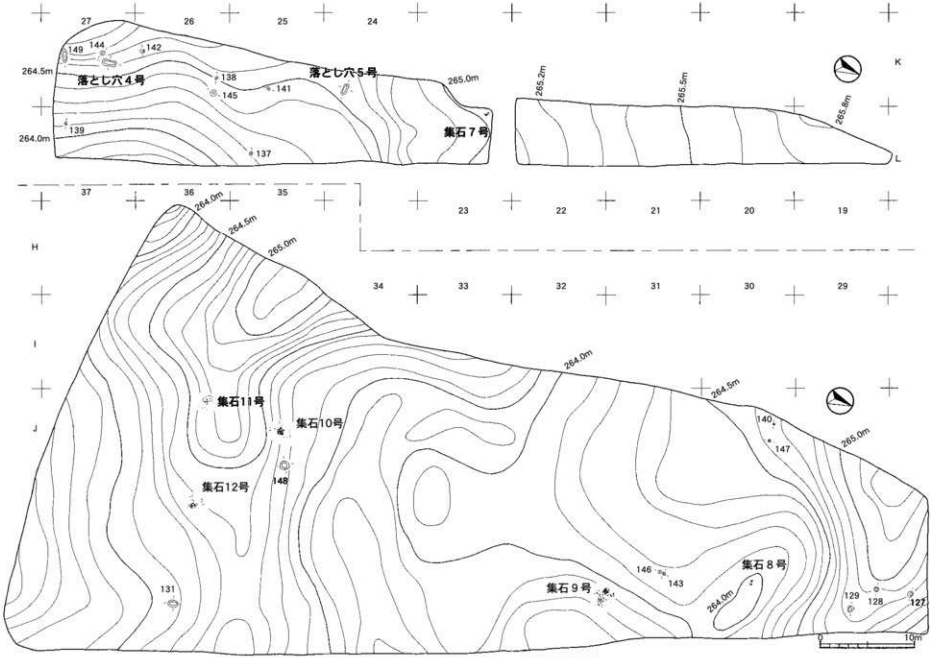
Ｊ－35区，　層上面で検出された。平面形は107　91㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは26㎝である。断面形状は逆台形を呈しており，底面に平坦面を有する。埋土は，黄褐色砂粒土にやや大粒な黄色パミスが混じり，炭化物もわずかに確認された。御池火山灰が埋土の主体であるため掘り込み面はかなり上位と考えられる。薩摩火山灰層上面まで掘られていることから，少なくとも１ｍ前後の深さがあったと想定される。



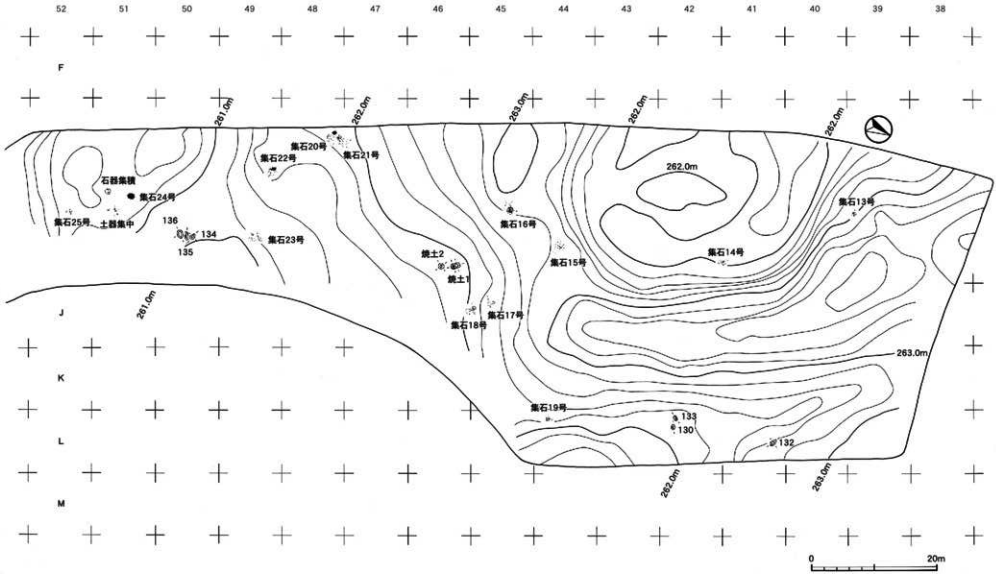
第98図　中央部　縄文時代中～晩期　焼土1，2



第99図　中央部　縄文時代中～晩期　土坑



第100図　中央部　縄文時代　遺構配置図(1)



第101図　中央部　縄文時代　遺構配置図(2)

3　古代～中世（第102～107，121，122図）

古代～中世の遺構は，　層上面で掘立柱建物跡が３棟，溝状遺構が４条，土坑11基が検出された。埋土は　ａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく中世末の可能性を残すことから，古代～中世の遺構として取り扱った。

17～25区，37～44区については，現代の大規模な天地返しにより地表から　ｂ層（桜島火山灰Ｐ11）までの遺物包含層は概ね撹乱を受けていたので，古代～中世の遺構は検出されなかった。なお，遺構の全体配置については，第121，122図に示した。

⑴　掘立柱建物跡（第102～104，121図）

古代～中世の掘立柱建物跡は，Ｊ，Ｋ－30，31区　層上面で３棟検出された。

掘立柱建物跡１号（第102，121図）

Ｋ－31区，　層上面にて検出された。建物の規模はほぼ２間　３間で，11個の柱状ピットからなる。西側のＰ８，９の間が極端に狭いが，建物の構造上必要な柱であったと思われる。主軸は略南北方向である。桁行の平均は約6.1m，梁行の平均は約4.3mであり，やや北東側が広がった長方形を呈しており，床面積はおよそ29.4㎡である。柱間寸法の平均は桁行柱間が1.8m，梁行柱間が2.1mであるが，1.5～3.1mまでとばらつきが見られる。周辺に散在した炭化物の粒が見られたが，建物とも関係は検証できていない。

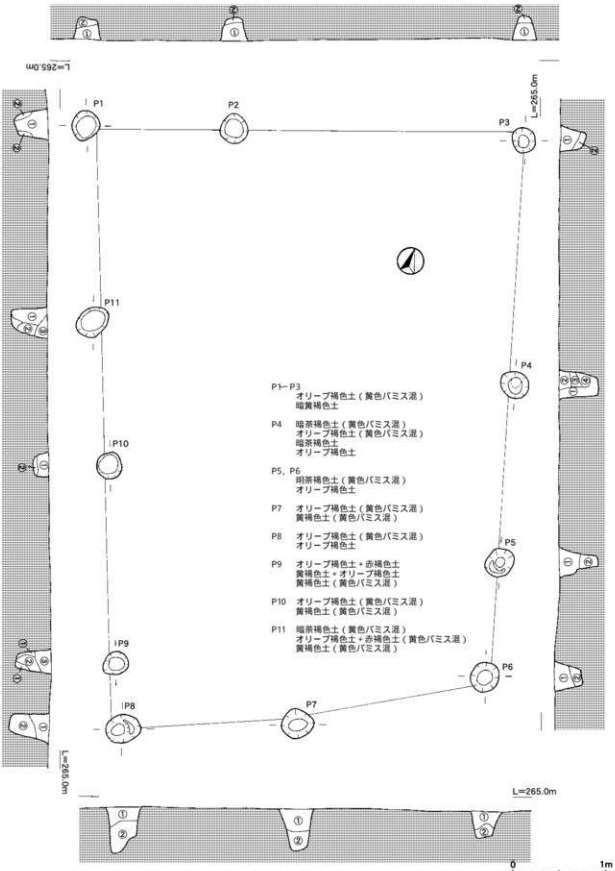
ピットはほぼ円形を呈し，平均して径32.4　26.4㎝，深さ35.5㎝であり，ほぼ同規模であるが，Ｐ10が比較的浅い。ピット中の埋土は，古代の遺物包含層である　ｂ層の暗褐色土であり，上位に黄色パミスや炭化物がわずかに混ざるものがあり，下位には黄褐色土及び壁面の崩落で混ざったと思われる赤褐色土の小ブロックを含むものが多い。埋土中より出土遺物は確認されていない。

柱の径については，柱の規格を推測すると柱穴ピットの底径から，やや小さめのＰ５～７のピット底径が15～20㎝であり，柱は底径より小さいと判断すると10㎝前後のものではないかと推測される。

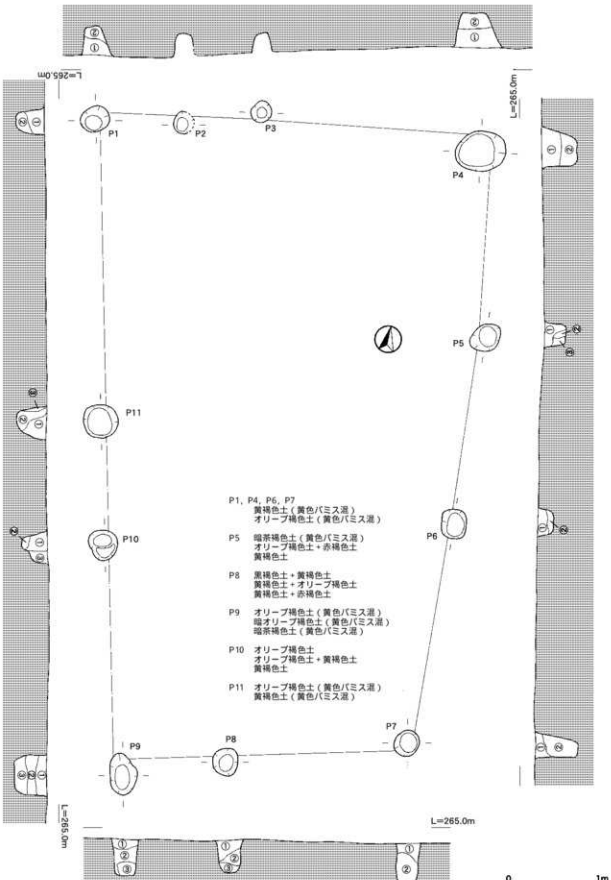
掘立柱建物跡２号（第103，121図）

Ｋ－31区で，掘立柱建物跡１号と重なるようにして検出された。検出面は同じく　層上面である。建物の規模は概ね２間　３間であり11個の球状ピットからなる。主軸は略南北方向である。桁行の平均は約6.7m，梁行の平均は約3.7mであり，やや北側の広がった長方形を呈し，床面積はおよそ28.5㎡である。柱間寸法の平均は桁行柱間が2.2m，梁行柱間が1.4mであり，一定間隔ではない。特に北側のＰ１～３の間隔が89㎝と狭く，Ｐ３－４の間隔は極端に広い。また，ピット径もＰ１の26㎝に比べてＰ２，３は約22㎝と小さい。建物内に焼土跡，炭化物は見られなかった。

ピットは２種類に分けられ，四隅がやや大きめのものと小さめのものに分けられる。大きめのものは深く，平均して径39.31㎝，深さ37㎝であり，その他が小さめで平均して径26.9　27㎝，深さ26.9㎝である。平面形はほぼ円形を呈しており，上部構造に合わせた大きさや深さではないかと考えられる。ピット中の埋土は，　ｂ層の暗褐色土が主体であり，全体に黄色パミスや炭化物がわずかに混ざるものがあり，下位には壁面の崩落で混ざったと思われる赤褐色土の小ブロックを含むものも見られた。埋土中より遺物は確認されなかった。



第102図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡１号



第103図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡２号

第13表　中央部　掘立柱建物跡１，２号計測表

掘立柱建物跡１号

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	ピットNo.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
南北	P1 - P8	P1 - P3	P1 - P11	P1 - P2	長径(cm)	32	32	26	38	30
N-24°-W	6.40	4.60	2.08	1.54	短径(cm)	30	30	24	28	28
	P2 - P7	P4 - P10	P10 - P11	P2 - P3	深さ(cm)	34	26	26	42	40
	6.04	4.28	1.54	3.06	ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
	P3 - P6	P6 - P8	P9 - P10	P7 - P8	長径(cm)	32	34	38	28	28
	5.72	3.92	2.10	1.92	短径(cm)	28	28	16	24	26
			P8 - P9	P6 - P7	深さ(cm)	40	40	48	38	18
			0.72	2.02						
			P3 - P4		ピットNo.	P11				
			2.48							
			P4 - P5		長径(cm)	38				
			1.86		短径(cm)	28				
			P5 - P6		深さ(cm)	38				
			1.26							

掘立柱建物跡２号

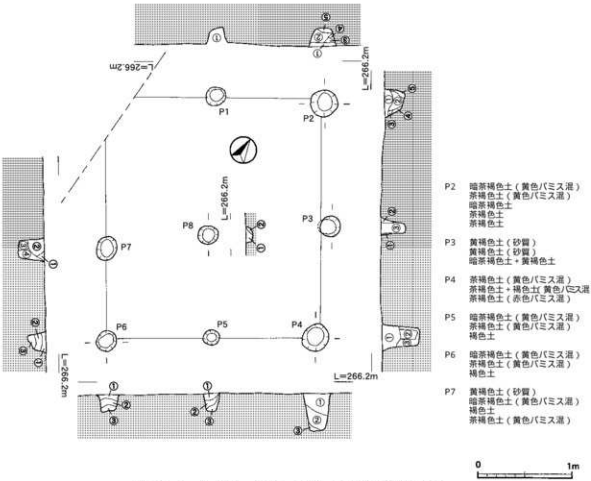
主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	ピットNo.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
南北	P1 - P9	P1 - P4	P1 - P11	P1 - P2	長径(cm)	32	34	24	52	36
N-19°-W	6.96	4.10	3.14	92	短径(cm)	26	22	22	42	28
	P3 - P8	P5 - P11	P10 - P11	P2 - P3	深さ(cm)	30	24	20	36	24
	6.78	3.82	1.30	86	ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
	P4 - P7	P7 - P9	P9 - P10	P3 - P4	長径(cm)	32	28	30	44	32
	6.34	3.06	2.44	2.36	短径(cm)	26	26	26	30	28
			P4 - P5	P8 - P9	深さ(cm)	16	44	46	38	28
			1.96	1.12						
			P5 - P6	P7 - P8	ピットNo.	P11				
			2.04	1.96						
			P6 - P7		長径(cm)	38				
			2.38		短径(cm)	36				
					深さ(cm)	30				

掘立柱建物跡１号と２号は建物規模や主軸方向，ピット内埋土が類似しており立地場所もほぼ重なるなど共通点が多いことから，建て替えられたものと想定される。しかし，建て替えによる時間差及びその前後関係は明らかでない。

掘立柱建物跡３号（第104，121図）

Ｊ-30区，　層上面にて検出された。建物の規模は２間　２間であり，8個のピットからなる。主軸は略北西-南東方向であると思われるが，桁行平均は約2.5m，梁行の平均は約2.3mとほぼ正方形を呈した，床面積はおよそ28.5㎡の建物であり，略北東-南西方向の可能性もある。柱間寸法の平均は，桁行柱間が2.2m，梁行柱間が3.7mとほぼ等間隔であるが，わずかに北西側が広い。建物の中心にも柱があり，ほぼ等間隔で規則的に柱が配置された総柱の建物であることから，東側の調査区外にもう１個のピットが存在すると思われる。建物内に焼土跡は見られなかった。しかし，わずかではあるが，周辺に散在した炭化物の粒が見られた。

ピットはほぼ円形を呈し，平均して径34.7-28.4㎝，深さ30.5㎝であり，ほぼ同規模である。削



第104図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡３号

第14表　中央部　掘立柱建物跡３号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北	P0 - P6	P0 - P2	P0 - P7	P0 - P1
N-34.5°-W	2.56	2.32	1.56	1.18
	P1 - P5	P3 - P7	P6 - P7	P1 - P2
	2.52	2.28	1.00	1.16
	P2 - P4	P4 - P6	P1 - P8	P7 - P8
	2.50	2.24	1.48	1.10
			P5 - P8	P3 - P8
			1.10	1.28
			P2 - P3	P5 - P6
			1.36	1.14
			P3 - P4	P4 - P5
			1.18	1.12

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
長径(cm)	22	30	24	30	18
短径(cm)	20	28	22	28	16
深さ(cm)	16	22	26	40	18

ピットNo.	P6	P7	P8
長径(cm)	24	24	22
短径(cm)	22	20	18
深さ(cm)	20	26	6

平率が高い北側のピットがやや浅めである。柱の径は，残存部分がなく不明であるが，10cm前後ではないかと推測される。ピット中の埋土は，　ｂ層の暗褐色土が主体であり，下位に黄褐色土と褐色土が混ざり，炭化物がわずかに混ざるものが多い。

⑵　溝状遺構（第105，106，121，122図）

古代～中世の溝状遺構は４条検出された。部分的に上位削平による消失も見られる。

溝状遺構14（第105，121図）

Ｋ－25，26区で略南北方向に検出された。埋土は黒褐色土が主体であり，黄色パミスもわずかに見られた。検出された長さは6.8mであり，わずかに蛇行しながら天地返しによる撹乱を受けたＫ－24区方向へ続いている。検出された幅は18～100㎝，深さ約20㎝であり，断面形態は南側がＶ字状，北側が逆台形を呈している。Ｋ－26区側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。

溝状遺構15（第105，121図）

Ｋ－26，27区，溝状遺構14の南側で略南北方向に検出された。埋土は暗黄色土が主体である。検出された長さは4.6m，幅は20～70㎝，深さ約13㎝であり，北側が幅広である。断面形態は南側が方形，北側が皿状を呈しており，Ｋ－27区側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。

溝状遺構14と約5.3m離れているが，傾斜方向から同じものであった可能性がある。

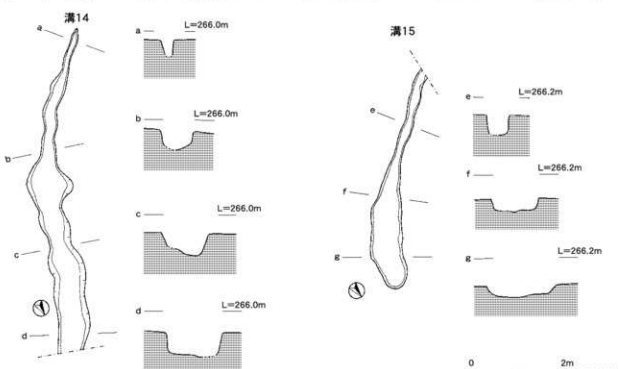
溝状遺構16（第106，122図）

Ｉ－48区で，北西－南東方向に検出された。途中2.2mは撹乱を受け消失しているが，検出された長さは5.2m，幅は20～35㎝，深さ約7.6㎝であり，地形に沿ってＨ－47区側から東側へ向かって傾斜している。埋土は暗褐色土が主体であり，暗黄色土や炭化物も混ざる。断面形態は西側が皿状，東側が逆台形を呈しており，下流側は傾斜が急になっている。

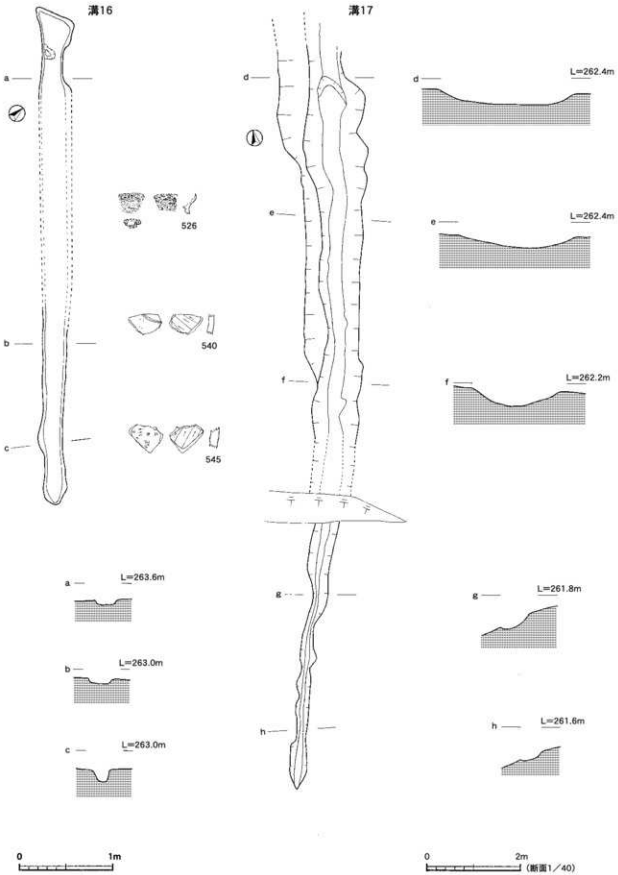
埋土中より土器片が３点出土しており，いずれも土師器の甕の一部であり図化した。（第148図526，540，545）

溝状遺構17（第106，122図）

Ｇ～Ｉ－50～52区で略南北方向に検出された。埋土は暗褐色土が主体である。途中２mは削平を受け消失しているが，検出された長さは15.7m，幅は20～180㎝，深さ約11.2㎝であるが，Ｇ－52区側は上位が削平により消失し底面付近のみである。断面形態はレンズ状を呈しており，南側へ向



第105図　中央部　古代～中世　溝状遺構14，15



第106図　中央部　古代～中世　溝状遺構16，17

かうに従い，やや狭く深くなる。Ⅰ - 50区側から南側へ向かって緩やかに傾斜している。

⑶　土坑（第107，121，122図）

古代～中世の土坑は，土坑150～160の11基である。いずれも　b～　層上面で検出され，埋土は　a層の黒色土または暗褐色土である。

土坑150～155は，平面形が円形に近い小型のもの（　類）で，浅めのもの（土坑150～154）と深めのもの（土坑155）に分かれる。土坑156，157は平面形がやや大型を呈するもの（　類）である。土坑158，159は平面形が細長い楕円形を呈するもの（　類）で，深さは約10㎝と浅く，埋土は黒色土の単一層である。土坑160は平面形が不定型なもの（　類）である。底面に小ピットが１個確認された。

土坑150（第107図）

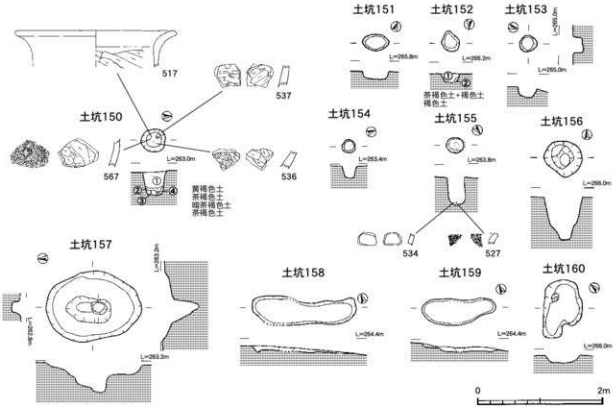
Ⅰ - 47区，　層上面で検出され，平面形は40　37㎝，深さは38㎝のほぼ円形を呈す。炭化物を含む暗黄色土の埋土中より土器片が４点出土した。（第147図517，第148図536，537，第150図567）

土坑155（第107図）

Ⅰ - 48区，　層上面で検出され，平面形は28　26㎝のほぼ円形を呈し，深さは45㎝のＵ字形である。暗褐色土に黄褐色土が混ざる埋土中より土器片が２点出土した。（第148図527，534）

土坑157（第107図）

Ｈ - 48区　層上面で検出された。平面形は153　113㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約59㎝であるが，中央部に小ピットが確認された。小ピットは平面形24　20㎝，底面からの深さは約43㎝である。北側が崩れていることから，柱の抜き取り痕の可能性がある。



第107図　中央部　古代～中世　土坑

4　中世～近世（第108～123図）

中世～近世の遺構は，　～　層で古道が１条，溝状遺構９条，畝状遺構が８群，土坑52基が検出された。埋土は　～　ａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく，部分的に文明ボラと安永ボラが混在するなど明確に分けられない遺構もあることから，中世～近世の遺構として取り扱った。

17～25区，37～44区については，現代の大規模な天地返しにより地表から　ｂ層（桜島火山灰Ｐ11）までの遺物包含層は概ね撹乱を受けていたので，中世～近世の遺構は検出されなかった。

⑴　古道（第108，122図）

中世～近世の古道は，台地東端の天地返しの影響を受けなかった部分で１条検出された。

古道11（第108，122図）

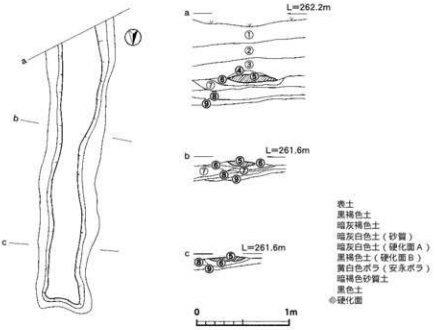
Ｌ－45区，　ｂ層に当たる暗灰褐色土下面にて検出された。幅30㎝弱の硬化面が略南北方向へ直線的に延びており，北側は削平されているが，南側は調査区外の谷方向へと続いている。周辺は安永ボラが層となり良好に残っている場所であり，ボラ層が古道下へ潜り込むようにして存在することから，近世の古道であると推定される。幅は30～50㎝であり，硬化面の厚さは５～８㎝である。硬くしまった面の直上には，砂質の強い暗灰白色土が残っていた。また，硬化面の下にも硬質な褐色土があり，二時期に渡り古道として使用された可能性がある。

⑵　溝状遺構（第109～111，122，123図）

中世～近世の溝状遺構は９条検出された。畠地の境界を示すためのものも見られた。

溝状遺構18（第109，123図）

Ｃ～Ｅ－21，22区で，畝状遺構６と畝状遺構７に挟まれるようにして検出された。埋土は黒褐色砂質土が中心となるが，文明ボラの二次堆積と見られる黄色ボラも含まれる。方向は略東西方向，検出された長さは19.7mであり，Ｃ－32区方向へ直線状に延びている。検出された幅は30～70㎝，深さ約12㎝であり，断面形状は皿状を呈している。しかし，溝の先端部は緩やかに立ち上がり途中



第108図　中央部　中世～近世　古道11

で途切れる場所も確認された。溝としての機能は低く排水目的と言うよりも畝状遺構６と７の境界を示す区画溝の可能性が高く，溝状遺構として区分したが溝以外の機能も考えられる。

溝状遺構19（第109，123図）

Ｈ，Ｉ－36，37区，溝状遺構18の南側約40ｍで検出された。方向は溝状遺構18と同じ略東西方向である。検出された長さは18.5ｍ，幅22～80㎝，深さ約30.8㎝であり，直線的に延びている。断面形状はＵ字状を呈し，埋土は底面近くに細粒な黒色土が堆積している以外は，文明ボラの二次堆積と黒褐色土が主体である。溝の端部は緩やかに立ち上がり水の出口がないので，溝状遺構18と同じように排水目的と言うよりも，畝状遺構９と通路の境界を示す溝の可能性が高い。

溝状遺構20（第110，123図）

Ｌ－31区から35区へ向かって略南北方向に直線的に延び，Ｌ字状に屈曲してＭ－35区方向へ続くように検出された。検出された長さは38.6ｍ，幅は58～144㎝，東側が大きく削平されているが，深さ約49.5㎝である。ある程度の時期差を持って２段階に掘られており，当初は畝状遺構６，７と畝状遺構８の境界を分ける，深さ20㎝程度の溝であったと思われるが，その後，高低差を無くし平坦面を広げるため畝状遺構８区域を大幅に削平し，溝部分も新たに掘り込まれ再利用されたと推定される。埋土は黒色土が主体であり，白色ボラや黄褐色土の小ブロックが混じる。

溝状遺構21（第110，123図）

Ｋ，Ｌ－35区で，溝状遺構20の屈曲部に合流するようにして検出された。検出された長さは3.7ｍ，幅は約90㎝，溝状遺構20と同じように東側が大きく削平されているが，深さ約20㎝である。溝状遺構20の初期と同時期の溝と推定されるが，全体像は不明である。

溝状遺構22～24（第110，122図）

Ｌ－40～42区で，３条の溝状遺構が集中して略南北方向に検出された。３条とも形態が似ており，検出された長さは溝状遺構22が4.3ｍ，溝状遺構23が7ｍ，溝状遺構24が2.7ｍと異なるが，平均して幅は10～40㎝，深さ約5.2㎝である。埋土は黒褐色土が主体で文明ボラの二次堆積が混ざる。畝状遺構10の端部に沿って位置していることから，境界を示す溝の可能性が高い。

溝状遺構25（第111，122図）

Ｉ，Ｊ－45～49区で略南北方向に畝状遺構11を一部切るようにして検出された。検出された長さは36ｍ，幅は35～70㎝，深さ約16㎝であり，やや東側に寄りながら直線状に延びている。断面形態はボウル状を呈し，埋土は褐色土が主体で，黄色ボラや白色ボラが混在している。

埋土中より２点の遺物が出土し図化した。（第147図518，第151図587）

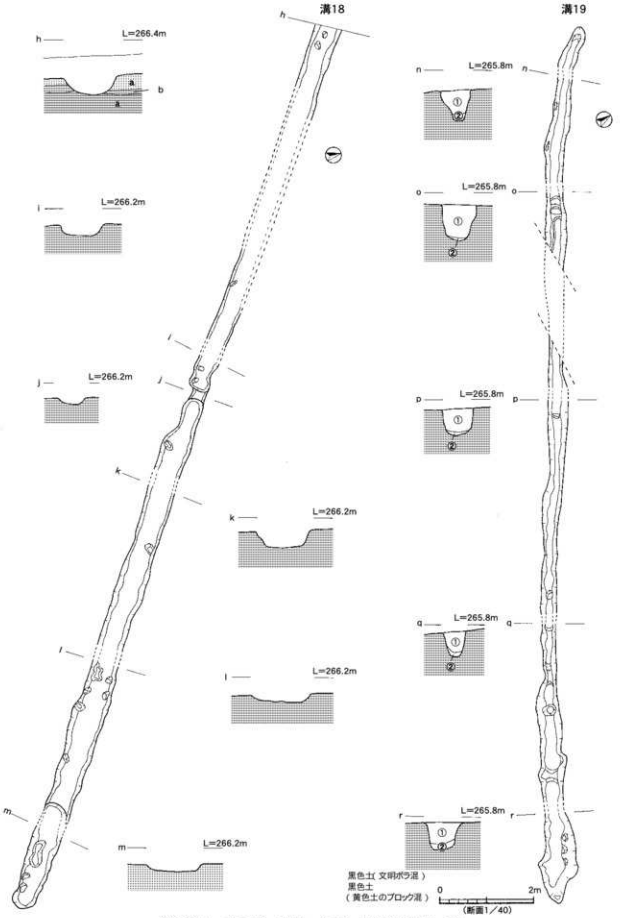
溝状遺構26（第111，122図）

Ｉ，Ｊ－45～49区で，溝状遺構25の東側に平行して検出され，一部切りながら南北方向に延びている。検出された長さは37.2ｍ，幅は42～140㎝，深さ約18㎝であり，東側の谷へ向かって崩れる部分も見られる。埋土は砂質の強いボラを多く含んだ褐色土である。溝状遺構25，26とも，前年度の調査では確認できなかった。

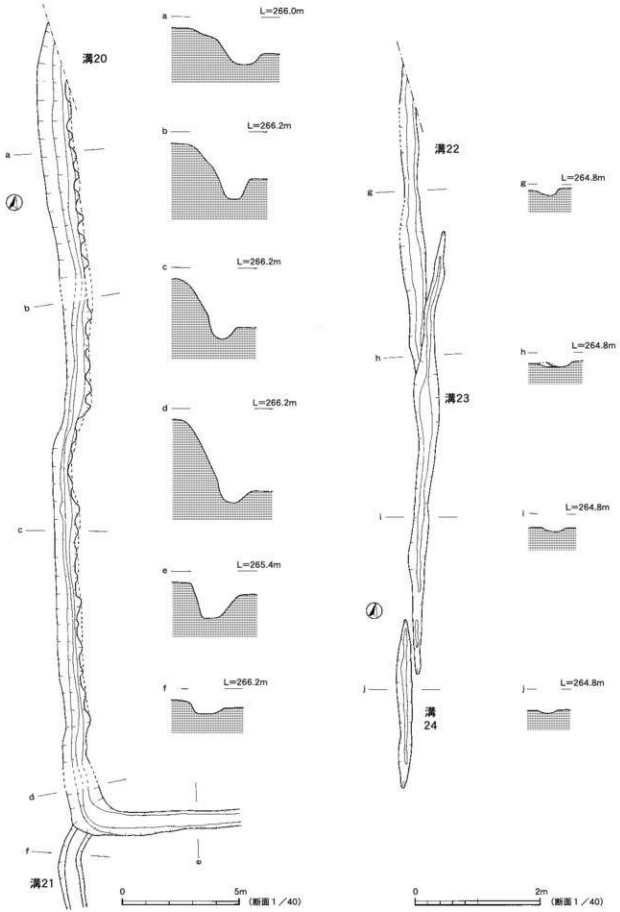
埋土中より土器片が出土し，図化した。（第148図524）

⑶　畝状遺構（第112～118，123図）

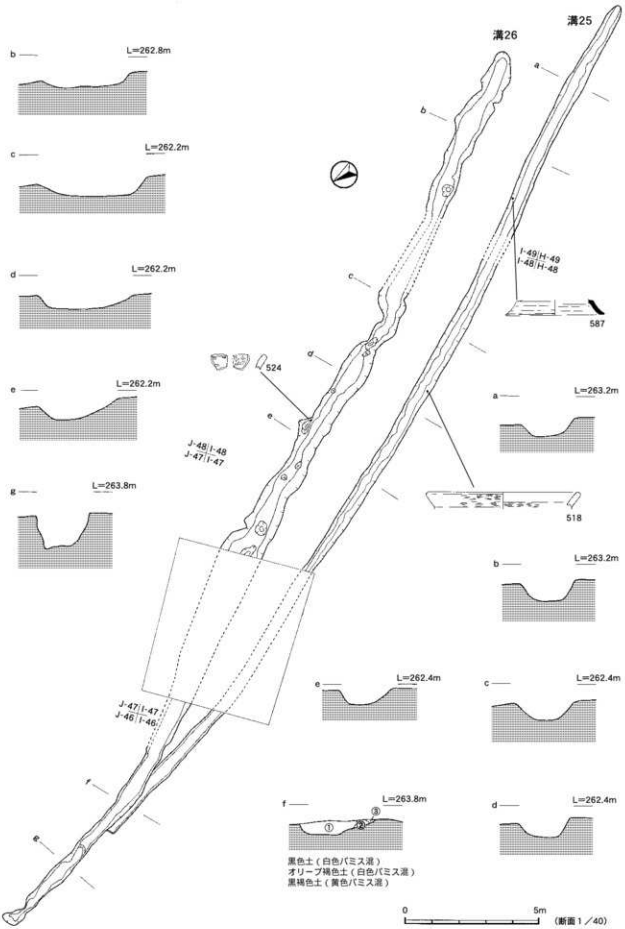
中世～近世の畝状遺構は，中央部のほぼ全域で８群検出された。



第109図　中央部　中世～近世　溝状遺構18，19



第110図　中央部　中世～近世　溝状遺構20～24



第111図　中央部　中世～近世　溝状遺構25，26

畝状遺構５（第112，123図）

Ｋ，Ｌ－25～27区の　～　層上面に，畝状遺構の一群が検出された。　層堆積後に作られたと思われるが，その後の削平状況で検出面は異なり，やや微高地となるＥ－27区側は削平の度合いが大きく，　層の黄褐色土面，標高が低くなるＦ－26，27区側は　ａの黒色土面，その中間は　ｂ層面となっている。下部のみの検出であり，畝部分については確認されなかった。検出された畝間の規模は，幅35㎝前後，深さは残存状況により10～20㎝であり断面形状がＵ字型を基本とする。底面に平坦面を持つが凸凹が多い。東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間は規則的に配列され，畝間の中心間の距離は50㎝弱とほぼ同じである。畝間の端は消失部分以外に確認されず，東西方向は調査区外へともに続き全体像は不明である。24区より北側は，大規模な天地返しにより確認されず，28区側は進入路により切られている。埋土は黒色土が主体で，底面に砂質の強い黄色パミスを大量に含んだ黒色土が多く，上位は黄色土やパミスの混在した黒褐色土が中心であり，黒色土や黄色土のブロックも全体的に混じる。掘り込まれた場所により黄色土，黒色土，パミスの割合は異なる。

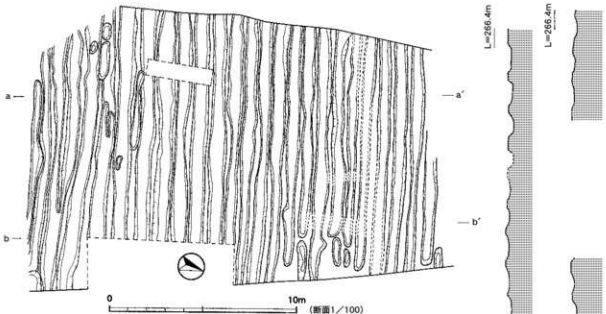
畝状遺構６（第113，123図）

Ｉ～Ｌ－28～33区の　～　層上面，畝状遺構５の南側約7.2ｍ離れて畝状遺構の１群が検出された。東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間が，約960㎡の広さに規則的に配列されている。検出面は，やや微高地となるＫ－28区側は削平が大きく　層の黄褐色土面，やや低くなる南側の32，33区側は　ａの黒色土面となっている。Ｌ－32，33区では　層が良好に残っており，　層を切るようにして検出されている。検出された畝間の規模は，幅80㎝前後，深さは残存状況により３～５㎝であり，断面形状がＵ字型を基本とする。底面の平坦面は凸凹が著しい。Ｋ，Ｌ－31，32区では，畝間の東端，西端ともに良好に残存しており，全長約14ｍの小溝状の畝間が規則的に並んでおり，畝間の中心間は約1.1ｍとほぼ同じであり，全て同規模のものと思われる。検出面が　層の部分では下部のみの検出であり，消失部分が大きい。埋土は黒色土が主体で，底面付近に砂質の強い黄色パミスを大量に含んだ黒色土が多く，上位は黄色土やパミスの混在した黒褐色土が中心である。場所により黒色土や黄色土のブロック，黄色パミスの混じり方に差がある。

畝状遺構５とは進入路で断ち切られているが，畝間の方向や形状，埋土等が共通することから，同一の畝状遺構である可能性が高い。また，南側に溝状遺構18，東側に溝状遺構20が位置し，これらの溝が他の畝状遺構との区割りとなっている可能性もある。西側については調査区外へ広がることから，その詳細は明らかでない。29～32区では，上面に安永ボラを埋土とする畝状遺構12との重なりが認められ，18世紀以前に作られたものである。

畝状遺構７（第114，123図）

Ｉ～Ｋ－33～34区の　ａ～　ｂ層にて，溝状遺構18を挟んだ溝状遺構６の南側で畝状遺構の１群が検出された。また，東側は溝状遺構20を挟んで畝状遺構９とレベル差を持って隣り合う。方向は略南北方向へ規則的に配列され，溝状遺構20と平行に位置している。畝間の規模は幅30㎝前後，深さ約25㎝であり，底面に凸凹が多い平坦面を持つ。畝間の断面形状はＵ字型を基本とするが，片方が真っ直ぐに立ち上がり，もう片方は膨らみを持ちながら緩やかに立ち上がるものが多く見られる。上位は削平され底面付近のみの検出で，南北端ははっきりしないものが多い。埋土は砂質のある黒灰色土が主体で，黄色パミスや白色パミスを多く含む単一層である。



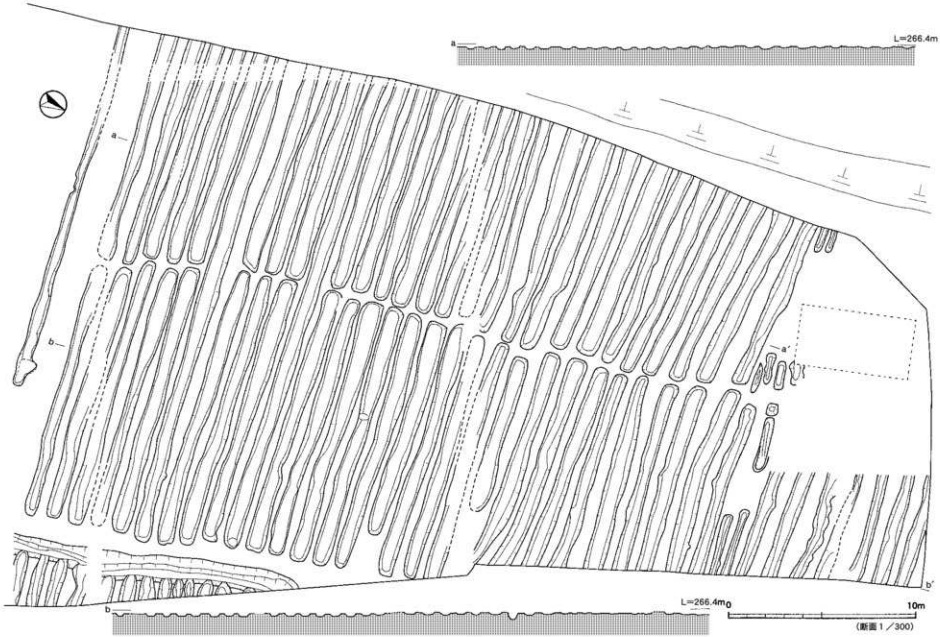
第112図　中央部　中世　畝状遺構５

畝状遺構８（第114，123図）

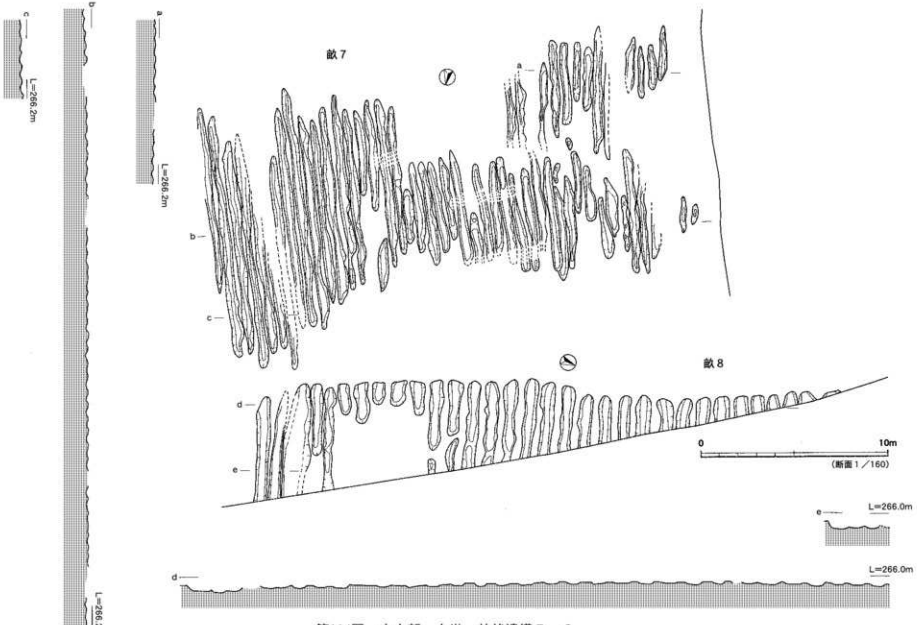
Ｌ－31～35区の　層で，畝状遺構７の東側に隣接して検出された。畝状遺構７の検出面から約50㎝下位に広がっており，東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間が整然と並んでおり，畝状遺構５，６とほぼ同じである。Ｌ－31区方向から南下しＫ－35区付近で東方向へ直角に屈曲する溝状遺構20に取り囲まれている。検出された畝間の規模は，幅30㎝前後，深さ約７㎝の断面形状が皿状を呈している。畝間の中心間の距離は約40㎝である。西端はほぼ揃っており，溝に沿ってやや蛇行し，東側は調査区外へと延びる。埋土は黄色ボラを含む黒褐色土であり，底面に凸凹が見られる。実際の掘り込み面は，隣り合う畝状遺構７と同程度の上位にあったと想定され，底面レベルも近いことから，畝状遺構５，６とほぼ同時期の可能性がある。

畝状遺構９（第115，123図）

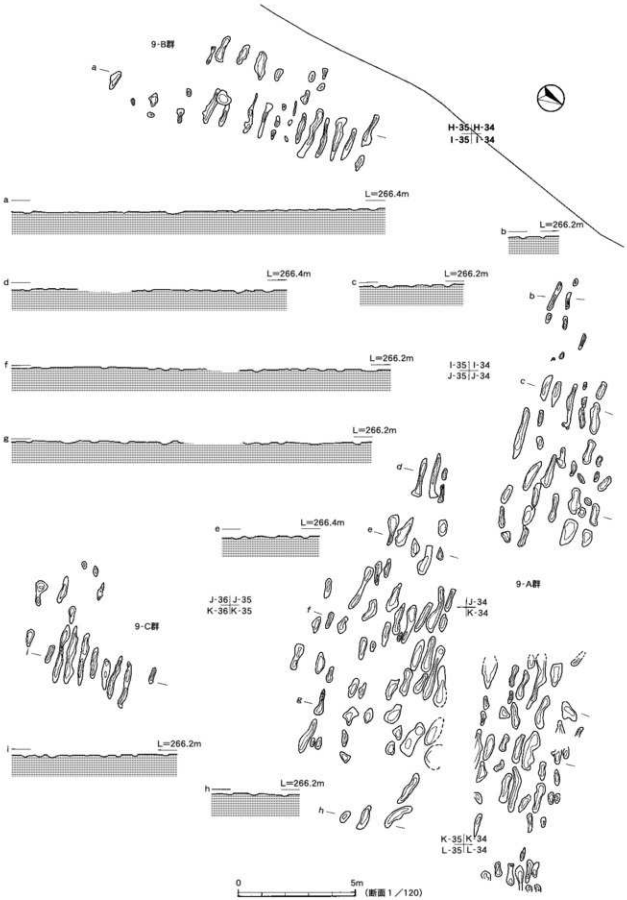
Ｈ～Ｌ－34～36区の　ａ層上面，畝状遺構７の南側に直交して隣接する不定型な細長い楕円形を呈した畝状遺構が３群検出された。　ａ層の黒色土が残存する部分に掘り込まれており，Ｇ，Ｈ－35，36区付近や溝状遺構21より東側は，現代の削平により　ａ層が無いため，この楕円形を呈した畝間は確認されなかった。検出された部分は残存状態があまり良くなく，底面付近のみが残っていた。平面形状は異なるが，方向はすべて略東西方向に延びている。埋土はやや粘質のある黒色土が主体であり，文明ボラと思われる黄色ボラが混在していた。畝間の規模は平均で，９－Ａ群が全長0.2～2.6ｍ，幅40㎝前後，深さ約９㎝，畝間中心間の距離が約50㎝，９－Ｂ群が全長30～240㎝，幅40㎝前後，深さ約10㎝，畝間中心間の距離が15㎝，９－Ｃ群が全長28～244㎝，幅30㎝前後，深さ約6.8㎝，畝間中心間の距離が約60㎝である。断面形状はボウル型を呈している。ここでは直線的な畝間は確認されず，同形状の畝間がＨ～Ｌ－34～36区全域に存在したと推定される。



第113図　中央部　中世　畝状遺構 6



第114図　中央部　中世　畝状遺構7，8



第115図　中央部　中世　畝状遺構９

畝状遺構10（第116，122図）

Ｌ－40～44区の　層上面にて，畝状遺構が検出された。38～44区にかけては，大規模な天地返しによって撹乱を受けたエリアであったが，Ｌ－40～43区の畦道部分にのみ包含層が良好に残されていた。幅24ｍ，長さ36ｍの狭小な部分であるが，調査を続けたところ　層上面にて畝状遺構の東端を確認することができた。畝状遺構は方向や場所により３群に分けることができる。これより各群ごとに述べる。10－Ａ群はＬ－43，44区で検出され，畝間の規模は幅60㎝前後，深さ約50㎝，断面形状が逆台形またはＵ字型を呈する。方向は略東西方向であり，直線的な細長い小溝状を呈すると思われる。東端は５～６条単位で揃っており，畝間の中心間は約１ｍである。埋土は黄色ボラ混じりの黒色土を主体とするが，上位は不安定で灰黄色砂質土や黒褐色土，黄色土ブロックなどが流れ込んでいる。10－Ｂ群はＬ－40～42区で検出され，畝間の規模は幅50㎝前後，深さ約12㎝，断面形状が浅い皿状を呈する。方向，形状，埋土は10－Ａ群と同じである。東端は溝状遺構22～24の手前で揃っており，畝間の中心間は約55㎝である。10－Ｃ群はＬ－42区で10－Ｂ群を切るようにして検出された。畝間は長さ32～94ｍ，幅40㎝前後，深さ約40㎝の楕円形をした小溝の集まりである。埋土は白色ボラ混じりの黒色土を主体とし，黄色土ブロックやボラなどが混ざる。これらの残存状況から，以前は中世～近世の畝状遺構が38～44区にも広がっていたと推測される。

畝状遺構11（第117，122図）

Ｇ～Ｉ－49～52区の　ａ層上面に，　層（文明ボラ）を埋土の主体とする楕円状を呈した畝状遺構が検出された。Ｈ－50区側は削平により消失しているが，畝間の列が南側と東側の斜面を下る階段状に規則的に並んでいる。畝については凸部が見られなかった。埋土は文明ボラが主体であり，一次堆積物と，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在しており，小規模な堆積を繰り返している。断面形状は浅い皿状を呈するものが大部分であり，底面に凸凹を持つ不定型なものが多い。畝状遺構は方向や場所により３群に分けることができ，各群ごとに記述する。

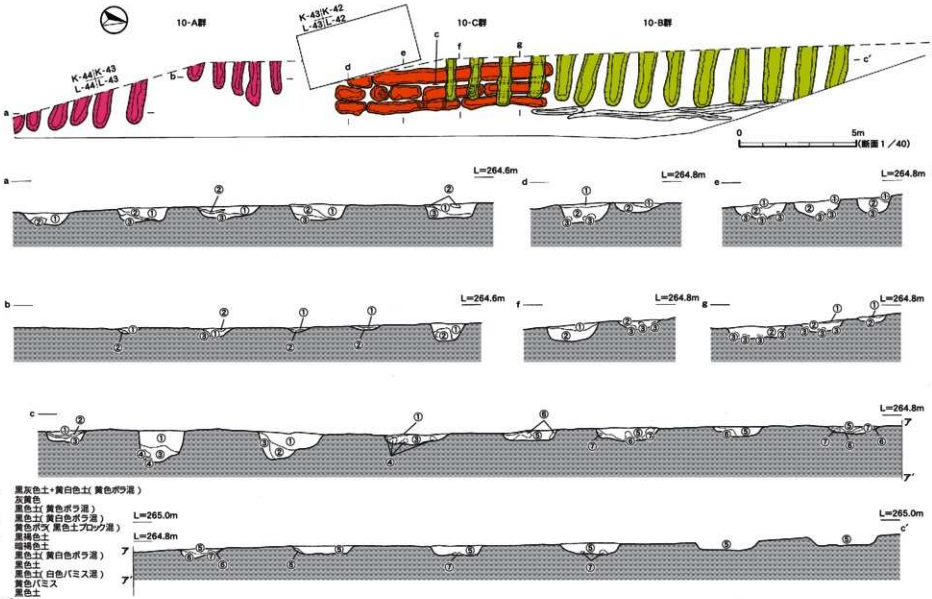
11－Ａ群は東側の谷へ向かって畝間の列が下っている。北西－南東方向に延びる畝間の規模は，全長約25ｍ，幅40㎝前後，深さ約25㎝である。両端や配列は不安定である。11－Ｂ群は，南東側へ向かって下るように配置されている。畝間の規模は全長約２ｍ，幅約45㎝前後，深さ約20㎝で北東－南西方向に延びる小溝状を呈している。11－Ｃ群は，畝間の列が南側の谷へ向かって下るように配置され，３群の中で最も広範囲に検出された。検出された畝間の規模は全長約15ｍ，幅35㎝，深さ約15㎝で北東－南西方向に延びる小溝状を呈している。52区以南は，削平により消失していた。

それぞれの群に切り合いが見られ概ねＣ群　Ｂ群　Ａ群の順に時間差が認められる。埋土などからほぼ同時期のものと考えられるがわずかに時間差を認めることができる。

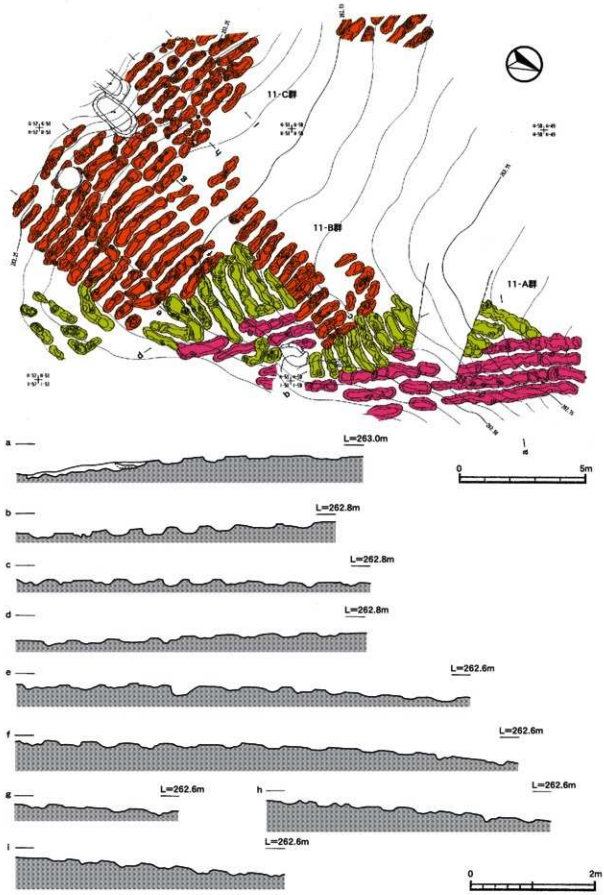
畝状遺構12（第118，123図）

Ｉ～Ｌ－28～32区の畝状遺構６直上にて，　－ｂ層（安永ボラ）を埋土の主体とする畝状遺構が検出された。現代の耕作面直下に検出され良好な残存状況ではないが，略南北方向へ直線的に延びる畝間が筋状に確認される。畝の凸部は見られず，畝間の底面付近のみの検出である。検出された畝間の平均値は，全長約４ｍ，幅20㎝前後，深さ約25㎝である。全長は不確定であるが，畝間の南端が揃っているところもある。埋土は安永ボラを主体としている。

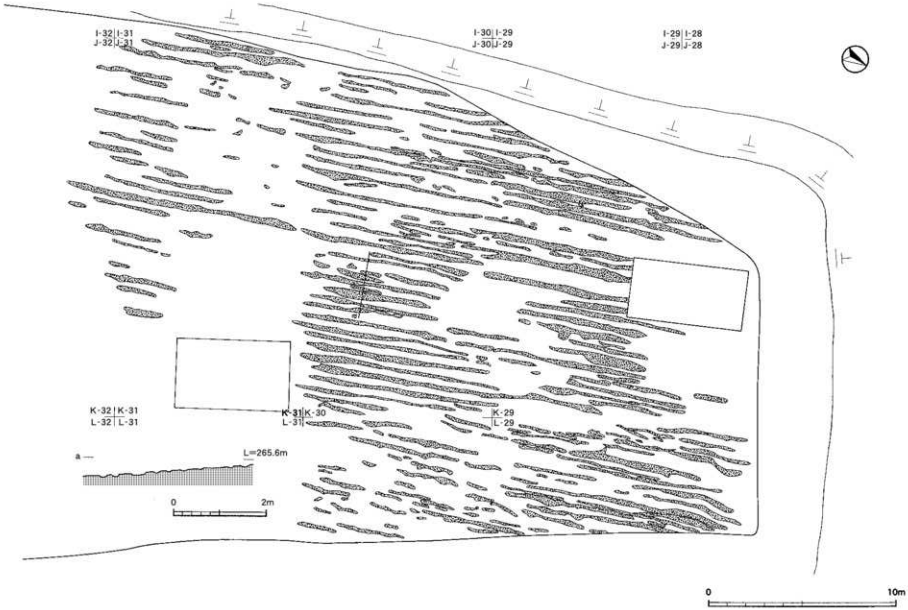
⑷　土坑（第119～123図）



第116図　中央部　中世　畝状遺構10



第117図　中央部　中世　畝状遺構11



第118図　中央部　近世　畝状遺構12

中世〜近世の土坑は，計52基が検出された。いずれも　層での検出であり，埋土は白色パミスを含む黒色土または褐色土が中心である。また，黒色土や黄褐色土などがブロック状に混在しているものも見られた。Ｋ，Ｌ‐25〜27区に小型の土坑の集中が見られ，Ｊ，Ｋ‐29〜36区に細長い楕円形を呈した土坑が集中している。大規模な天地返しによる撹乱が無ければ，調査区全域から検出されたと推測される。

土坑161〜179は，平面径50㎝以下の円形（　類）を呈する。土坑161〜175は平面径の平均が30 9　25 6㎝で，深さが７〜25㎝と比較的浅いものであり，土坑176〜179は平面径の平均が25　24 5㎝で，深さが31〜32㎝とやや深いものである。ともに埋土は白色パミスを含む黒色土が主体であるが，白色パミスの混ざり方は均一ではなく，上位と下位で異なるものもある。土坑163以外は，断面形態が逆台形またはＵ字型を呈する。

土坑180〜183は，平面径が１ｍ前後のやや大型のもの（　類）であり，平面径の平均は97 2　84 2㎝で，ほぼ円形を呈する。深さ18〜33㎝で，土坑183以外は浅めである。

土坑184〜209は，楕円形を呈するもの（　類）である。その中で，短めのものと細長いものに分けることができる。土坑184〜195は，平面径の平均が151 5　67 1㎝で，深さが８〜40㎝と長径が１〜２ｍ前後のものである。断面形状は床面から緩やかに立ち上がる皿状またはレンズ状を呈するものが大半を占め，土坑195は不定型なボウル状を呈す。土坑191，192は一部消失しており，全体像は不明である。土坑196〜209は，平面径の平均が277 3　62 5㎝で，深さが10〜38㎝と長径が３〜４ｍ前後もある細長い楕円形を呈するものであり，土坑202，204のように長方形に近いものも含まれる。底面に平坦面を持つ断面形状が皿状を呈するものが多く，貯蔵目的の土坑である可能性が高い。

土坑210〜212は不定型なもので，平均は248 3　47㎝で，深さが40〜116㎝である。土坑210は底面に小ピットを持ち，径が10㎝程度の柱を抜き取った可能性がある。土坑211，212は当初溝状遺構として取り扱っていたが，つながっておらず隣接した土坑として掲載した。

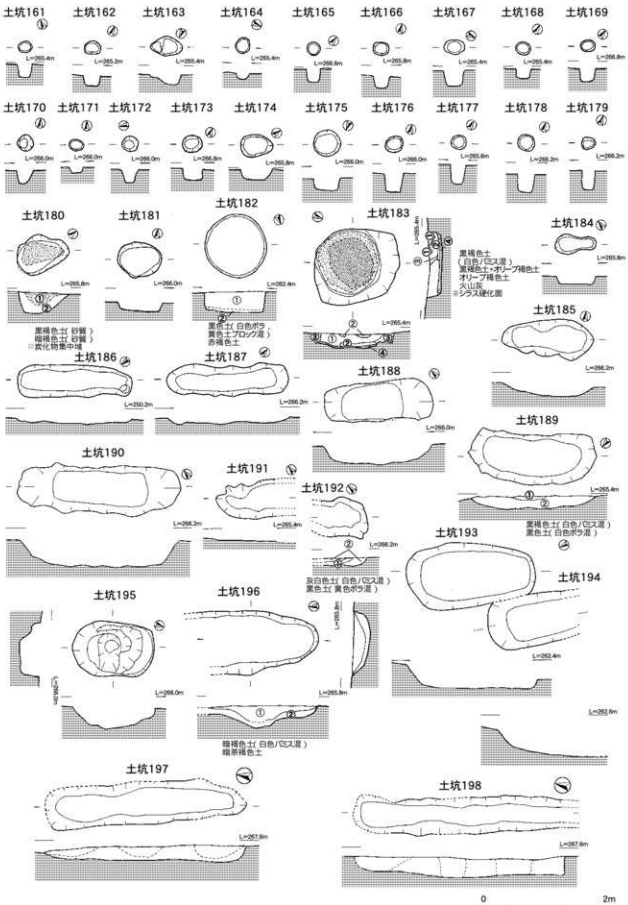
安永ボラを含む埋土から時期的な前後関係を特定することは困難であるが，遺構の切り合い状況から時期差を特定することができるものもある。すべて現代の畑面の下部から検出されており，大規模な文明ボラのボラ抜き後に作られた畝状遺構を切るもの，逆に畝状遺構に切られているものもある。このことから同じ中世〜近世の土坑群として取り扱ったが，多少の時間差がある。

土坑182（第119図）

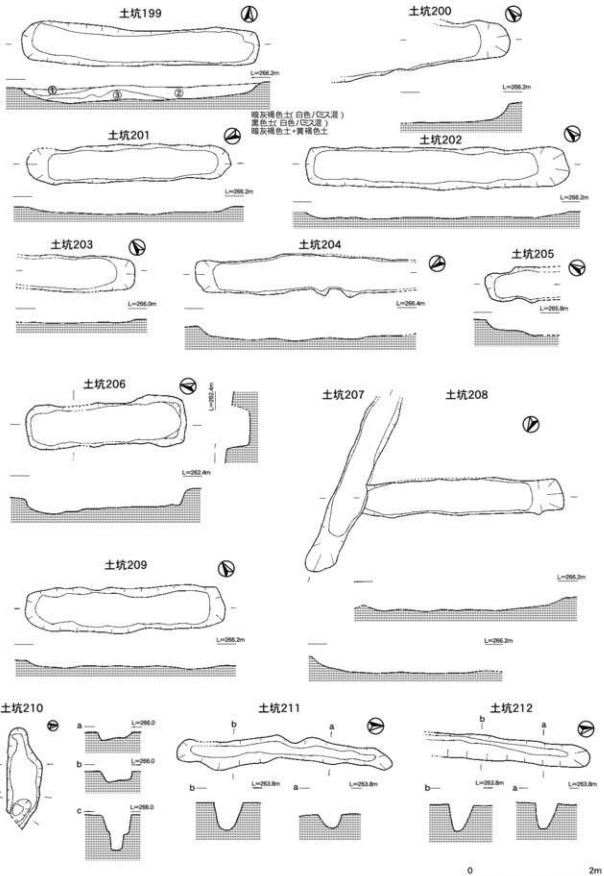
Ⅰ‐51区の　ａ層上面で検出された。平面形は100　96㎝の円形を呈し，検出面からの深さは32㎝である。埋土は白色ボラ混じりの黒褐色土であり，底面に赤橙色をした変色が見られた。

土坑183（第119図）

Ｋ‐38区の　層上面で検出された。平面形は137　119㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは19㎝である。断面形状は長方形を呈し，底面に平坦面を持つ。埋土は黒褐色土が主体であり，底面付近に円盤状の硬化面が確認された。硬化面の平面形85　70㎝，厚さ２〜４㎝であり，土坑の底面全体にシラスが敷き詰められたものと思われる。硬化面の表面はピンク色に変色しており，粒子が細かく粘性を持つため，焼成を受けた可能性がある。



第119図　中央部　中世～近世　土坑(1)

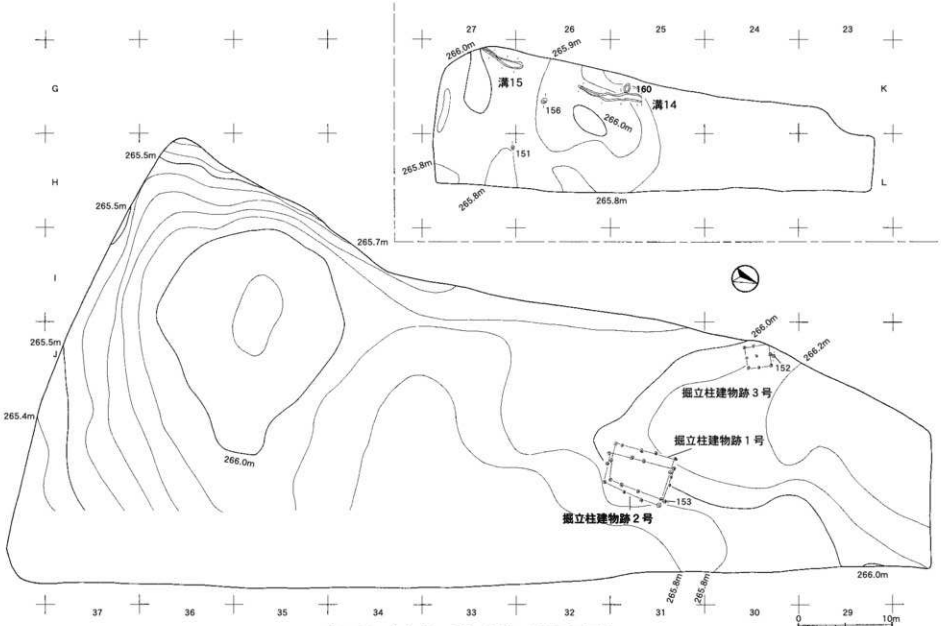


第120図　中央部　中世～近世　土坑(2)

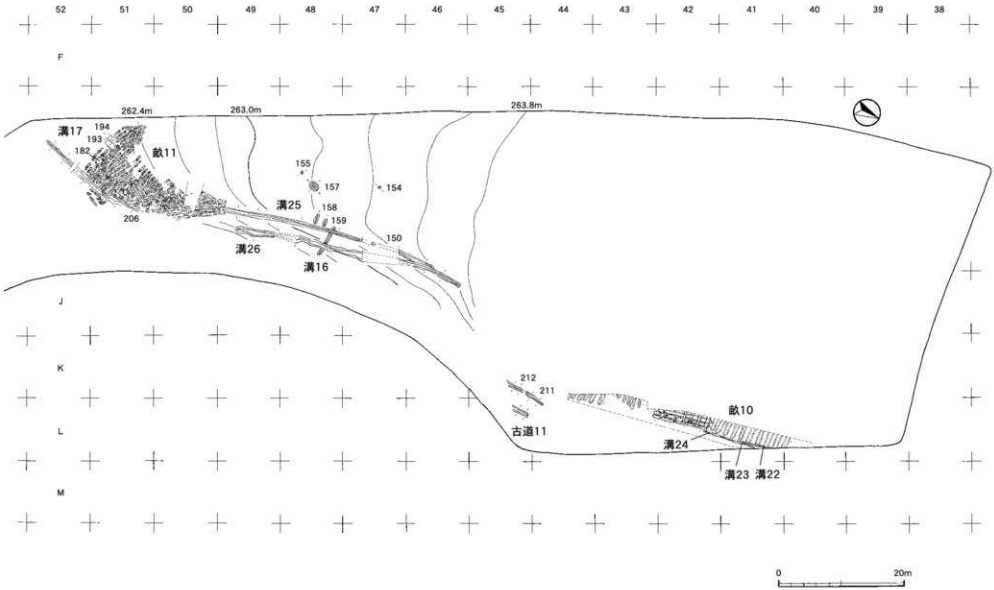
第15表　中央部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
127	63	57	19
128	50	47	32
129	70	61	28
130	72	46	11
131	103	76	21
132	109	51	24
133	83	48	25
134	94	53	21
135	109	46	19
136	134	72	33
137	25	20	17
138	29	28	18
139	23	19	14
140	14	13	15
141	35	29	11
142	35	32	21
143	34	33	38
144	50	38	30
145	66	65	25
146	48	44	50
147	18	18	34
148	107	91	26
149	140	45	22
150	40	37	38
151	43	22	16
152	34	39	13
153	29	23	14
154	22	22	20
155	28	26	45
156	61	56	69
157	153	113	59
158	167	46	30
159	117	41	20
160	82	62	13
161	24	18	21
162	26	22	17
163	52	32	17
164	26	26	7
165	22	22	21
166	26	22	20
167	34	24	25
168	25	21	15
169	25	20	21

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
170	28	27	21
171	23	18	9
172	27	25	23
173	31	29	19
174	51	36	16
175	44	42	20
176	30	28	32
177	24	23	32
178	28	28	31
179	20	20	32
180	81	64	33
181	71	58	18
182	100	96	32
183	137	119	19
184	64	32	14
185	144	64	18
186	182	51	13
187	195	48	10
188	171	64	30
189	250	80	20
190	255	75	40
191	100	60	8
192	69	60	12
193	204	103	28
194	127	84	25
195	130	85	33
196	176	103	35
197	316	69	25
198	334	55	28
199	375	54	19
200	155	55	38
201	322	55	13
202	415	64	10
203	170	55	10
204	305	65	28
205	88	44	25
206	256	83	25
207	295	54	20
208	358	54	20
209	317	65	12
210	162	55	116
211	333	46	40
212	250	40	40



第121図　中央部　古代～近世　遺構配置図(1)



第122図　中央部　古代～近世　遺構配置図(2)